甲府市文化財調査報告 42

史跡 武田氏館跡XIV

— 史跡武田氏館跡第１期整備事業（大手門周辺ゾーン）に伴う発掘調査報告書 —

2009

甲府市教育委員会

序

国指定史跡武田氏館跡は、永正16年（1519）に武田信虎によって築かれ、信玄・勝頼と戦国大名武田氏三代が領国統治の拠点とした居館です。県都としての本市の歴史は、躑躅ヶ崎の地に築かれた武田氏館を中心に成立した中世城下町「甲斐府中」から始まっております。したがいまして、武田氏館跡はわが国の歴史を語る上で重要な史跡であるばかりではなく、本市にとりましては、原点ともいえる貴重な史跡であります。

本市にとっても重要な史跡を保護・保存し、将来に伝えるとともに、より多くの方に武田氏館跡の歴史や当時の姿を理解いただくことを目的として、平成16年度に『史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画』を策定いたしました。策定に至る経過の中で整備範囲や内容についての検討がなされましたが、全体を４期に分割して整備事業を推進することとなり、その第１期目の対象地として当時の正門にあたります大手門周辺から整備に着手することと決定しました。

本書に収録しましたのは、大手門周辺ゾーンのうち、大手馬出から館跡東側の外郭線となっております惣堀までの発掘調査の記録です。成果としましては、武田氏館跡の正門を守るために築かれておりました大手石塁の全容が明らかになるとともに、重複する位置の下層からは武田氏の築城技法の一つと言われております三日月堀が発見され、大きな話題となりました。

本書は、貴重な学術成果を広く活用いただくことを目的に刊行しておりますが、武田氏研究や中世城郭研究のみならず、今後の史跡整備や歴史教育の場など多方面でご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、このたびの発掘調査にあたりご指導、ご協力を賜りました文化庁、山梨県教育委員会ならびに地元自治会の皆様をはじめといたします関係各位に厚く御礼申し上げますとともに、史跡武田氏館跡の整備事業につきまして、引き続きご理解とご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成21年３月

甲府市教育委員会

教育長　奥　田　　理

例　言

1．本書は、山梨県甲府市古府中町・屋形二丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、史跡整備事業に伴う発掘調査であり、甲府市教育委員会が主体となり実施した。

3．本調査に係る経費は、国庫補助金ならびに山梨県補助金の交付を受けている。

4．本発掘調査は、史跡武田氏館跡保存整備委員会の指導の下、佐々木満（文化振興課文化財主事）が担当した。

5．発掘調査の期間及び面積は以下の通りであるが、調査地点は重複があるため実際の調査面積とは合致しない。実質的な総調査面積は1650㎡である。

平成15年度	平成16年２月５日	～	平成16年３月16日	調査面積　約200㎡
平成16年度	平成16年11月８日	～	平成17年３月24日	調査面積　約940㎡
平成17年度	平成17年４月５日	～	平成18年３月30日	調査面積　約950㎡
平成18年度	平成18年５月15日	～	平成19年３月30日	調査面積　約90㎡
平成19年度	平成19年11月14日	～	平成20年２月18日	調査面積　約400㎡
平成20年度	平成20年12月１日	～	平成21年３月31日	調査面積　約300㎡

6．本書の主たる執筆は、佐々木満が行い、図化作業は栗田かず子・分部綾子が行った。

7．史跡整備地全体の国土座標測量は、(株）昭和測量に委託し、発掘調査区の国土座標測量及び航空写真測量等は、(株）シン技術コンサルに委託した。

8．出土品の保存処理業務については、(財）山梨文化財研究所に委託した。

9．土壌の自然科学分析については、(株）パレオ・ラボに委託し、第４章で鈴木茂の報告を掲載した。

10．本書の編集は、望月秀人（文化振興課長）を責任者として佐々木満が行った。

11．本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。

12．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。（敬称省略）

文化庁記念物課・山梨県教育委員会学術文化財課・(財）山梨文化財研究所・
(株）丸光建設・(株）アセラ・グリーン

浅野　晴樹	秋山　太郎	関間　俊明	河西　克造	佐々木健策	畑　大介
橋口　定志	水野　茂	宮武　正登	柳川　英司	山下　孝司	八巻　孝夫

13．発掘調査参加者

青柳圭一郎	赤沢　雅之	雨宮　小春	雨宮　英郎	新谷　典宏	池谷富士子
岡　悦子	金子　春枝	金井いく代	金井　信次	倉田　勝子	岸本　美苗
栗田かず子	工藤　忠誠	小池　孝男	小池　幹子	中村　孝一	小宮　通子
阪本　晶子	坂本しのぶ	坂本　道雄	佐田　金子	佐藤美喜男	末木　千並
菅沼　芳治	高橋　幸税	武井美知子	長沢　晴雄	長澤　由人	中澤　嘉洋
中村　孝一	西久保民子	花曲　敬子	早川みどり	波木井祥和	樋口　進
平沢　則子	平賀　早苗	福澤　雅樹	古屋袈裟男	保坂　秋蘭	保坂　哲
堀川　政洋	村田　勝利	望月　宏美	望月貴美子	渡辺百合子	山下　明
若狭　宗晴	分部　綾子				

調査組織

事務局（平成20年度）甲府市教育委員会文化振興課

文化振興課長　望月秀人（事務職員）
文化財係長　荻原寛二（事務職員）・望月祐仁（事務職員：文化財主事）
主　　任　伊藤正幸・志村憲一・伊藤正彦・平塚洋一・佐々木満(事務職員:文化財主事)
嘱　　託　林陽一郎・中村里恵・三神千佳

史跡武田氏館跡保存整備委員会

委員長　荻原三雄（財団法人　山梨文化財研究所所長）
副委員長　山本光信（相川地区自治会連合会会長）
委　員　清雲俊元（山梨郷土研究会理事長）
小野正敏（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館教授）
笹本正治（国立大学法人　信州大学教授）
鈴木　誠（東京農業大学教授）
伊藤裕久（東京理科大学教授）
土橋勝夫（宗教法人武田神社代表役員宮司）
谷川義孝（甲府市議会議員）
渡辺礼子（甲府市議会議員）

凡　　例

1．発掘調査の測量においては、日本測地系Ｘ－36850.00・Ｙ－5360.00を基軸として５ｍグリッドを設定している。
2．本書に掲載した地図は、平成14年要部修正50万分の１地方図（４）関東甲信越、平成３年度甲府市都市計画図2500分の１・10000分の１、史跡武田氏館跡指定地1000分の１現況図を用いた。
3．遺構土層断面の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1997後期）に基づいている。
4．遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的にトレンチは1/80か1/60、土坑は1/40、出土遺物は1/3であるが、大型の遺構や陶磁器・石製品・金属製品は、図中に示した各スケールを参照願いたい。
5．セクション図に表記されている水平線の数値は、海抜高度を表し、単位はｍである。また、セクションポイント表記は、アルファベットを使用している。
6．遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けているが、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。
7．本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第５章末尾に記載した。
8．本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

目　　次

序
例　言・調査組織・凡　例
目　　次
挿図・挿表目次

第１章　武田氏館跡の概要 …… 1
第１節　立地環境 …… 1
第２節　歴史背景 …… 1
第３節　武田氏館跡の構造 …… 2

第２章　調査の概要 …… 5
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査の目的 …… 5
第３節　調査区とその周辺の概要 …… 8
第４節　調査の方法 …… 8
第５節　調査の経過 …… 11

第３章　遺構と遺物 …… 14
第１節　石塁・石組 …… 14
第２節　堀　跡 …… 19
第３節　土　塁 …… 26
第４節　虎　口 …… 29
第５節　溝　跡 …… 33
第６節　井戸跡 …… 36
第７節　建物跡 …… 36
第８節　土　坑 …… 36
第９節　トレンチ及び遺構外出土遺物 …… 38

第４章　自然科学分析 …… 69
第１節　武田氏館跡大手１号堀跡・２号堀跡（三日月堀）堆積物の花粉化石 …… 69
第２節　武田氏館跡大手１号堀跡・２号堀跡(三日月堀)堆積物のプラント・オパール …… 78

第５章　考　　察 …… 83
第１節　史跡武田氏館跡大手の構造と変遷 …… 83
第２節　２号堀跡（大手三日月堀）の評価と年代 …… 84
第３節　大手石塁の評価と年代 …… 86

第６章　結　　語 …… 89

写真図版
付図：調査区全体図、大手石塁南階段平面図

図版・表目次

図1　史跡武田氏館跡位置図 …… 3
図2　武田氏館跡と関連史跡分布図…… 3
図3　武田氏館跡曲輪配置図 …… 4
図4　武田氏館跡史跡範囲及び
　　整備事業範囲図 …… 7
図5　大手周辺地形と発掘調査位置図 … 9
図6　史跡武田氏館跡グリッド図……10
図7　大手石塁平面図・断面図……16
図8　大手石塁立面図 ……17
図9　大手石塁横断図 ……18
図10　1号堀跡 ……21
図11　2号堀跡 ……22
図12　惣堀北側 ……24
図13　惣堀土橋北側 ……25
図14　惣堀土塁（トレンチ1・8）……27
図15　惣堀土塁（トレンチ4・16）……28
図16　惣堀北虎口階段 ……30
図17　惣堀北虎口階段南側 ……31
図18　惣堀北土橋石積み立面図 ……32
図19　惣堀南土橋石積み立面図 ……32
図20　溝跡・井戸跡 ……35
図21　建物基壇跡 ……37
図22　1号～3号土坑 ……37
図23　トレンチ2 ……39
図24　トレンチ3 ……40
図25　トレンチ9 ……42
図26　トレンチ10・12・13 ……43
図27　トレンチ11 ……44
図28　トレンチ14・15 ……45
図29　大手石塁出土遺物(1)……46
図30　大手石塁出土遺物(2)……47
図31　大手石塁出土遺物(3)……48
図32　大手石塁出土遺物(4)……49
図33　大手石塁出土遺物(5)……50
図34　大手石塁出土遺物(6)……51
図35　大手石塁出土遺物(7)……52
図36　大手石塁出土遺物(8)……53
図37　大手石塁(9)、1号・2号堀跡、
　　1号石列出土遺物 ……54
図38　惣堀土塁出土遺物(1) …… 55
図39　惣堀土塁出土遺物(2) …… 56
図40　階段、土橋、溝跡、井戸跡、
　　建物基壇跡出土遺物 …… 57
図41　1号土坑出土遺物 …… 58
図42　2・3号土坑、グリッド出土遺物(1) … 59
図43　グリッド出土遺物(2) …… 60
図44　グリッド出土遺物(3) …… 61
図45　金属製品 …… 62

表1　史跡武田氏館跡試掘調査及び報告書一覧表… 6
表2　出土遺物観察表 …… 63

写真図版目次

武田氏館跡遠景 …… 90
武田氏館跡全景 …… 91
調査区近景 …… 92
大手調査区全景…… 93
大手石塁全景 …… 94
大手石塁立面 …… 95
2号堀跡全景 …… 96
大手石塁調査状況 …… 97
大手石塁調査状況 …… 98
1・2号堀跡調査状況 …… 99
2・3号堀跡、惣堀調査状況 ……100
惣堀土塁調査状況 ……101
惣堀北虎口、南北土橋石積み調査状況……102
惣堀南虎口、6号溝跡、1号井戸跡、
2号石列調査状況 ……103
土坑、3～5号石列調査状況 ……104
トレンチ2・3・9・12調査状況……105
トレンチ11・15調査状況、作業状況、
現地説明会 ……106
出土遺物 ……107～116

第１章　武田氏館跡の概要

第１節　立地環境

史跡武田氏館跡は、甲府盆地北部の山梨県甲府市古府中町、屋形三丁目、大手三丁目地内に所在する（図１）。水ヶ森山地と甲府盆地との境界に位置する上積翠寺町の山塊を源流とする相川が形成した扇状地開析部の標高約350mに武田氏館跡は占地している。三方を山に囲まれた相川扇状地の西側には相川、東側には藤川が南流しており、両河川を活かした天然の要害とみることも可能である。

相川扇状地東縁に連なる竜華の峰の南端部は、尾根が半島状に突出しており、かつてはツツジが多かったとされるこの尾根は「躑躅ヶ崎」、あるいは「花岡山」と呼ばれてきた。そのため、麓に築かれた武田氏館は一般に「躑躅ヶ崎館」の名前で親しまれている。

武田氏館の造営とともに、相川扇状地扇央部を中心として城下町が展開した。城下町は南北方向の５本の基軸街路とそれを結ぶ東西街路によって形成されていたと考えられるが、館跡西側では相川に向かう急斜面が形成され、東も藤川によって侵食された急斜面が続くことから、立地の良い場所を中心に城下町が展開したと考えられる。

第２節　歴史背景

室町後期の甲斐国内の情勢は、応永23年（1416）の上杉禅秀の乱に加担した甲斐守護武田信満の敗死を契機として、武田氏の影響力は大きく低下し、国人層の台頭と鎌倉府と結んだ逸見氏の台頭により国内は混迷を深めていた。足利将軍家の意向を受け、信濃守護小笠原氏の助力を得た武田信元が京より帰国を果たしたが、信重、信守、信昌の治世は有力国人衆の反抗などによって決して磐石ではなかった。加えて同族内にも火種を抱えており、信昌の代には嫡男信縄と弟である油川信恵の間で家督相続をめぐって国人衆を巻き込んだ内部抗争に発展した。信昌の隠居によって信縄と信恵の間に和睦が成立したが、信昌と信縄の死によって家督は若干14歳の信虎（信直）が継ぐこととなった。

このときの信虎を取り巻く社会情勢は、家督を狙う近隣の親族衆とともに、甲府盆地の北に今井氏、西に大井氏、南に穴山氏、富士北麓の郡内地域に小山田氏などの有力国人が割拠し、虎視眈々と勢力拡大を窺っていたが、信虎は対抗勢力を次々と屈服させ、強力に甲斐国内の統一を進めた。

信虎の居館は、石和の川田館（現在甲府市川田町）と言われ、現在でも方一町の館の区画が残されている。永正16年（1519）には川田館から大然の要害を形成していた相川扇状地開析部の躑躅ヶ崎の地に新たな居館を築いた。この居館こそ戦国大名武田氏三代（信虎・信玄・勝頼）が本拠とした武田氏館（通称躑躅ヶ崎館）である。信虎は、館を移転するとともに館周辺への国人衆の集住を強制し、家臣団の組織化を進めたが、『勝山記』によると、栗原信友らが離反する動きも出ていることから、決して平坦な道のりではなかったことが窺える。

また、館を築いた翌年（1520）には背後に位置する積翠寺丸山（要害山）に城を築いているが、大永元年（1521）に駿河から侵攻してきた今川方の福島氏を飯田河原と上条河原において撃破している。こうした外敵に備えて、大永３年（1523）には扇状地南西端の尾根上に湯村山城を築城するとともに、翌年（1524）には扇状地南東端の独立丘である一条小山に砦（現甲府城跡）を築き、館とその城下町の防備を固めている（図２）。

武田氏館跡は、天正９年（1581）に武田勝頼が韮崎市に所在する新府城へ本拠を移転するまでの約62年間使用され、中部から東海地域に拡大を続けた武田領国の政治・経済・文化の中心として機能した。武田氏滅亡後に甲斐を領有した織田氏・徳川氏・豊臣氏は、再び統治拠点を甲府と定め、武田氏館跡に改修を加えつつ利用したと考えられる。

第３節　武田氏館跡の構造

武田氏館跡は、二町四方の方形単郭の主郭を中心として、周囲にいくつかの曲輪群が取り巻いている（図３）。武田氏の居所であった主郭には、東・西・北に虎口が設けられており、東が大手と言われている。現在では甲府駅北口から延びる県道武田通りに直結する形で通路が開かれているが、この通路は大正８年（1919）の武田神社造営時に参道として切り開かれたもので、戦国期には堀と土塁が連続していた場所であった。

『高白斎記』の記述からみた武田信虎による館の造営は、永正16年（1519）８月15日に鍬立を行い、12月20日に移転しており、約４ヶ月という短期間を考慮すると、初期の姿は方形単郭の主郭のみであったと考えられる。その後、天文２年（1533）と天文12年（1543）の２度の火災を経て徐々に上郭の整備が進められたと考えられる。平成７・８・10年度に実施された発掘調査によって、主郭全体が南北方向に上中下の３段の平場で構成されていたことが明らかになっており、中段から下段にかけて庭園遺構が検出されている。

また、現状変更に伴う主郭南土塁と主郭大手土橋の試掘調査等によって、現況の規模よりも一回り小さな上郭の堀と土塁、堀に架かる土橋が検出されたことから、16世紀中葉以降に大規模な造成を受け、既存規模に姿を変えていることが明らかとなっている。

武田氏館跡の構造を考える上で大きな画期となっているのは、天文20年（1551）の造営記録が残る西曲輪である。武田義信の婚儀に伴い主郭の隣りに西館として新造された西曲輪は、一町×二町の規模を誇るが、それ以前に存在したであろう家臣団屋敷も含め、大規模な屋敷割の変更が行われたと推測される。曲輪の南北には枡形虎口と馬出土塁が設けられ、北側枡形虎口の発掘調査では虎口の内外で門跡礎石などが検出されており、武田氏段階の虎口構造の一部が明らかにされている。

西曲輪の北には味噌曲輪が増設されており、江戸期の古絵図等では「蔵屋布」、「味噌蔵」などの名称が付されていることから、食糧庫ではないかと推測されている。他にも主郭北側には稲荷曲輪、無名曲輪、御隠居曲輪が連続して存在していることを考慮すると、武田氏の勢力が拡大した武田信玄以降には、付属曲輪群も含めた館の拡充が進んだものとみられる。

館の拡幅と同時に館跡の周囲に残る「道軒屋敷」（武田道遥軒信綱）、「十屋」（土屋右衛門尉昌次）、「天久」（武田典厩信繁あるいは信豊）の字名から重臣屋敷が取り囲んでいたと考えられる。西側には「古八幡」（府中八幡社）の字名が残り、東側では平成18年度に実施した字三角の調査によって、鍛冶工人の居住域の存在が確認されるなど、館の近くであっても様々な階層の屋敷群が混在した城下町が展開していたと考えられる。

武田氏館跡南側には梅翁曲輪が造営されているが、江戸初期に成立したとみられる恵林寺蔵「甲州古城勝頼以前図」によると、梅翁曲輪は徳川家康の家臣平岩親吉が築いたと記載されている。梅翁曲輪の名前の由来となっている梅翁についても、豊臣秀吉の家臣加藤光泰の家老であった井上梅雲斎に由来するとした説もあり、いずれも徳川氏・豊臣氏の関与が窺われることから、現時点では武田氏滅亡後に築かれた新しい曲輪であるとの見方が強い。

その点については、主郭においても北西隅に野面積みの天守台が存在するとともに、中曲輪の発掘調査によっても石垣が検出されるなど、近年になって武田氏滅亡後の大規模な改修の痕跡が各所で確認されつつある。これらの様相は、武田氏以後の勢力が甲府城築城以前に武田氏館跡を拠点とするために積極的に改修を進めた結果であり、武田氏館跡が現在の姿に至ったのは、徳川氏・豊臣氏の家臣団による織豊期と考えられる。

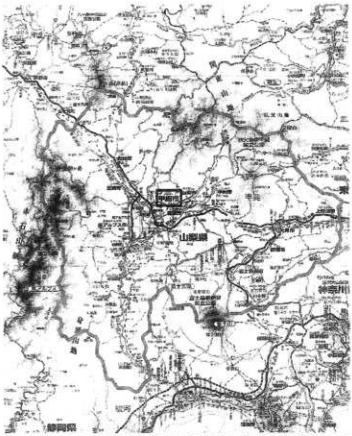


図1　史跡武田氏館跡位置図

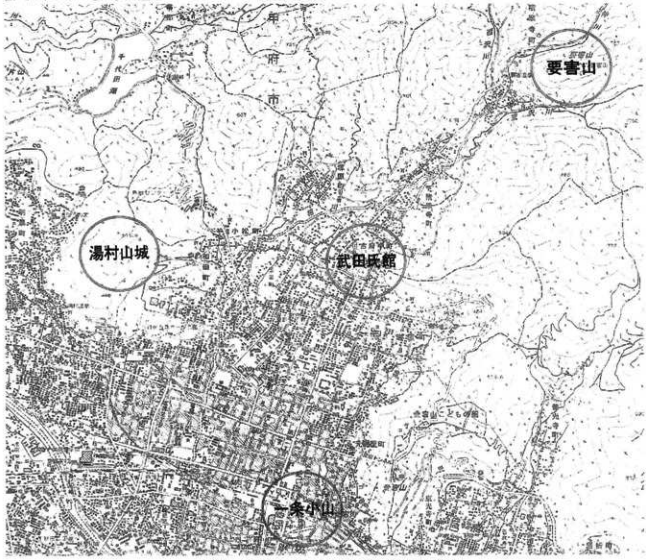


図2　武田氏館跡と関連史跡分布図

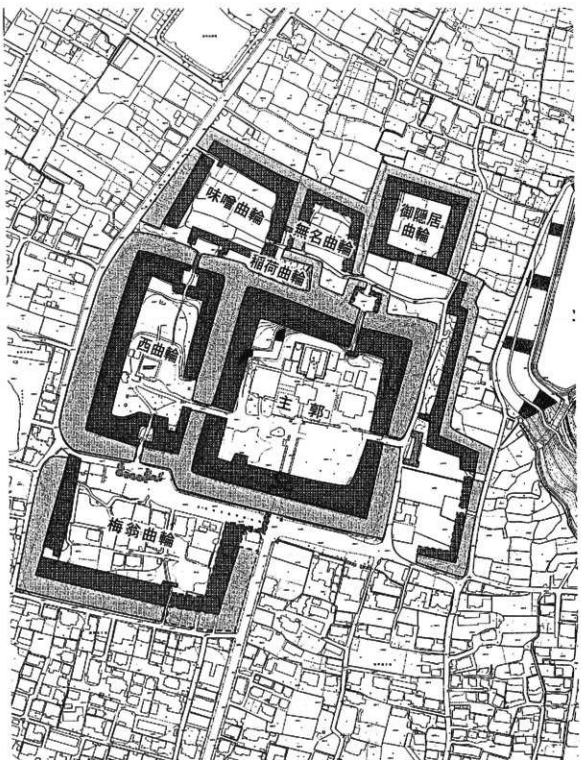


図3 武田氏館跡曲輪配置図

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

武田氏館跡は、昭和13年（1938）年５月30日付けで国史跡に指定され、範囲は武田神社境内地及びその周辺一帯で指定面積は約17万㎡となっている。平成６年（1994）10月には紆余曲折を経て『史跡武田氏館跡保存管理計画』を地元合意の下で策定し、史跡指定区域内の取り扱いについて管理基準を定め、史跡の保護とともに史跡整備へ向けた取り組みを行うこととなった。

『史跡武田氏館跡保存管理計画』の策定を受け、甲府市教育委員会では史跡整備に向けた事業を進めるため、平成７年７月には諮問機関として、学識経験者と地元自治会代表、行政が参画した「史跡武田氏館跡整備活用委員会」を組織し、整備基本構想ならびに整備基本計画の策定に向けた作業に着手した。その後、平成７年度から平成14年度にかけて武田氏館跡の主たる曲輪群を中心として、遺構の残存状況の確認や曲輪内の変遷状況の把握、範囲確認など史跡整備を実施する上で不可欠となる考古学的な情報収集を目的として試掘調査を実施してきた（表１）。

その成果を基に平成15年度から整備基本構想・整備基本計画策定に向けた検討、準備作業を行い、平成16年度には『史跡武田氏館跡整備基本構想・整備基本計画』（以下では、基本構想・基本計画という。）を策定し、整備事業を推進することとした。策定に至る過程において、武田氏館跡全体の整備範囲や手順について検討がなされ、全体を大きく４つの区域に分割し、武田氏館が築かれてちょうど500年の節目を迎える平成31年（2019）を目途に事業を展開することを決定した（図４）。整備順序については、大正８年（1919）に武田神社が創建され、その際に開削された南側の神社参道を多くの来訪者が武田氏館跡の正面であると誤認識している現状を勘案し、戦国期の武田氏館跡の正門周辺の復元を目的として大手門周辺ゾーンが第１期整備事業として位置づけられた。翌年には新たに学識経験者を主体とした「史跡武田氏館跡保存整備委員会」を設置し、発掘調査や設計内容の検討など細部に及ぶ協議の上に事業を展開している。

甲府市教育委員会では、基本構想・基本計画の策定作業と並行して平成15年度から大手門周辺の発掘調査に着手することとし、平成15年12月８日付け教発第12－59号で史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請書を文化庁長官に提出した。平成16年１月22日付け15委庁財第４の1254号で許可を受け、平成16年２月５日から大手東側の発掘調査に着手している。大手東側の調査は平成18年度まで主体的に実施し、平成19・20年度には整備工事の着手に伴い、大手石塁及び惣堀周辺で実施された整備工事に付帯した小規模な確認調査を実施している。

第２節　調査の目的

基本構想・基本計画に基づき、第１期整備事業に位置づけられた大手門周辺ゾーンのうち、直近の整備工事範囲として主郭土橋正面に位置する馬出から戦国期からの古道でもある市道鍛冶小路線にかけての一帯の整備が検討された。同地点では平成12年度に試掘調査を実施しているが、整備の時期設定や整備工事範囲の確定、整備方法を具体的に検討するためには、情報量が不十分であった。そのため、遺跡を保護する形で面的な整備を推進するための手段として、トレンチによる部分的な確認ではなく、一定の面積を面的に調査する必要があった。

武田氏館跡大手門周辺を整備するにあたり、大手全体の構造と変遷の解明が課題とされていたが、特に大手門正面には大手石塁、惣堀、土塁、土橋等現状で地上に現れている構造物の歴史的な検証を行うことが最優先であり、大手門の防御施設と考えられる大手石塁の構造とその外側に展開する堀や土塁の往時の規模や範囲、あるいは年代を明らかにすることが求められた。合わせて、各平場内の様相や性格、構造物との関係を確認することも重要であり、大手門正面の平場と隣接する下段部周辺が早

平成７～１４年度史跡武田氏館跡発掘調査

年度	調査地点	調査期間	調査面積	調査概要ほか
7	味噌曲輪	H7. 12. 5～H8. 3. 31	３６８㎡	東土塁の断ち割りによる構造把握、柱穴列等確認
	笹堀東部	H7. 12. 6～H8. 3. 28	１６２㎡	堀底と石積検出
8	味噌曲輪	H8. 4. 1～H8. 10. 17	３６８㎡	西土塁の門跡、馬出土塁・井戸跡・建物基壇等確認
	中曲輪南部	H8. 4. 5～H8. 10. 17	３３５㎡	池泉、石塁、庭園と土塁基底部石垣確認
	笹堀中央部	H8. 12. 8～H9. 3. 24	１３０㎡	堀底と複数の形態を持つ石積確認
9	西曲輪	H9. 7. 22～H9. 12. 23	６５０㎡	北側掘形虎口の時期変遷と門跡を確認
	武出通り南北線	H9. 10. 14～9. 12. 24	６６０㎡	井戸跡、集石墓、溝跡、柱穴等確認
	笹堀西部	H10. 1. 26～H10. 3. 30	１５０㎡	石列、石積確認
10	神社社務所増築	H10. 7. 27～H10. 11. 30	４６０㎡	石塁、石列、柱穴列等確認
	県道東西部分	H10. 8. 5～H11. 3. 22	９４５㎡	水路・土塁跡や重複する遺構を確認
	参道石垣・土塁	H10. 11. 30～H11. 1. 20	３６０㎡	土塁の断面から６時期の変遷を確認
12	御隠居曲輪南	H12. 7. 27～H12. 8. 4	３０㎡	スポット公園建設地、遺構遺物なし
	主郭部北東部	H12. 8. 1～H12. 12. 28	１１０㎡	神社関係建物等の削平と整地で遺構なし
	大手馬出	H12. 8. 1～H12. 12. 28	１９０㎡	石塁、掘立柱建物、溝跡確認
	無名曲輪	H12. 8. 1～H13. 6. 20	１３０㎡	曲輪を区画する堀と土塁を新たに発見
13	主郭部北側馬出	H13. 8. 1～H14. 3. 26	６０㎡	堀・土橋・暗渠水路・石積等を確認
	字三角地点	H13. 8. 29～H14. 3. 19	２０㎡	溝・礎石・柱穴等を確認
14	天守台	H14. 8. 5～H15. 3. 31	８０㎡	石垣測量及び礎石・階段・土塁内石積等を確認

史跡武田氏館跡関連刊行報告書

『史跡武田氏館跡Ⅰ』昭和55年～57年度発掘調査報告書　1985年
『史跡武田氏館跡Ⅱ』武田氏館跡関連資料集　1986年
『史跡武田氏館跡Ⅲ』平成７・８年度試掘調査概要報告書　1998年
『史跡武田氏館跡Ⅳ』平成９年度西曲輪試掘調査、平成７～９年度笹堀試掘調査概要報告書　1999年
『史跡武田氏館跡Ⅴ』県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅵ』武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅶ』第14～31次調査報告書　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅷ』第32～52次調査報告書　2002年
『史跡武田氏館跡Ⅸ』平成12年度大手馬出土塁・主郭部・御隠居曲輪南、
平成12～13年度無名曲輪　試掘調査概要報告書　2002年
『史跡武田氏館跡Ⅹ』平成13年度主郭部北側馬出、字三角地点試掘調査概要報告書　2003年
『史跡武田氏館跡Ⅺ』第57～64次調査報告書　2003年
『史跡武田氏館跡Ⅻ』平成14年度天守台地点試掘調査概要報告書　2004年

表１　史跡武田氏館跡試掘調査及び報告書一覧表

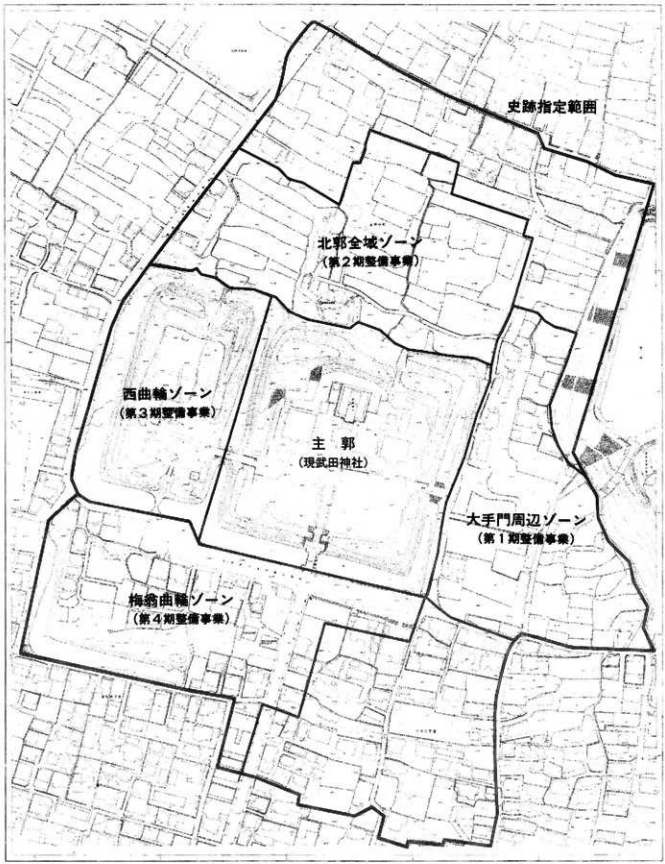


図４　武田氏館跡史跡範囲及び整備事業範囲図

い段階で工事着手となることを想定し、発掘調査対象とした。

第３節　調査区とその周辺の概要

第１期整備に位置づけられた大手門周辺ゾーンについては、土に堀と土塁によって区画された曲輪状の区域と、堀の外側から鯵潟ヶ崎の山裾に広がる区域に大別され、現状では扇状地の地形に合わせた段造成による敷地が展開する（図５）。

平成12年度に実施された試掘調査では、主郭大手土橋正面に存在した棒状の馬出土塁とその東側の平場が調査され、馬出土塁と呼ばれていたものが自然石野面積みの石塁であることが確認された。石塁の構築年代は、構造からみて武田期ではなく織豊期の可能性が高いことが判明し、武田氏滅亡後の改修の一端が明らかにされた。

武田氏館跡大手東側一帯には、大手口から北に位置する御隠居曲輪にかけて南北へと延びる約200ｍの堀と土塁があり、東側の外郭線を形成していたと考えられている。堀は水田耕作の用水路として早くから利用されたとみられ、部分的に灌漑用の溜池として大きく掘削された箇所も存在した。用堀、四方堀、上堀、下堀など場所によって様々な呼称が付けられていたが、本調査では堀全体を「惣堀」と呼称することとした。惣堀は、大手東側で北から南へまっすぐに延びているが、現状では南側が途中で途切れていることから、堀の範囲確認も大手東側の性格を考える上で重要な課題である。

惣堀に沿って土塁が伴うが、北側は部分的に痕跡が残るものの、多くはすでに宅地化されて全体的に削平されている。その中でも調査地点となった大手東側付近は比較的良好に土塁としての形状を保っていた。南側についても農地開発の際に削平されたか、あるいは存在しなかったか議論の余地はあるものの、現地で痕跡をみることはできない。一帯の地名が「高塀」と呼ばれる所以となったものとみられる。

また、惣堀には３箇所の土橋が架けられていた。土塁隅に設けられていた最も北に位置した小規模な土橋については、惣堀の一部を溜池として利用した際の堤として築いたものと考えられる。ほかの２箇所については、貞享３年（1686）に成立した古府中村絵図（武田神社蔵）でも確認することができる土橋であり、現在まで通路として利用されていたため、遺構である可能性が高いと考えられた。

惣堀と土塁の内側には、大手東側部分だけで大きく４段の平場が形成されている。これらの平場を便宜的に上段から下段に向かってＡ区からＤ区とする。上段部にあたるＡ区は石塁が築かれた大手門正面の平場となっており、惣堀・土塁が連続し、北土橋が架けられている。Ｂ区には惣堀南土橋があり、南土橋内側には耕作形の区画が残されている。Ｃ区は惣堀と平場との落差が最も大きい地点であるが、現時点で土塁は確認されていない。Ｄ区は惣堀が途切れる場所で、南側の道路に面して広がる平場である。Ｃ・Ｄ区については、本報告からは除外しているが、平成19年度に試掘調査を実施しており、武田期の城下町に関わると思われる遺構・遺物が検出されている。

第４節　調査の方法

発掘調査は、武田氏館跡にとって重要となる大手門正面の構造を明確にするため、Ａ区周辺に重点を置いた面的な確認作業を実施することとし、合わせて大手門東側の様相を把握するために隣接するＢ区についてもトレンチを主体とした試掘調査を実施した。

Ａ区については、平成12年度試掘調査時の成果を基に現地表から旧水田耕作層までの約20㎝を一部の地点を除いて重機による掘削とし、それより下層をすべて人力によって掘削することとした。Ｂ区については、多くが公有地化する以前に存在した建造物を撤去した際に敷設された砕石層に覆われていたため、重機によって表層を除去し、水田層などを確認しつつ掘削を行った。撹乱が著しかったもののＡ区同様水田層以下は人力による掘削とし、惣堀南土橋側の小区画内も人力によってトレンチを掘削している。

武田氏館跡は平成15年度に整備対象地域を対象として日本測地系による座標に合わせた方眼測量によって50m×50mの大グリッドを設定しており、東西列を算用数字、南北列をアルファベットで表記したものを組み合わせてグリッド番号として用いた（図６）。さらに大グリッド内を５m×５mの小グリッドに細分化し、北東隅から１～100までの算用数字を順に付すことによって区分している。各グリッド番号は、北東隅にあたる座標杭を基準としており、遺構実測、遺物の取り上げ等は、すべて大グリッドと小グリッドの組み合わせで記録した。

遺構の調査方法は、基本的には全掘を避けて半截あるいは平面形を確認するだけに止めている。柱穴・土坑・井戸跡などの小遺構は、半截した上で遺構であるか判断し、写真・断面図・横断図などにより記録し、溝跡など大規模な遺構については部分的に観察面を設け、写真・断面図・横断図により記録した。

ただし、大手石塁については、最終的に遺構の解体修理による露出展示が確定したことで全面を調査により検出し、惣堀北虎口についても整備による虎口復元のために全面を調査している。かわらけ溜りである１～３号土坑については、半截による調査の困難と調査後の埋設保存が難しいと判断して全掘とした。個々の調査がある程度完了したところで、空中写真測量により調査区全体を写真撮影し、図化した。

また、整備工事前の発掘調査とは別に惣堀や土橋、石塁など工事の進捗に合わせて発掘調査を実施

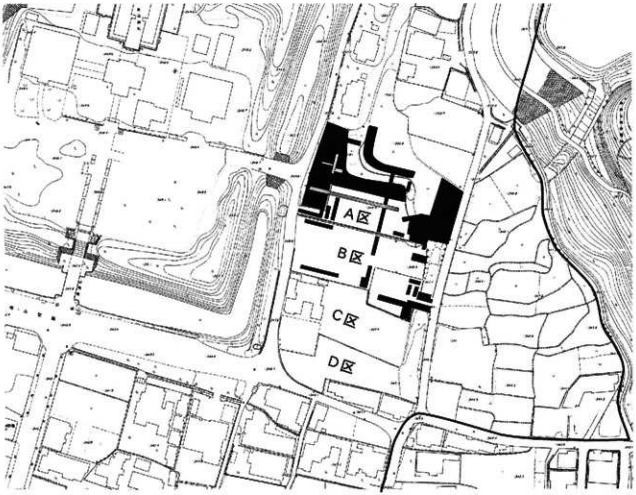


図５　大手周辺地形と発掘調査位置図

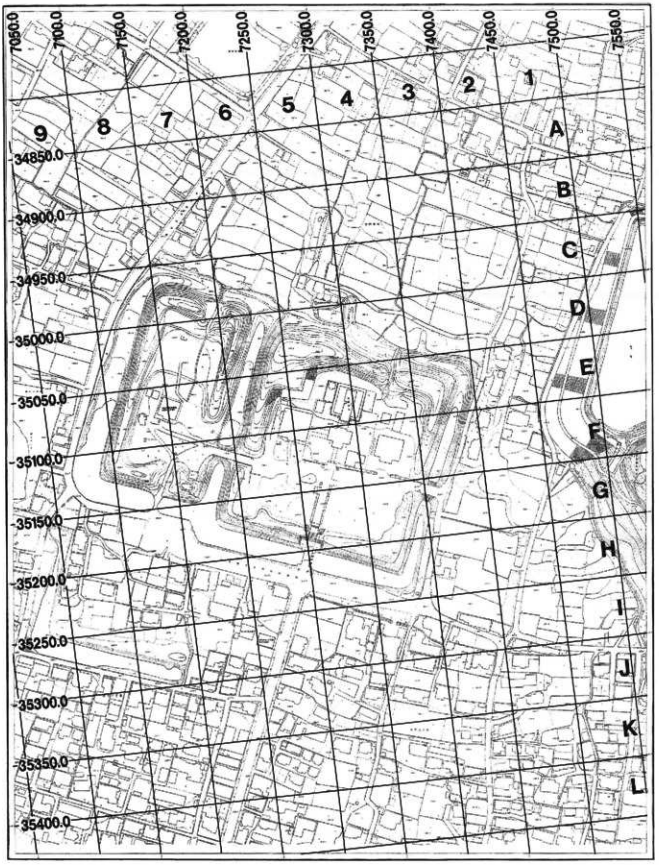


図6 史跡武田氏館跡グリッド図

しており、本報告書内では大手石塁、土橋石積み解体修理以外の発掘調査成果を掲載している。未掲載の成果に関しては、一帯の整備工事完了後に作成を予定している環境整備報告書に整備工事状況とともに掲載予定である。

第5節　調査の経過

発掘調査は、平成15年度から発掘調査に向けた環境整備を行い、一部表層等の掘削作業に着手した。平成16年度から平成17年度にかけてA・B区を主体的に調査し、平成18年度は大手石塁及び2号堀跡の測量等追加調査を実施した。平成19年度からは大手門周辺ゾーン第1次整備工事に先立ち惣堀北虎口全体の追加調査を実施するとともに、惣堀の範囲確認と堀底の調査等を実施している。以下では主要な調査状況について年度毎に概況を整理する。

平成15年度
- 2月5日　発掘調査に向けた除草・低木伐採作業等着手。
- 2月17日　除草・低木伐採等作業終了。
- 2月18日　A区一帯と大手石塁部の中央から北端部に調査区設定。
- 2月19日　A区表層掘削。水田層まで除去することを目的とする。
- 2月27日　大手石塁表層の掘削。
- 3月3日　平成12年度試掘調査箇所のうち、大手石塁の一部を再掘削。
- 3月16日　養生処置を施し、平成15年度調査終了。

平成16年度
- 11月8日　調査再開。土嚢及び調査箇所周辺除草作業。
- 11月16日　平成15年度掘削箇所内精査。
- 11月19日　トレンチ1からトレンチ3及び惣堀北土橋トレンチ設定。
- 11月22日　トレンチ1からトレンチ2北側まで掘削。
- 11月24日　重機により大手石塁北側の盛土（砂礫層）掘削。
- 11月29日　トレンチ2南側掘削。
- 11月30日　トレンチ2南側掘削、トレンチ5周辺清掃・掘削。
- 12月2日　トレンチ5において階段石列確認。
- 12月6日　トレンチ4と石塁東面南端部に設定したトレンチ7掘削、1号溝跡掘削。
- 12月7日　トレンチ9掘削。
- 12月9日　トレンチ1土塁断ち割り、土坑1確認。
- 12月13日　トレンチ10掘削。
- 12月15日　トレンチ4土塁断ち割り、トレンチ9拡張。
- 12月16日　重機により大手石塁北側全体掘削。
- 12月21日　トレンチ6掘削。
- 1月7日　大手石塁北側掘削。
- 1月13日　トレンチ8掘削。
- 2月1日　2号溝跡掘削。
- 2月7日　大手地形測量観測点設置。
- 2月10日　トレンチ6内5号溝跡掘削、1号竪穴建物跡掘削。
- 2月14日　セスナ機による大手地形測量実施。
- 2月21日　トレンチ3掘削。
- 2月22日　トレンチ11掘削。
- 2月23日　調査用方眼測量杭設置。
- 3月3日　相川小学校6年生課外授業により見学。

3月5日　現地見学会開催。約200名参加。
3月7日　1号堀跡確認、サブトレンチによる掘削。
3月10日　調査区空中写真測量実施。
3月24日　養生処置を施し、一部埋め戻し。平成16年度調査終了。

平成17年度

4月5日　平成16年度の補足調査として土坑1・2掘削。
4月7日　3号溝跡掘削。
4月8日　土坑3掘削。
4月22日　補足調査完了。
11月25日　調査再開。除草作業等現場環境整備に着手。
12月9日　大手石塁西側中央階段部掘削。
12月12日　G3-34付近の平成12年度試掘調査箇所再調査。
12月16日　トレンチ14掘削。
1月12日　トレンチ11拡張。惣堀範囲確認。
1月17日　調査用方眼測量杭設置。
1月19日　トレンチ14・15・17設定、掘削。
1月23日　大手石塁南面掘削。
2月6日　惣堀（階段北側）掘削。
2月10日　2号堀跡確認。サブトレンチによる掘削。
2月14日　大手石塁空中写真測量・立面測量実施。
2月17日　惣堀南土橋トレンチ設定、掘削。
2月22日　2号堀跡が三日月堀であると断定。
2月23日　トレンチ15内で埋桶確認。
2月28日　3号堀跡掘削。
3月8日　調査区空中写真測量実施。
3月16日　1号建物跡検出。
3月23日　大手石塁及び惣堀周辺を残して養生処置後に埋め戻し作業開始。
3月30日　平成17年度調査終了。

平成18年度

4月29日　現地見学会開催。約130名参加。
5月15日　大手石塁北側及び惣堀土塁部の各トレンチを養生処置後に埋め戻し作業開始。
5月29日　埋め戻し作業終了。
10月3日　大手石塁周辺の追加調査により除草作業等現場環境整備に着手。
10月10日　大手石塁の一部養生処置及び清掃作業。
10月27日　2号堀跡サブトレンチ範囲拡張。
11月1日　惣堀南土橋基部トレンチ掘削。
12月5日　惣堀北虎口南側トレンチ掘削。
12月14日　惣堀南土橋検出。
1月11日　トレンチ16設定、掘削。
2月26日　2号堀跡追加調査。
2月28日　2号堀跡空中写真測量実施。
3月4日　現地見学会開催。約330名参加。
3月14日　2号堀跡を養生処置後に埋め戻し作業開始。
3月30日　平成18年度調査終了。

平成19年度
11月14日　惣堀北虎口追加調査開始。
11月30日　惣堀南北土橋石積み立面の写真測量実施。
12月７日　大手石塁追加調査。
１月15日　惣堀・土塁境調査。惣堀護岸の石積み検出。
１月17日　惣堀北虎口ほか空中写真測量実施。
１月28日　惣堀土塁隅部の土橋（堤）調査。
１月31日　惣堀掘削。惣堀北土橋北側の堀底から３本の木柱検出。
２月18日　惣堀北虎口養生処置後に埋め戻し作業開始。本報告に係る平成19年度調査は終了。
平成20年度
12月１日　解体修理を予定していた大手石塁全体の清掃に着手。
12月４日　大手石塁北面新石垣撤去及び裏込め調査。
12月８日　大手石塁南面上段新石垣撤去及び裏込め調査。
12月18日　大手石塁南階段の残存部最上段検出。
１月16日　大手石塁南階段周辺全体調査。
２月３日　大手石塁西側道路境界のトレンチ調査。
２月16日　大手石塁南階段周辺写真測量実施。
３月７日　大手石塁西面中央階段調査。
３月31日　機材等を撤去し、本地点における主たる調査は完了。

第６節　調査後の処置

発掘調査後は、山砂を主体とする混合土を遺構面に５cm前後の厚さで敷設し、重機等によって埋め戻しを行っている。また、北虎口階段部や大手石塁周辺などは場所に応じて黒色の真砂土やかつら土を用いて埋め戻しを実施している。２号堀跡については、山砂を詰めた土のうを設置するとともに、排出した小礫を混ぜて埋設している。

発掘調査によって記録された図面や写真、出土遺物については、甲府市山宮甲文館において整理作業を実施した。出土遺物は洗浄、注記、接合、実測、浄書、写真撮影、図版作成等を行い、本書の刊行に至っている。

第３章　遺構と遺物

史跡整備事業に伴う保護・保存を前提とした発掘調査であるため、基本的に遺構は表面での平面形の確認と部分的な掘削のみに止めている。

発掘調査によって確認された遺構としては、石塁１、石組１、堀跡４、土塁１、石階段１、土橋２、溝跡６、井戸跡１、土坑３、建物跡２、石列５及び各トレンチの調査状況を掲載する。

第１節　石塁・石組

大手石塁・１号石組（遺構：図７～図９　遺物：図29～図37・図45）

位　　置：Ｇ３－25・26～Ｇ３－66・67グリッド

検出状況：武田氏館跡大手には棒状の土塁が残されていたため、城郭史研究においては、武田氏段階でも初期に築かれた馬出土塁ではないかと評価されてきた遺構である。平成12年度に実施した試掘調査によって、土塁ではなく自然石野面積みの石塁であることが確認され、構築年代は武田氏滅亡後の可能性が高いと判断された。武田氏館跡の調査では、これまでに主郭内や西曲輪南虎口においても石塁の一部を検出していることもあり、本地点における石塁を大手石塁と呼称することとした。

発掘調査以前は、東側では３号溝跡上部から積み上げた小型の自然石を用いた乱積みの石垣が表面を覆っており、同様の石垣が各面に構築されていた。積み方や使用された石材の様相、裏込め内より出土した江戸から大正までの陶磁器片などから判断すると、近代以降に大手石塁上面を畑地として利用する過程において構築されたものであると考えられた。そのため、発掘調査は東側の近代以降の石垣を除去することから開始した。

検出された大手石塁東面の残存状況は、全体的に石垣の形状を留めていたものの、天端部や北側では後世の撹乱を受けて破損、欠損が顕著であった。大手石塁東面の規模は、検出された全長は基底部において約25.3mであり、北端の根石は既存北面より外側に飛び出すような状況であった。東面の石垣は南側で６～７石、北側では３～４石が積まれており、南北方向の地形の傾斜に合わせて石塁を構築していることが判明した。そのため、基底部から検出段階の天端までの高さは、南端部で約1.4m、中央部で約１m、北端部で約0.6mを測る。

東面では全体的に石垣の面が整っていたが、Ｇ３－55内は築石が大きく孕み、上部が崩れ落ちた状態で検出された。石垣の孕みによる崩落の原因については、調査の過程で２号堀跡と重複する位置関係にあることが判明したことから、基底部付近の地盤沈下により発生した結果ではないかと考えられた。

また、東面においては、Ｇ３－35内の大手台塁基底部付近において炭化物の集中箇所が検出されている。周囲からは鞴の羽口片が出土していることから、この場所において小鍛冶が行われた可能性が考えられる。

大手石塁には北側に石垣が残されていたが、積み方と裏込めの栗石内出土遺物から各面に築かれていた近代の石垣と同じものと考えられた。特に大手台塁東面北端の根石が既存の北面石垣面より北に延びており、大手石塁北側は、近代以降に開墾等により消滅したと判断される。よって、大手石塁全体の形状については、発掘調査で検出された形状は逆「Ｔ」字状となっていたが、古絵図の検証や東面北端の根石の検出状況から判断すると、北側にも南側と同様に東西方向の石積みが存在していたことはほぼ確実とみられ、当初の形態は、片かなの「コ」の字状であったと考えられる。

西面については、根石を残して築石の多くは失われており、基底部から天端までの高さも含めて復元が困難な状態であったが、中央部と南端部の２箇所で階段が検出されている。中央階段は、１段目はすべて欠損していたものの、３段の石階段であったと考えられる。１段

目の欠損箇所のうち、階段中央の埋土からは寛永通宝（図45　21・22）が出土していることから、江戸期に何らかの理由で意図的に破却されたと推測される。検出された2段目は3石、3段目は4石が残存しており、基本的に4石を敷き並べていたと考えられ、階段踏石幅は約1.9mで、階段袖石を含む全体の幅は約2.4mであった。基底部からの高さは約0.78m、一段の蹴上高0.15～0.2mであり、三段目には土間が敷かれており、炭化物が少量散乱していた。土間は奥行き約0.9mであり、東端には高さが不揃いな石列が検出されていることから、実際にはもう一段上るように石段が取り付けられていたと想定される。

南階段は上部と西側が欠損した状態で発見されており、6段目までの階段石が検出されている。全体の規模は不明であるが、幅については階段を据え付けるために設置されたと考えられる基底部石列が約1.8mまで確認されていることから、中央階段と同じ踏石幅ではないかと想定される。現存高で0.8m、一段の蹴上高0.15～0.2mであった。

南面は隣接する市道からA区平場を接続するような形で近代以降にスロープ状の通路が開削されていたこともあり、南階段を含めて上部が欠損した状態であった。東端部は大手石塁東面の石垣から約1.85m突出した状態であり、西端まで確認されている範囲では長さ約10.8mである。ただし、西側は道路下に入り込んでいるため、実際にはこの数値よりも西へ延びていることは確実である。基底部の幅は東端部約3.8m、西端部約4.8mであり、南階段が取り付けられているため、西側が広がる形状となっている。東端部では基底部に隅石が残されているが、算木積みではなく一石で隅を造り出す構造であった。

以上のような調査成果からみて、大手石塁の構造は、基底部は小礫による地覆によって根石を支えるというやや特殊な構造を有するものの、積み方は西日本において中世後期に城郭の中へ盛んに取り入れられた自然石野面積みによる総石垣の構造物であり、階段によって上部に昇降できる構造であった。大手石塁の高さは、階段との高さ関係からも天端の高さは、残存する天端高から数石程度高くなるとみられるが、石垣自体では防壁としては十分な機能を果たすことは困難であったと考えられる。このことは、大手石塁上に何らかの建造物が存在したことを示唆するものであり、大手石塁とは、そのものが防壁として機能したものではなく、あくまでも建造物の台座として構築されたものであったと位置付けられる。

武田期にこれほど大規模な総石垣の構造物を造営することは、現時点の研究成果と照らし合わせても不可能であり、年代的には武田氏滅亡後の構造物であることは間違いない。大手石塁の形態については、南東隅が張出しているものの、大手土橋を覆うように概ね「コ」の字形であったとみられる。この点については、江戸期に入って描かれた複数の古絵図の中でも、広島市立中央図書館浅野文庫蔵「諸国古城之図」に描かれた形状が調査成果と合致すると考えられる。

大手石塁に関連した遺構として、惣堀土塁隅において南・西面で石列が検出されている。平成12年度試掘調査報告では1・2号石列と呼称していた遺構であるが、配列と石列内の構造からも石塁のような構造物の可能性があると判断した。大手石塁周辺の全体構造からみてもこの場所が虎口であり、大手石塁本体と対になる石積みの根石と考えられることから1号石組と呼称する。構造的には西曲輪枡形虎口両袖に築かれている石積みに類似した形態であり、大手石塁側と一体的となって門を受けることを目的に築かれたのではないかと想定される。そのように仮定すると、大手石塁と惣堀土塁によって狭められた空間は門によって閉鎖することで枡形虎口を形成することとなる。このような虎口構造は織豊期の枡形虎口にみられる形態であり、大手石塁及び1号石組は織豊期の様相と考えられる。

しかし、大手石塁と1号石組の間に位置する通路部では礎石など門跡を示す遺構や痕跡は認められなかったものの、3号溝跡がこの場所で僅かながら屈曲し、石材の様相が変化したことは偶然ではなく、何らかの意味があったと考えられる。そのことに補足し、3号溝跡や1号石組との関係や性格は不明であったが、3号溝跡と並行して水路東面石列の裏から板材

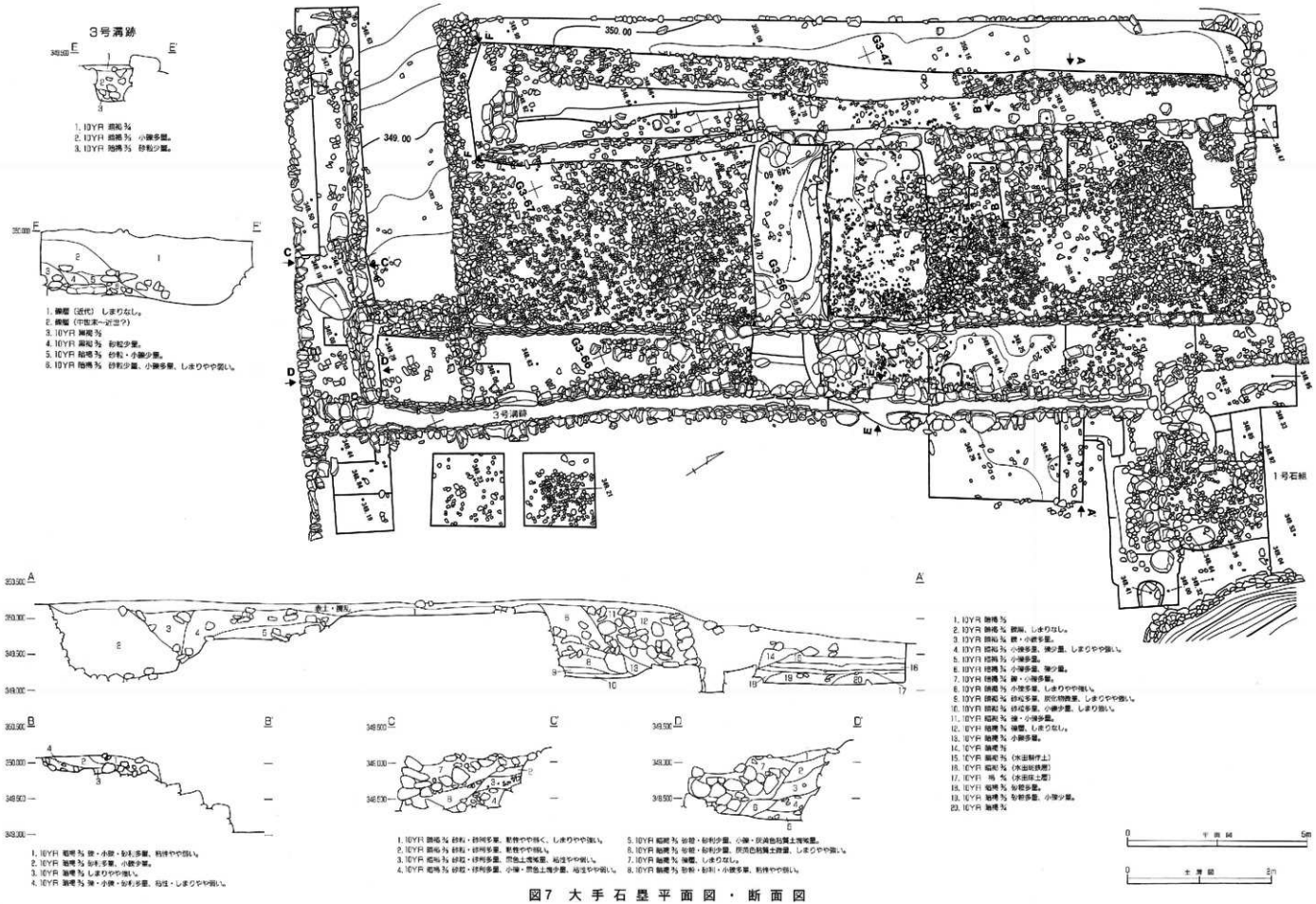
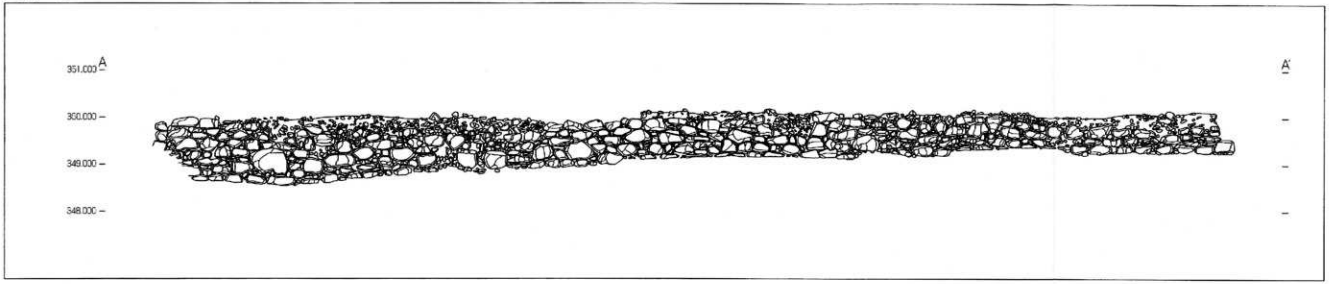
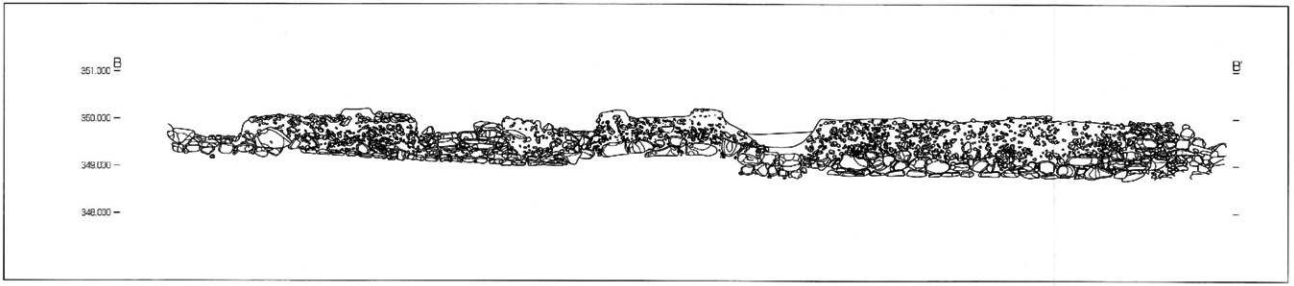


図7 大手石塁平面図・断面図

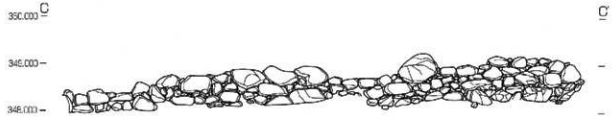
立面－東



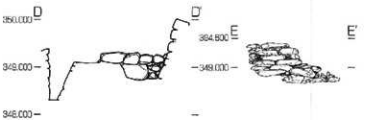
立面－西



立面－南



張出－北



南階段

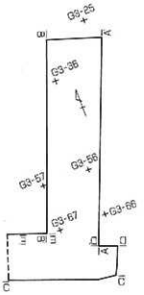


図8 大手石塁立面図

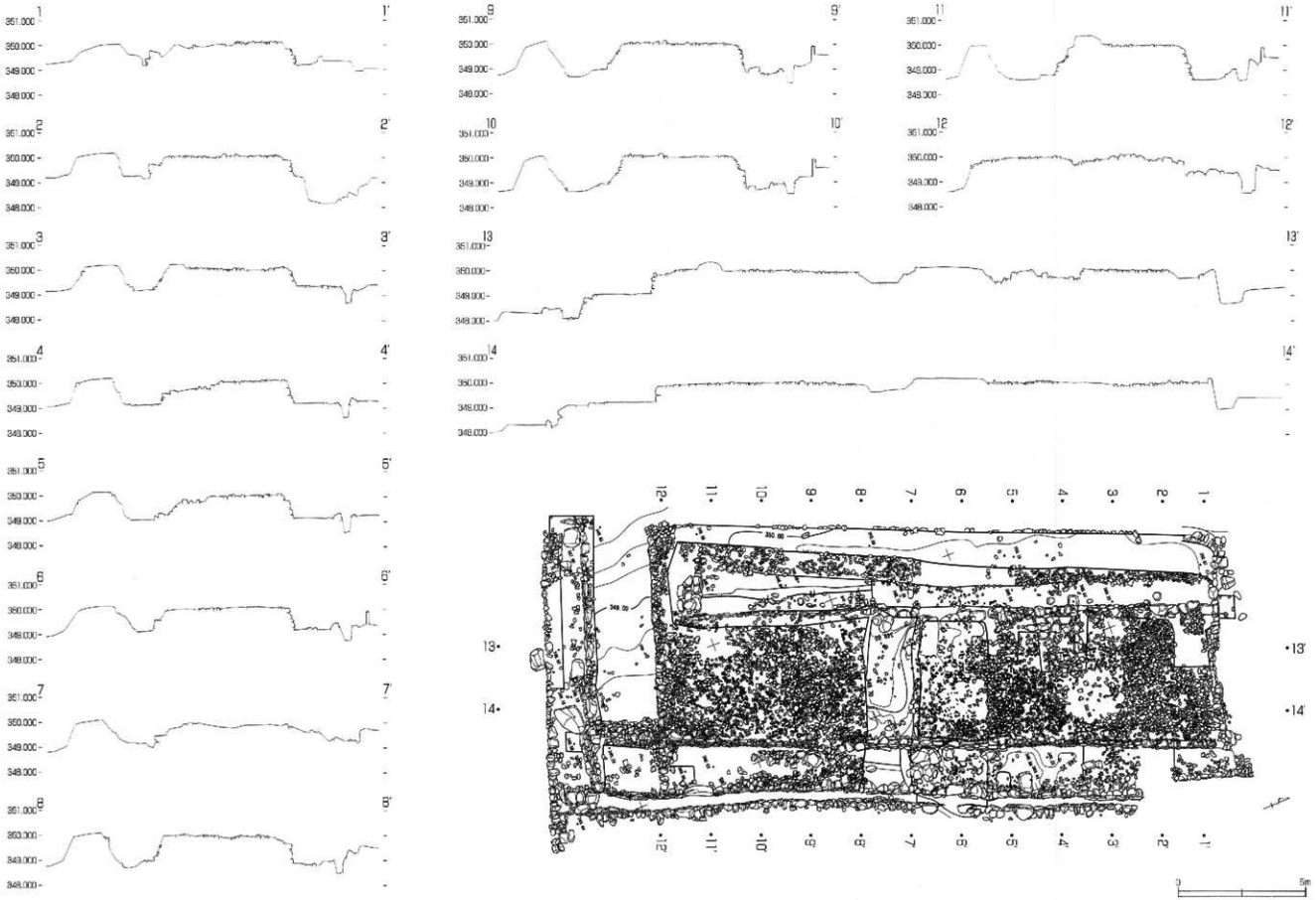

1 1'
2 2'
3 3'
4 4'
5 5'
6 6'
7 7'
8 8'
9 9'
10 10'
11 11'
12 12'
13 13'
14 14'
351.000
350.000
349.000
348.000
353.000
0
5m

図9 大手石塁横断図

が検出されている。

重複関係：１・２号堀跡より新しい。

出土遺物：遺物は、土器・陶磁器・石製品・金属製品など156点を掲載している。多くの遺物が近代以降の石積みと大手石塁の間を埋めていた礫層や大手石塁内の栗石層から出土している。したがって、大手石塁の年代を直接示すものではないものの、近代の石積みが大手石塁を切り崩して構築されたものである可能性が高いことから、中世の出土遺物自体は概ね大手石塁及びその周辺の年代観を示すものと考えている。

土器は、かわらけを主体とする。かわらけはすべてロクロ成形で橙色系の厚手タイプと黄橙色系の薄手タイプがあり、胎土も若干異なる。年代的には厚手タイプは少なくとも16世紀第２四半期から第３四半期を主体とする一群であり、薄手タイプは16世紀第４四半期から17世紀第１四半期を主体とする一群と考えられる。したがって、大手石塁は少なくとも後者の年代幅で押さえられる。

かわらけの中には熔けた金属が内底部から口縁部にかけて付着したもの（24～32）が一定量出土しており、32には金粒の付着もみられた。かわらけの形態から武田期のものと判断され、大手石塁造成時の混入物と考えられる。平成18年度に惣堀東側の字三角一帯で実施した試掘調査では、鍛冶職人らの居住区と考えられる町屋が確認されているが、こうした遺物の存在からも、大手周辺にも鍛冶職人の居住区が広がっていた可能性も想定され、武田期の大手口の構造を知る上で興味深い。他にも鍛冶関連の遺物として輪の羽口44・45があるが、これらは大手石塁東面某底部で確認された小鍛冶に伴う遺物と考えられ、前者とは異なる時期と考えられる。

その他土器製品は、火鉢（33～35）、擂鉢（36～39）、内耳鍋（40～43）が出土している。火鉢はすべて内折れの口縁であり、未掲載であるが、底部には脚が取り付く形態となっていた。擂鉢としたうち、38は基底部が外反して擂り目がないため、捏鉢である可能性もある。内耳鍋はすべて砂粒が多く含まれるいわゆる信濃型である。

陶磁器に関しては、16世紀中葉から後半までの遺物が出土しているが、江戸期を除く最新の遺物として、52の瀬戸美濃大窯第３段階の初山窯鉄釉皿と56の瀬戸美濃大窯第３・４段階の灰釉内禿皿が出土している。これらの遺物はいずれも大手石塁埋土からの出土であり、今のところ大手石塁内の栗石層からは新しい時期の遺物は出土していない。古い時期の遺物としては、13～14世紀代の青磁瓶や壺、青白磁梅瓶のほかに古瀬戸や常滑などにも骨董的な遺物がみられる。同時に大窯第１・２段階に位置付けられる16世紀前半から中葉までの遺物も一定量出土しているが、多くが大手石塁造成時に混入したものと考えられる。

大手石塁から出土した陶磁器の中で最も多いものが常滑の壺と甕である。特徴的なものでは、89は肩に押印があり、91などは肩から体部に工具による圧痕のような押印がみられる。また、90は断面から外面にかけて漆で補修されていた。破片表面の特徴や胎土の様相から常滑壺３個体、甕は５個体以上と推測される。

石製品では、大手石塁の埋土や栗石の中からは緑臼や茶臼の破片が多数出土しており、その他に石鉢や砥石、窪み石、五輪塔などがみられる。金属製品では古銭や釘などのほか、16は箱などの施錠用の部材と考えられる。17・18は菱形に巻かれた銅製品であるが、用途は不明である。

第２節　堀　跡

発掘調査によって３条の堀跡が検出されており、遺構番号は確認順に付している。平成12年度試掘調査時に１号堀跡とした遺構は、今回の全体調査によって新旧二つの堀であったことが判明したため、遺構番号は本調査の番号で進めることとする。

３条の堀跡の他に大手東側には館跡北側から延びる堀と上塁が現地形に残されており、本調査では

館跡東側の外郭線を形成する堀全体を「惣堀」として呼称することとした。

1号堀跡（遺構：図10　遺物：図37）

位　　置：F３－93・94、G３－３・13・23・34・44・54グリッド

検出状況：大手石塁東側で確認された堀跡であり、北側については、遺構面の精査によって概ね全体の範囲を確認しており、掘削はサブトレンチによって部分的な確認作業を行っている。堀跡の範囲は、北端部はF３－93グリッド内から始まり、F３－94グリッド内で大きく湾曲し、南端部はG３－54グリッド内で平成12年度試掘調査によって検出されていた掘り込みまでと考えられる。よって、形態的には「L」字形の堀と考えられ、いわゆる角馬出の形態であることが推測される。

堀跡全長は直線部が約30mであり、堀幅は南北端部が約３m、直線部が約４mであった。遺構確認面からの深さは北端部が約1.5m、南端部で約２mであったが、惣堀土塁に設定したトレンチ８内において検出された１号堀跡の落ち込みは、検出面から約0.7m高い場所であることが明らかとなっている。したがって、検出した遺構面は全体的に大きく削平を受けていると考えられ、実際の規模や深さは確認された以上であったことは容易に想像できる。

断面観察からみた堀跡の状況は、全体的に自然堆積層が形成されており、緩やかに埋没したと考えられるが、土層中位に人為的な埋め戻しと考えられる礫層が検出されている。北側断面の８層以上が人為的埋設土層であり、１・２号堀跡の重複が明瞭な図11C断面をみると３層以上で特に顕著に現れている。さらにC断面では５層に炭化物を多量に含む層が検出されているが、中には熔けた鉄滓が含まれていた。よって５層の形成時点では近くで鍛冶が行なわれ、その後に流れ込んだものか、あるいは意図的に廃棄されたと考えられる。大手石塁において小鍛冶によるものとみられる炭化物集中箇所が検出されていることと何らかの関係がある可能性も指摘しておく。

１号堀跡の明確な年代は定かではないが、遺構の重複関係からもF３－93グリッド内で検出された１号石列や惣堀土塁形成時には廃絶していたと考えられる。このことから、大手石塁の出現と惣堀による外郭線の形成によって大手の空間構造が大幅に変更される際に、１号堀跡は意図的に破却させられたと考えられる。

重複関係：２号堀跡より新しく、１号石組、惣堀土塁、１号石列より古い。

出土遺物：かわらけが少量出土しているが、図化したものは１点のみである。

2号堀跡（遺構：図11　遺物：図37）

位　　置：G３－５・15・24・34・55グリッド内

検出状況：大手石塁と重複する位置から発見された堀跡であり、主郭大手上橋を囲うように半月形に掘削されていると考えられ、いわゆる三日月堀であることが判明した。２号堀跡は大手石塁あるいは１号堀跡造成時の盛土層に全体を覆われており、大手石塁が構築された遺構確認面上では検出されず、部分的な深掘りによって範囲を特定している。

２号堀跡が展開する範囲の大部分が大手石塁と１号堀跡、３号溝跡など上層の遺構群によって掘削が困難な状況である中で、北側は大きな障害物がなかったこともあり、堀幅と堀のラインを確認するだけの調査範囲を確保することが可能であった。当初は範囲確認を目的にサブトレンチを設定していたが、二日月堀が多量の礫層に覆われていることが明らかとなり、掘削可能範囲までトレンチ幅を広げて調査を実施した。

検出された堀跡規模は、遺構確認面で堀幅約４m、深さ約2.5mであり、北端は調査区西側の市道手前で完結しており、現在の市道部分が当時の虎口であったことが確認された。また、G３－34グリッド及びG３－55内に掘削されていた平成12年度の試掘調査箇所を部分的に再調査し、新たに中央部両脇の二箇所の湾曲部を検出した。これによって断片的な調査

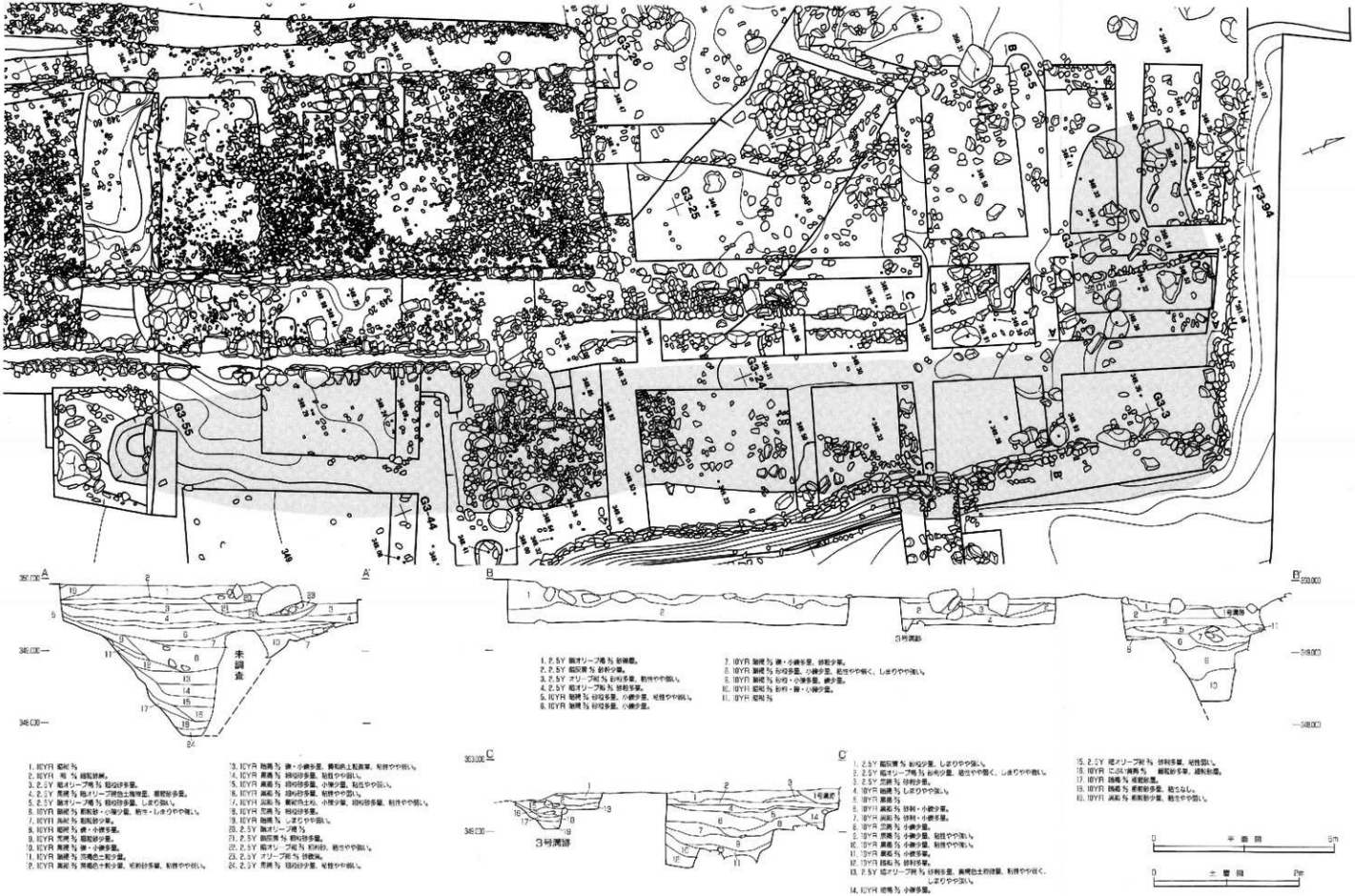


図10　1　号　堀　跡

1・2層
1. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量。(1号堀跡)
2. 10YR 暗褐 ¾ 小礫多量、砂粒少量、しまりやや強い。(1号堀跡)
3. 10YR 暗褐 ¾ 礫・小礫多量、砂粒・炭化物少量。(1号堀跡)
4. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、小礫・炭化物少量。(1号堀跡)
5. 10YR 黒褐 ¾ 炭化物多量、粘性強い。(1号堀跡)
6. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒多量、小礫少量、粘性やや強い。(1号堀跡)
7. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒・小礫少量、粘性・しまりやや強い。(1号堀跡)
8. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、しまりやや強い。(1号堀跡)
9. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・小礫多量、炭化物少量、粘性・しまりやや強い。(1号堀跡)
10. 10YR 黒褐 ¾ 細砂粒・炭化物少量、粘性やや強い。(1号堀跡)
11. 10YR 褐 ¾ 暗褐に比べ黄褐色土粒を多量含む。(1号堀跡)
12. 10YR 褐 ¾ 地山。
13. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒少量、礫・小礫多量、粘性やや強い。(2号堀跡)
14. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒少量、粘性強い。(2号堀跡)
15. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒少量、小礫多量、粘性・しまりやや強い。(2号堀跡)
16. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒・小礫少量、粘性・しまりやや強い。(2号堀跡)
17. 10YR 黒褐 ¾ 粘性強い。(2号堀跡)

1. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、小礫少量。
2. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量。
3. 10YR 黄褐 ¾ 砂粒少量。
4. 10YR にぶい黄褐 ¾ 黄褐色土粒・砂粒多量。
5. 10YR 暗褐 ¾ 小礫少量。
6. 10YR 黒褐 ¾ 炭化物少量。
7. 10YR 黒褐 ¾ 小礫少量。
8. 10YR 黒褐 ¾
9. 10YR 黒褐 ¾ 小礫少量。
10. 10YR 黒褐 ¾
11. 2.5Y オリーブ褐 ¾ (地山)
12. 10YR 黒褐 ¾
13. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、小礫少量、しまり強い。
14. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、しまり強い。
15. 10YR 黒褐 ¾ 礫・小礫多量、粘性なし、しまり強い。
16. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、しまりやや強い。
17. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒少量、褐色粘土塊多量、粘性・しまりやや強い。
18. 10YR 暗褐 ¾ 礫・小礫多量。
19. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒・礫多量、小礫少量。
20. 10YR 黒褐 ¾ 礫層。

1. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、砂利少量、黄褐色土粒多量、粘性やや強い。
2. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、粘性やや強い。
3. 2.5Y 暗オリーブ褐 ¾ 砂質土、礫・小礫少量、粘性なし。
4. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、しまりやや強い。
5. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、小礫少量、黄褐色土粒多量。
6. 10YR 暗褐 ¾ 砂質土・小礫少量、粘性なし。
7. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・黄褐色土粒多量、礫・小礫・砂粒少量、粘性やや弱く、しまりやや強い。
8. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒少量、粘性やや強い。
9. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量。
10. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、粘性やや強い。
11. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、小礫少量、粘性やや強い。
12. 2.5Y 暗オリーブ褐 ¾ 砂粒少量。
13. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒少量。
14. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量。
15. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒少量、粘性・しまりやや強い。
16. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒多量、細砂粒少量、粘性やや強い。
17. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒少量。
18. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・小礫多量、黄褐色土粒少量。
19. 10YR 黒褐 ¾ 礫・小礫多量、粘性やや強い。
20. 10YR 黒褐 ¾ 小礫少量、粘性やや強い。
21. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・砂利・小礫・礫・黄褐色土粒多量、粘性なし、しまりやや強い。
22. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒・小礫・礫多量、粘性・しまりやや強い。
23. 10YR 暗褐 ¾ シルト質土、小礫・礫多量、粘性・しまりやや強い。
24. 10YR 暗褐 ¾ シルト質土、砂粒少量、粘性弱く、しまりやや強い。
25. 10YR 暗褐 ¾ シルト質土、砂粒多量、粘性弱く、しまりやや強い。
26. 10YR 暗褐 ¾ 砂質土、砂粒多量、粘性・しまりやや強い。
27. 10YR 暗褐 ¾ シルト質土、砂利・小礫少量、粘性弱く、しまりやや強い。
28. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・小礫多量、黄褐色土粒少量。
29. 10YR 暗褐 ¾
30. 10YR 暗褐 ¾ 小礫多量。
31. 10YR 黒褐 ¾ 砂粒多量。
32. 10YR 暗褐 ¾ 砂粒・小礫少量。

図11　2　号　堀　跡

ながらも三日月堀全体の約３分の２を点と点を結ぶことで復元が可能となった。南側は大手石塁によって未調査であるものの、推定全長は約30mと考えられる。

武田領国内に残る丸馬出の中には三日月堀とともに土塁を伴う事例が報告されている。平成12年度試掘調査では、大手石塁内部をトレンチによって調査しているが、すべて栗石によって築かれており、土塁の痕跡は検出されていない。本調査においても周辺部を確認したが、土塁の痕跡は認められなかったことから、丸馬出として土塁が伴っていたのかについては、今後慎重に検討しなければならない。

三日月堀の堆積状況は、Ｇ３－15周辺では多数の礫群が検出されており、Ｇ３－55でも散発的ながら礫層が検出されている。堀内各所で確認された礫層は自然堆積によるものではなく、人為的に投げ込まれた礫群によって埋め戻されていたことから、２号堀跡は意図的に破却されたことが明らかであり、後続する１号堀跡あるいは大手石塁造成の上で不可欠な作業であったことは言うまでもない。大幅な虎口形態の変更によって三日月形という独特の形態を有する２号堀跡を否定する必要があったことを端的に示しているものの、この背景には単なる虎口形態の変更だけではなく、様々な意味が含まれていると考える。

重複関係：大手石塁・１号堀跡より古い。

出土遺物：かわらけが少量出土している。図化したものでは２が長方形の石製品であるが、用途は不明である。

３号堀跡（遺構：図28　遺物：掲載なし）

位　　置：Ｇ３－86グリッド（トレンチ14内）

検出状況：東西方向のトレンチに対して南北方向に横断し、南壁付近でやや湾曲する。調査区外で南西側へ延びると思われ、位置的には１号堀跡と対になる可能性がある。堀幅約4.2m、深さ0.8mであり、埋土には全体的に礫が目立ち、人為的に埋め戻しを受けている可能性がある。部分的な確認であるため詳細は不明であるため、最終的な判断は今後の調査に委ねる。

重複関係：なし。

出土遺物：なし。

惣　　堀（遺構：図12・13・27　遺物：掲載なし）

位　　置：グリッド

検出状況：現況では 館跡北側に位置する御隠居曲輪から調査区の南側まで連続する総延長約280mの堀跡である。調査区周辺には３箇所の土橋が設けられており、堀は４つに分割される形で存在しており、貞享３年（1686）に作成された「古府中村絵図」には、現地形に近い形状が描かれている。

しかし、Ｇ２－29・30付近より北東にみられる溜池状の膨らみは古絵図には描かれていないことから、貞享３年以後の形態と思われる。発掘調査によって検出された護岸の石積みも石材や積み方の技術からみるかぎりは新しい時期の遺構と考えられ（図12）、本来の堀の落ち込みより北側に積まれていたことから、後世に灌漑用溜池として開削されたものと考えられる。

同じく惣堀北上橋北側も溜池状になっており、古絵図にも「用堀」の名で近似した形態で描かれている。現在でも大正３～８年にかけて築堤された灌漑用貯水池である竜ヶ池から流入する用水の受け皿となっている。惣堀土塁の調査や北虎口階段部の調査成果からみても、貞享３年以前に存在した土塁を削平し、灌漑用溜池として開削した可能性が高く、同時に土塁隅に設けられた土橋も貯水用の堤であると考えられる。

惣堀については、調査の多くを第１次整備工事と並行して実施しているが、護岸石積みなどの整備の必要性からも、厚く堆積したヘドロ状の上砂を除去し、堀底の確認を行った。Ｇ

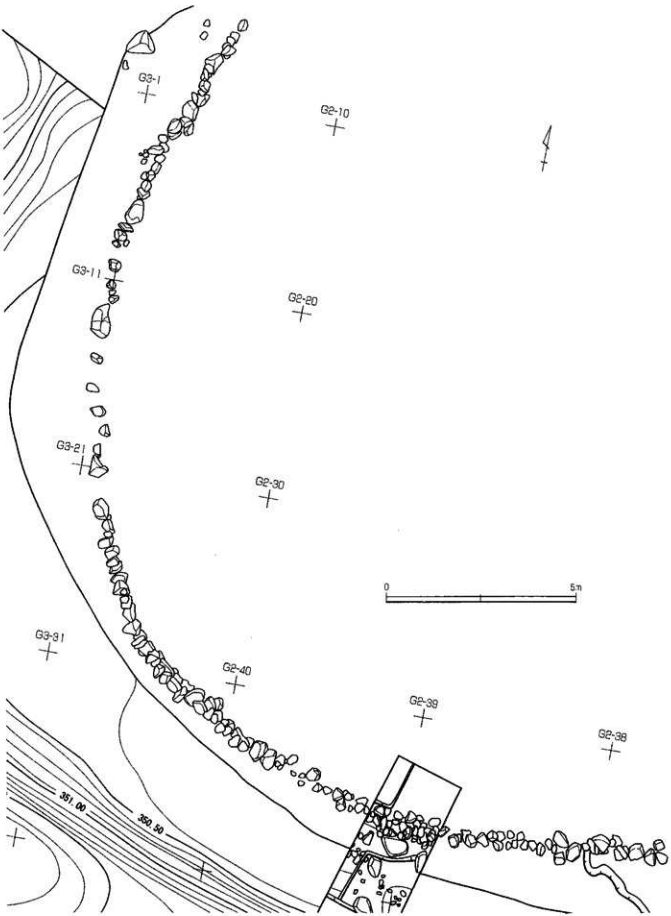

G3-1
G2-10
G3-11
G2-20
G3-21
G2-30
0
5m
G3-31
G2-40
G2-38
G2-38
351.00
350.50

図12 惣 堀 北 側

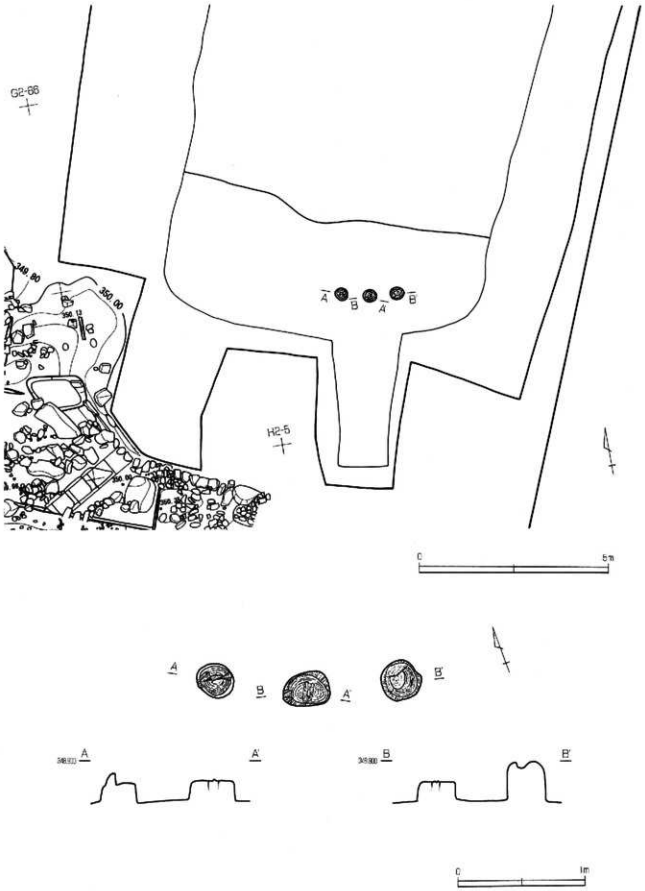


図13 物 堀 土 橋 北 側

2 - 94・95グリッドで安定した土層が確認され、木柱３本が検出された（図13）。木柱のうち中央の材は、表面が切断された状態であり、切断面中央に組み合わせるために差し込まれたと考えられる他の木材の一部が残されていた。

木柱はそれぞれ0.7m間隔で打ち込まれており、大きさは、中央の材の直径が約0.4mで、両側の材は直径約0.3mであった。柱同士にややズレもみられるが、東西方向に一定の間隔で打ち込まれており、惣堀北虎口階段と土塁との接点延長線上に位置することから、橋脚の可能性もあると考えた。しかしながら、３本１組を単位とする橋脚構造であれば、虎口に対して垂直となる南北方向に並ぶ配列が一般的であるがそれとは異なる。単体の橋脚とした場合でも、周辺部において対になる木柱は出土せず、現時点では性格不明と言わざるを得ない。

また、年代的には堆積土も過去に浚渫を受けていると考えられ、土層から判断することは困難であり、木柱の年代を示す直接的な資料は皆無である。ただし、溜池として造成あるいは使用するに際して打ち込まれたとものとするには、その意図も定かではなく、この木柱については今後の検討課題とする。

惣堀南側については、トレンチ11（図27）の上層観察によって概ね現地形に沿って堀跡の落ち込みが確認された。堀際には礫層が確認されていたが、いつの段階で敷設されたものであるかは確認できなかった。同様に惣堀南土橋の北東側を調査したが、市道鍛冶小路沿いに設けられた既存の石積みは堀跡埋土から立ち上がっており、新しい石積みであることが確認された。堀底についても、現時点で堆積している埋土下は岩盤状の地山が堆積土表層から約１m程度で確認されたことから、傾斜角度から考えても、惣堀北土橋から南土橋までの間の堀底は現状の堆積土表層から２m前後と推測される。

重複関係：なし。

出土遺物：近現代の陶磁器片が少量とかわらけなどが出土している。

第３節　土　塁

惣堀土塁（遺構：図14・15　遺物：図38・39）

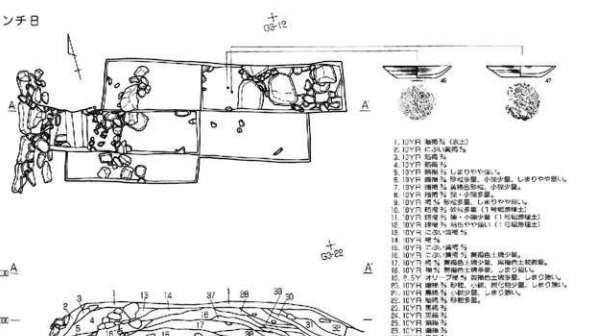
位　　置：Ｇ３ - １・２～41・42ライン、Ｇ２ - 48～50、Ｇ２ - 47～87ライン
（トレンチ１・４・８・16内）

検出状況：惣堀に沿って築かれた土塁であるが、宅地造成等による後世の開発で多くが失われており、調査区周辺は比較的土塁の形状が残されていたものの、調査前の残存状況からみても、農地開墾等によって当初の規模を失っていると判断した。よって、整備の上で必要となる土塁範囲と高さを検討するためのトレンチによる断面観察に主眼を置いた。特に土塁北側については、惣堀との境界確認の意味もあり、接続部の確認は不可欠であった。

既存土塁本体への調査はトレンチで行い、調査区全体に設定したトレンチのうち１・４・８・16が該当する。北側から順番に確認していくと、トレンチ８では地山を掘削した土砂を盛り上げて築いたと考えられる黄褐色系の土層堆積があり、標高350.50m前後で水平に堆積する土層が何層か認められた。22層上からは石列の可能性がある配石が検出されるとともに、付近からは館跡で16世紀後半以降にみられる薄手のかわらけが出土している（図14）。合わせて、１号堀跡の落ち込みが同レベルから始まっていることからも、22層は16世紀後半の生活面である可能性が高く、土塁は旧地形と生活面を一度に埋め立てて造成されたことが判明した。

トレンチ１では土塁造成層下層において炭化物とかわらけを多量に含む14層が標高350.20mで検出された。下層では炭化物などもなくなり、安定した土層となるため、14層直下の15層はかわらけの年代から16世紀後半の生活面と考えられる。トレンチ１では惣堀の範囲確認も同時に行っており、既存土塁基底部から北に調査区を広げたところ、素掘りの旧惣堀の落ち込みが検出された（図14）。同時にその後の護岸改修で構築されたと考えられ

トレンチ8



トレンチ1

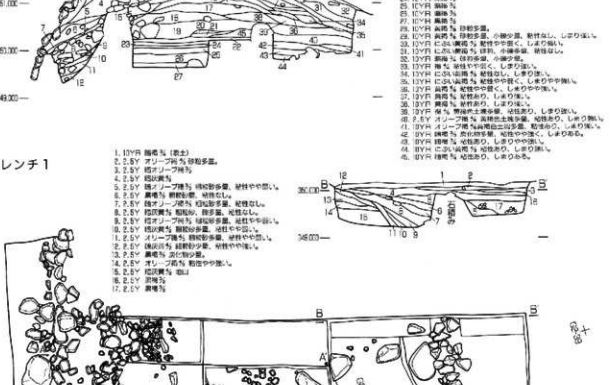
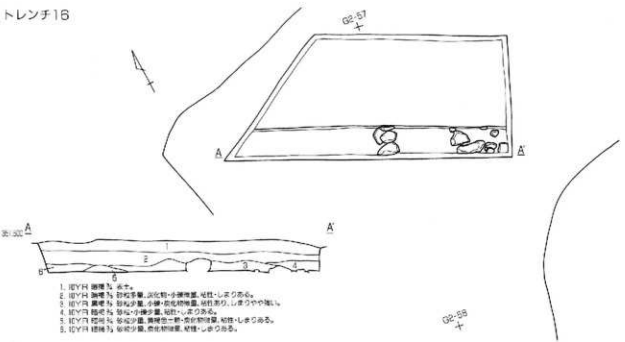
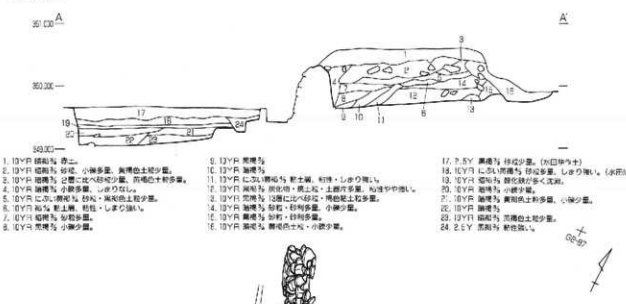


図14　惣堀土塁（トレンチ1・8）

トレンチ16



トレンチ4



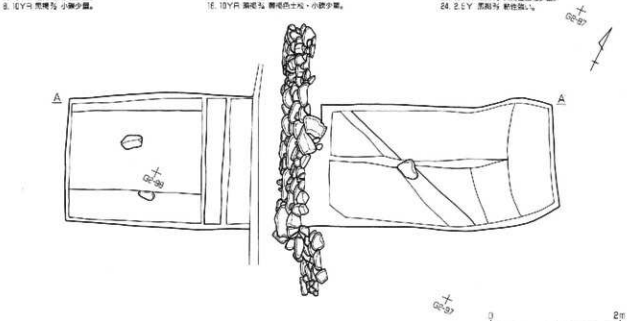


図15　惣堀土塁（トレンチ4・16）

る石積みの一部（全体は図12参照）が確認された。

トレンチ16は惣堀土塁隅に設定したトレンチであり、現況で残された土塁隅の規模と隅に向かって延びていた土橋との関係や構造物の有無を確認することを目的とした。調査した範囲においては、表土を除き全体が土塁構築層であることが確認されるとともに、構造物の痕跡などは認められなかった。

トレンチ４では、トレンチ１と同レベルにおいて炭化物とかわらけを多量に含む12層が検出されており、それより上層は土塁造成に係る盛土であるとみられるが、東側の惣堀境界付近は全体的に侵食されていた。注目すべき点は、土塁形成時の盛土が少なく、トレンチ西側下層で土塁の立ち上がりと思われる土層堆積が確認されたことである。特に土層の傾斜面に粘土層が用いられている点は、武田氏館跡におけるこれまでの調査事例からみると、土塁表面の被覆層である可能性が高く、粘土層に沿って土塁の端部とみられる落ち込みも確認された。よって、惣堀土塁はトレンチ４の位置で途切れるとともに、惣堀側は大きく削平されていると考えられた。

平面的な調査においてもＧ２－59・60、Ｇ３－51にかけて東西方向に走る褐色の粘土帯が検出されており、概ねトレンチ４の方向に延びることが判明したことからも、惣堀土塁の範囲は、残存していた規模よりも大きかったことが確認された。

重複関係：１号堀跡より新しい。

出土遺物：全体的に土塁下層に形成されていた炭化物を含む土層から多量のかわらけが出土している。形態的にはロクロ薄手かわらけが主体であり、厚手のものは極めて少ないことから16世紀第３四半期から第４四半期にかけての16世紀後半に火災によって形成された包含層と考えられる。特殊なものとしてはトレンチ８出土の46・47は薄手のかわらけであるが、厚手かわらけと同じような胎土で作られており、焼成も極めて良好なものであった。また、16・51は、武田氏館跡では出土数が少ない手づくねかわらけであった。

陶磁器はトレンチ１において、14の大窯段階の灰釉皿と、15の中国産の型押しの被花小皿があり、15は二次的に被熱して表面が発泡した状態であった。トレンチ４では41が常滑甕で、42～44は白磁端反皿、45は青花碗である。53は古瀬戸の灰釉端反皿で55の擂鉢は惣堀北側の範囲確認の際に土塁側から出土したものである。

第４節　虎　口

惣堀北虎口（遺構：図16～18　遺物：図40）

位　　置：Ｇ２－95～97及びＥ－６グリッド

検出状況：惣堀北土橋基部に位置し、調査前には惣堀土塁から連続して上塁状の高まりが続き、大手石塁へと続く平場と上橋の間には大きな段差が設けられ、コンクリートで固められた側溝が埋設されていた。上橋からの通路確認を目的として、当初はトレンチ５として調査に着手したが、掘削を開始して間もなく石列とともに礫層が検出された。礫層の間には粘土も混ざる様相であり、礫層を徐々に掘削したところ、下層から新たに石列が検出され、全体が階段状の構造であることが判明した。トレンチ調査によって４段の自然石を配した階段となることが明らかとなり、次いで階段幅や階段上下の平場の確認が必要となった。そのため、土層観察帯を一部に残し、全体的な調査へ切り替えた。

調査の結果、一つの石段の蹴上は約0.2mであり、踏み幅は下から１段目が約0.6m、２段目が約0.8m、３段目が約0.6mであり、４段目はそのまま土橋へと続くため、２段目の踏み幅を広くして意図的に踏み幅に変化をつけていることがわかる。階段幅は北側が惣堀の溜池開削、南側は段差処理の土留め石積みと側溝開削によって撹乱されていたため、両端の構造も含めて詳細は不明であったが、階段石列の残存幅では約６mまで確認された。

階段が発見された当初は土塁雁木である可能性も指摘されたが、惣堀北土橋の基部であり、

G2-86
G2-87
G2-88
G2-96
G2-97
G2-98
H2-5
H2-8
H2-18
H2-26
H2-27
350.00
349.50
349.00
0
5m

図16　物堀北虎口階段

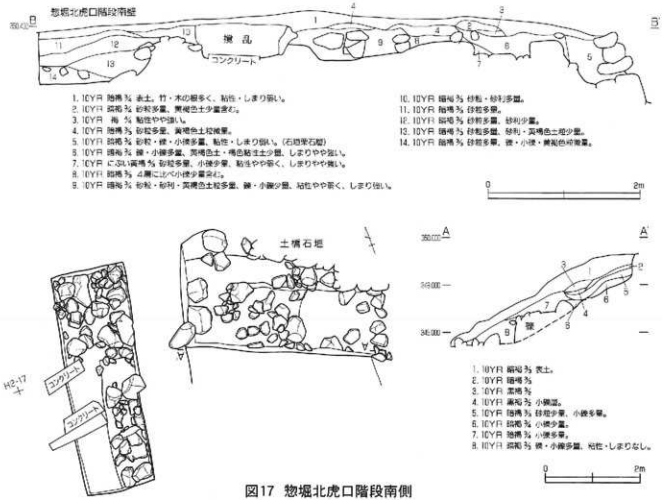


図17 惣堀北虎口階段南側

蹴上の高さや踏み幅を考慮すると、検出位置では高さや傾斜角から土塁を復元することができず、かつトレンチ４内において土塁端部が確認されたこともあり、虎口空間として開かれていたと結論付けた。

虎口空間である以上、門跡など何らかの遮蔽物が存在したと考えられるが、土橋北側の惣堀を溜池として改修した際の用水管埋設によって撹乱が著しいとともに、遺構確認面が現地表から極めて浅かったこともあり、階段上下の空間において門跡などの痕跡を確認することはできなかった。

また、虎口として機能するためには、南側にも連続する惣堀土塁が存在したはずであるが、現地形には残されていない。そのため、階段周辺から下段の平場へと下る南側の斜面地及び惣堀側の立ち上がりを調査したが、南側斜面は用水管埋設時にやはり大きく掘削されており、虎口空間を形成する土塁の痕跡は確認できなかった。ただし、惣堀側に設けたトレンチでは、落ち込みの基部で石列が検出されており、土塁などの土留めであることも考えられ、現時点では土塁が存在した可能性もある。

北虎口土橋については、既存幅は上面で約3.5mであり、北面には近代に築いたとみられる２・３石の石積みが堀埋土の上から立ち上げられており、南面には長さ約8.7mの自然石野面積みによる２段構造の石積みが存在した（図18）。武田氏館跡主郭に残る各土橋は橋の両面に石積みが施されており、主郭大手土橋南面以外はすべて段を有することから、本遺構についても古い可能性があった。石積みについては、上部は用水路管理に伴い塩ビ管が埋設されるなど後世の改変が著しいこともあり、石材の選定や積み方に統一性がなく、積み直しの痕跡が顕著であった。特に上下段に分けてみると、下段に比べて上段は積み方に乱れが多

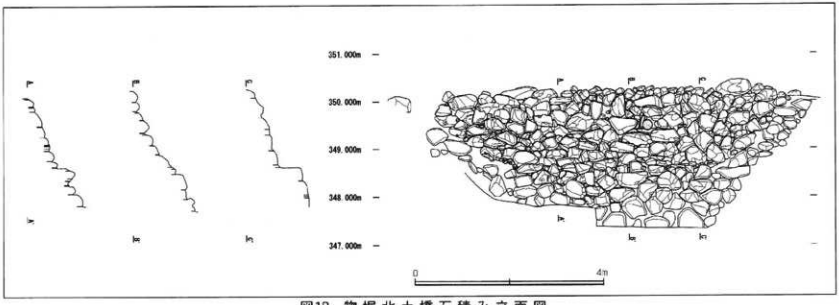


図18 惣堀北土橋石積み立面図

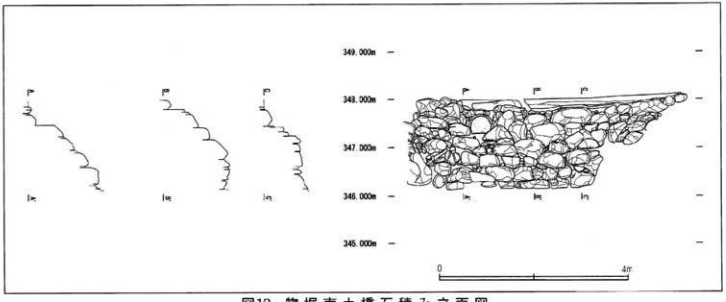


図19 惣堀南土橋石積み立面図

く、全体的に新しい可能性が高いと考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけが一定量出土しており、１～４までを掲載した。５は石鉢で、６は青磁酒海壺と考えられる。土橋からは４の擂鉢や５の鉄釉皿などが出土している。

惣堀南虎口（遺構：図19・25　遺物：掲載なし）

位　　置：II２－66～68、及びH２－77グリッド

検出状況：惣堀北虎口から約30m南側に位置し、土橋の規模は長さが約５m、幅約４mである。北土橋と同様に南面には自然石野面積みの石積みが残されているが、確認した範囲においては北土橋の二段構造の石積みとは異なり、一面で積み上げられている。右積み上部には排水用のコンクリート製の土管が埋め込まれていたことから、上部は積み直しが行われていると考えられる。下部については、築石が横目地を意識する部分も見受けられ、北土橋石積みに比べて古い要素がある。

土橋西側には枡形状の地割りが残されており、トレンチ９を設定して調査したところ、調査区東端から３枚の礎石が検出された。１号建物跡とした礎石建物跡は、一部分が現地表面に露出した状態で発見されており、惣堀南土橋基部に位置することから門跡と考えられる。礎石と礎石の間には、柱と柱を連結する地覆受けの玉石の石列が配されていた。門跡礎石の間隔は、東側から中央の間が約1.3m、中央から西側の間が約1.4mであり、全体では約2.7mの奥行きを持つ建物であったと考えられ、構造的に四脚門ではないかと推測される。後世の開発等で対になる礎石列は確認されていない。

東側と中央の礎石は後世の開発等で破損していたため詳細は不明であったが、西側の礎石表面には平坦面を作り出すためのノミによる整形痕が確認された。これまでの周辺部の調査においては、加工された礎石を使用した戦国期の礎石建物は確認されておらず、トレンチ９内の他の遺構確認面に比べて１号建物跡の検出面が高く、現地表に一部が露出していた状況を考慮すると、戦国期まで遡る門跡であるかは疑問が残り、今後様々な角度から検証する必要がある。

重複関係：なし。

出土遺物：近現代の陶磁器片が少量とかわらけなどが出土している。31～33は１号建物跡東側の土橋基部に掘削したサブトレンチ内から出土した熔融物付着のかわらけであるが、33には金粒が付着していた。

第５節　溝　跡

１号溝跡（遺構：図20　遺物：掲載なし）

位　　置：G３－３・13・23グリッド

検出状況：惣堀土塁基底部に沿って開削された溝跡であり、確認された範囲では南北方向に約16m、幅約0.4m、確認面からの深さ約0.2mであった。出土遺物などからも年代的には近世・近代以降と考えられたため、全長は確認しなかったが、おそらく惣堀北虎口付近の側溝に接続していたと考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけ、近現代の陶磁器などが微量出土。

２号溝跡（遺構：図23　遺物：掲載なし）

位　　置：G２－90・G３－91グリッド（トレンチ２内）

検出状況：トレンチ２南側において一部が検出されている。南北方向に延びる溝跡で、検出範囲内では全長約7.4m、幅約１m、確認面から深さ約0.3mである。溝底の様相から判断するかぎり

では水が流れた形跡はなく、性格などは不明である。
重複関係：なし。
出土遺物：かわらけが微量出土している。

3号溝跡（遺構：図7　遺物：図40）
位　　置：G3－3・4～G3－76グリッド
検出状況：大手石塁東側で検出された石積みの水路であるが、近年まで埋設管なども含めて利用されてきたようである。構造的には大手石塁付近からG3－3では直線的な石積みが存在するが、それより北側では素掘りの溝のみとなり、西側に向かって斜めに屈折していた。大手石塁付近では、底部から2・3石までが石塁築石に使用されているものと同規模の石材が使用されており、その上には小礫を用いた近代以降の石垣が構築されていた。よって、下部については石の大きさや積み方が近代以降の石垣と全く異なることから、時期差があることは明らかであり、3号溝跡に伴う石積みと判断した。
　溝跡両面の石積みは2・3石の石積みであるが、西面は石が縦方向に揃えられているものも多く、小礫が基底部近くから積み上げられている箇所もあり、全体的に石材や技法に統一性がみられない。その点について東面では、南側では明らかに後世の積み直しと考えられる箇所が存在するものの、全体的に横目地を意識した積み方がなされていた。石積み裏側の構造をみても、西面の裏込めには上部石垣から連続して栗石が充填されていたが、東面では裏込めの栗石は確認されず、戦国期の遺構面に近い高さが保たれていた。
　このような両面にみられる構造の違いが時期差を表すものであるかは検証することはできなかったが、少なくとも西面は近代以降の石垣構築時に改修されているのではないかと考えられる。東面についても、石積みなど構造的には戦国期の要素を含むようにもみられるが、G3－55内南壁の断面観察で近世以降に埋設された上管理設上層より石積みの造成層が新しく掘り込まれていることが確認されたことから、基本的に3号溝跡は新しい遺構ではないかと考えられる。
重複関係：なし。
出土遺物：かわらけ、陶磁器が少量出土。掲載した1は青磁大皿口縁部である。

4号溝跡（遺構：図20　遺物：掲載なし）
位　　置：G2－59グリッド
検出状況：惣堀土塁南端の粘土帯と既存の土塁の間で部分的に確認された溝跡であり、全体の規模は不明である。深さは約0.3mで、砂粒や小礫が多量に含まれており、流水があったことが伺える。高低差はあるが、位置的に平成12年度試掘調査で確認されている6号溝跡と対応する可能性がある。
重複関係：惣堀土塁より古い。
出土遺物：なし。

5号溝跡（遺構：図20　遺物：掲載なし）
位　　置：G3－75グリッド（トレンチ6内）
検出状況：トレンチ6南西隅で一部が確認されている。2号溝跡1層と同じ覆土が確認されたため溝跡としたが、深さは約0.05m前後と極めて浅く、詳細は不明である。
重複関係：なし。
出土遺物：なし。

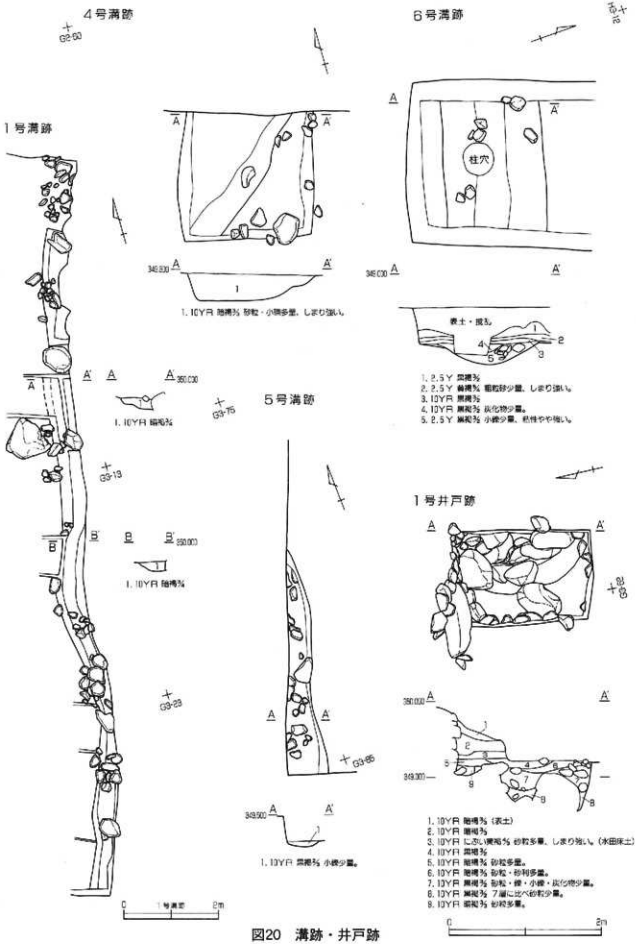

4号溝跡
6号溝跡
1号溝跡
5号溝跡
1号井戸跡
柱穴
表土・撹乱
1. 10YR 暗褐⅔ 砂粒・小礫多量、しまり強い。
1. 10YR 暗褐⅔
1. 10YR 暗褐⅔
1. 10YR 黒褐⅔ 小礫少量。
1. 2.5Y 黒褐⅔
2. 2.5Y 黄褐⅔ 細粒砂少量、しまり強い。
3. 10YR 黒褐⅔
4. 10YR 黒褐⅔ 炭化物少量。
5. 2.5Y 黒褐⅔ 小礫少量、粘性やや強い。
1. 10YR 暗褐⅔ (表土)
2. 10YR 暗褐⅔
3. 10YR にぶい黄褐⅔ 砂粒多量、しまり強い。(水田床土)
4. 10YR 黒褐⅔
5. 10YR 暗褐⅔ 砂粒多量。
6. 10YR 暗褐⅔ 砂粒・砂利多量。
7. 10YR 黒褐⅔ 砂粒・礫・小礫・炭化物少量。
8. 10YR 黒褐⅔ 7層に比べ砂粒少量。
9. 10YR 暗褐⅔ 砂粒多量。
0
2m

図20　溝跡・井戸跡

6号溝跡（遺構：図20　遺物：図40）

位　　置：H3 - 2グリッド（トレンチ3北内）

検出状況：トレンチ6南端部で検出された溝跡であり、東西方向に延びている。トレンチ全体が撹乱や削平を受けているが、確認された規模は、幅約1.3m、深さ約30cmであった。

重複関係：未調査の柱穴より新しい。

出土遺物：かわらけが微量出土しており、掲載した1点を始め、16世紀中葉のかわらけであることから、武田期の遺構と考えられる。

第6節　井戸跡

1号井戸跡（遺構：図20　遺物：図40）

位　　置：G3 - 41グリッド

検出状況：井戸跡上面は整地層に覆われており、土塁基底部の状況確認のために掘削したサブトレンチ内で偶然発見された。狭い範囲の確認であったため、全体の規模は不明である。地山面に掘り込まれていたが、廃絶時に礫による埋め戻しが行われたとみられ、大小の礫が多数掘り出された。7層からは疎らではあるが、炭化物が一定量確認されたことから、周囲で起きた火災後に廃絶したと考えられる。

重複関係：惣堀土塁・建物跡より古い。

出土遺物：かわらけなどが出土しているが、2・3は青花皿である。遺物からみて16世紀後半の一群と考えられる。

第7節　建物跡

1号建物跡については、惣堀南虎口において記載済みであるため、ここではそれ以外の建物関連の遺構について報告する。

建物基壇跡（遺構：図21　遺物：図40）

位　　置：G3 - 42・43グリッド

検出状況：グリッド内において焼失した際に堆積したとみられる炭化物と焼土層が確認され、礎石や柱穴は検出されていないものの、砕片となった焼けた壁土片が帯状に検出された。G3 - 51には小礫による2号石列が検出されており、1号井戸跡などの生活面を埋め立て、基壇状に造成されていた可能性が高いことから、何らかの建物が存在したと考えられる。残念ながら、惣堀土塁との新旧関係などは確認できなかった。

重複関係：1号井戸跡より新しい。

出土遺物：周辺からはかわらけなどが出土しているが、図化した1～3が焼土面に共伴していた。1は袋物で水滴のようなものと考えられるが、器種は定かではない。

1号竪穴建物跡（遺構：図25　遺物：掲載なし）

位　　置：H2 - 70グリッド

検出状況：遺構は、土塁の被覆層に使用されることが多い褐色の粘土に覆われていたため、人為的に破却されたものであることは明らかであった。掘削過程において、壁際から竪穴壁面を覆っていた板材の痕跡や材を繋ぎ止めた釘が検出され、床面では地覆材が2箇所で確認されたが、使用されていた釘は丸釘であり、近代以降の出土遺物も得られたことから、比較的新しい竪穴建物跡であることが判明した。昭和初期の古写真や地籍図などには民家は確認されないことから、それ以前に何らかの建物が同地内に存在した可能性がある。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけなど中世遺物のほかに、土製玩具やビー玉などが床面付近から出土したことから、戦国期の遺構ではなく、明治・大正期の遺構と考えられる。

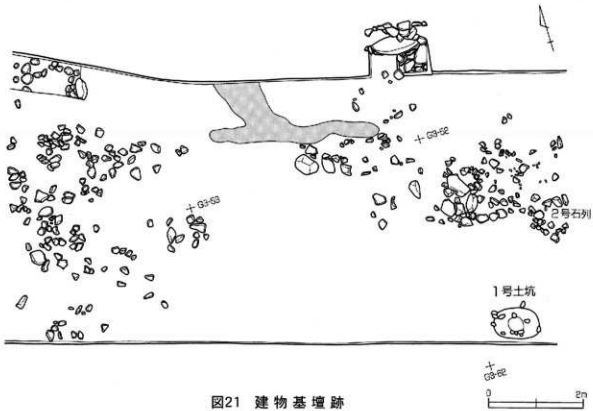


図21　建物基壇跡

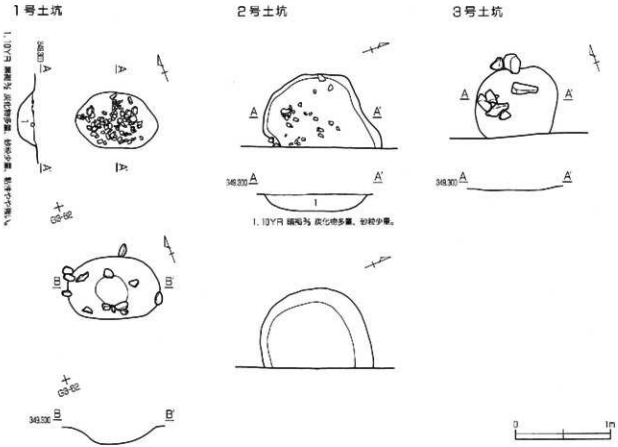


図22　1号～3号土坑

第8節　土　坑

1号土坑（遺構：図22・遺物：なし）

位　　置：G3－51グリッド

検出状況：遺構平面形は楕円形で、規模は長軸約0.95m、短軸約0.66m、深さ約0.18mであり、土坑内には確認面から底部までかわらけ片と炭化物が一括廃棄されていた。かわらけの焼成も甘く、多量の炭化物が伴うことから焼成遺構ではないかと考えたが、土坑内が焼けている様子はなく、あくまでかわらけの廃棄を目的とした土坑と考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：浅黄橙色の器壁の薄いロクロかわらけが多数出土しており、うち33点を図化した。この一群は胎土もきめ細かく均質であり、精製された粘土を使用しているようである。焼成不良によるものか、精緻な胎土のためかは定かではないが、土器自体の強度が弱く、洗浄時に溶け出してしまうような状況のものもあった。

一括廃棄されていたかわらけは、3形態に分類できるものの、それが規格の差であるか工人差であるかは定かではない。そのうち、15には内面から体部の立ち上がりとなる場所に工具の圧痕のようなものが確認されており、このほかにも数点出土している。

2号土坑（遺構：図22・遺物：掲載なし）

位　　置：G3－74グリッド（トレンチ6内）

検出状況：遺構東側はトレンチ外に展開するが、遺構平面形は円形と考えられ、規模は検出された範囲内で長軸約1.12m、短軸約0.83m、深さ約0.16mである。1号土坑同様かわらけと炭化物を多量に含む一括廃棄土坑と考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：浅黄橙色で器壁の薄い精製された粘土を用いたかわらけのほか、砂粒を多く含む黄橙色系の薄手タイプのかわらけが一定量を占める。掲載したものは10点のみだが、うち1・8・10が砂粒を含む後者のかわらけである。このことから、浅黄橙色のかわらけの年代は16世紀後半代であることが判明するとともに、出土傾向からみても、特殊なかわらけである可能性が想定される。

3号土坑（遺構：図22・遺物：図55）

位　　置：G3－61グリッド

検出状況：遺構の南側はトレンチ外に展開するが、遺構平面形は円形と考えられ、規模は検出された範囲で長軸約0.82m、短軸約0.7mである。上面は削平されていると考えられ、深さは数センチ程度と浅かったものの、土層などは西隣に位置する1号土坑と同じであった。

重複関係：なし。

出土遺物：出土数は他の土坑に比べて少なく、掲載遺物は1～6であるが、1・4が黄橙色系薄手タイプのかわらけであり、残りが精製された胎土のかわらけである。

第9節　トレンチ及び遺構外出土遺物

基本的に整備手法の上で一定面積の調査が不可欠な調査箇所以外はトレンチによって確認作業を行っている。特にB地区については、宅地造成などが過去に行われた場所であることから大部分が平坦地であり、今後の整備方針を決める上での性格付けが不十分であったため、試掘調査として確認作業を実施している。

なお、トレンチは1～17まで付しているが、1・4・8・16は惣堀土塁、5は惣堀北虎口、7は大手石塁南端の調査区として設定した後、面的な調査の中へ組み込まれたため、記述は割愛する。

トレンチ２（遺構：図23　遺物：図42）

平成12年度試掘調査の東西トレンチを挟む形で南北方向にトレンチを設定した。トレンチ北側は惣堀土塁範囲確認に伴い先行して調査区を掘削していたため、北側の土層断面を失った状態であったが、基本的には水田造成層が連続していたため、土層に大きな変化はないと思われる。設定したトレンチの北端は土塁粘土帯で止め、その南側の状況を確認したが、薄く整地層が被る程度ですぐに地山が検出された。その結果、粘土層は地山上から盛り付けられている状況が確認された。

トレンチ南側については、サブトレンチを入れて断面観察を行ったところ、南側へ向かって大きく盛土造成されている状況が確認された。平成12年度調査時の遺構確認面の高さを考慮しても、サブトレンチ下層に近い高さであると考えられたことから、南北のトレンチ間には地形に大きな段差が生じていると考えられた。

盛土造成された上面には２号溝跡が構築されているとともに、大手石塁と惣堀北虎口を繋ぐようにレベルが保たれていることから、検出された盛土は武田氏滅亡後の大手改変時の造成と考えられる。同時に地形の高低差は、そのまま武田氏段階の段切りによる屋敷区画であると考えられ、いくつかの小規模な区画が連続した一つの大区画に再編された過程を知る上で重要な発見であった。

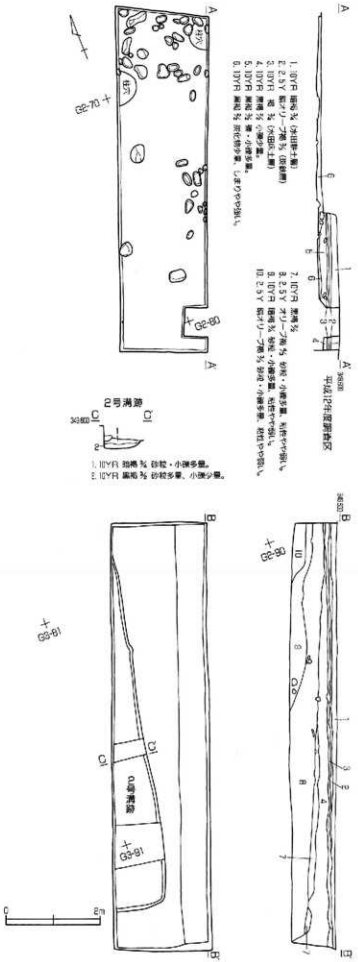


図23 トレンチ２

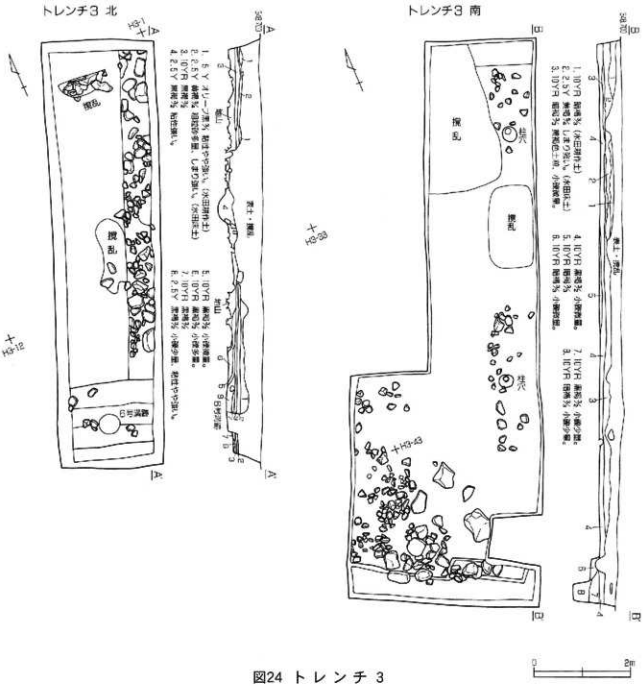


図24 トレンチ3

トレンチ3（遺構：図24　遺物：図43・44）

トレンチ1・2から連続して調査区一帯の地形を把握するために南北方向に設定されたトレンチである。トレンチ2同様南北に分割して調査しているが、北側では僅かに残された水田造成層直下で地山が検出された。遺構は南端部で東西方向に横断する6号溝跡を検出したのみであり、水田造成時に戦国期の遺構面の多くは削平されたと考えられる。

南側では水田層直下で僅かに包含層が残されており、トレンチ南側では人為的に集められた小礫群や遺物などが確認された。このことから、敷地に高低差が存在した可能性が考えられ、6号溝跡付近を境界として北側は水田造成時かそれ以前に大きく削平を受け、南側は北側に比べて比較的良好な状態で残されたと考えられる。

トレンチ６（遺構：全体図中　遺物：図42）

トレンチ２と並行するように設定した南北トレンチで、土層堆積状況も類似した造成であることが確認された。このことから、Ａ区の平坦面のうち、南半分は盛土造成によって構築された空間であることが明らかとなった。トレンチ内の造成面上では２号溝跡と類似する５号溝跡や２号土坑が検出されている。惣堀北虎口側と大手石塁側を繋ぐ造成面が年代的に武田氏滅亡後の造作である可能性が高いことから、２号土坑で出土している精製された浅黄橙色かわらけの年代を判断する上で重要な手掛かりとなる。

トレンチ９（遺構：図25　遺物：図43・44）

惣堀南虎口西側の区画内を確認する目的で東西方向に設定したトレンチであり、南土橋側で１号建物跡が検出されたことは前述のとおりである。他に検出された遺構では、Ｈ２－70グリッド内で１号竪穴建物跡が検出されているが、近代以降の建物跡と考えられている。よって、公有地化される段階で存在した民家以前に何らかの施設が存在した可能性もあり、年代が疑問視された１号建物跡についても幅広く検討する必要がある。

戦国期の遺構としては、１号建物跡の礎石検出面より下層から南北方向に３条の石列が検出されている。３号石列に面はなく乱雑に礫が詰め込まれていたため、暗渠などの可能性もあるが、４・５号石列は西側に面を有するように意図的に配石されていた。特に４号石列は西側が一段低くなっており、礫などによって人為的に埋め戻されていたことから、水路や屋敷区画として機能した可能性もある。

出土遺物として特質すべきものは、４号石列脇から高麗青磁碗が出土している。

トレンチ10・12・13（遺構：図26　遺物：図43・44）

惣堀南虎口西側の区画内でもトレンチ９より北側に位置し、最初にトレンチ10が設定され、後にトレンチ12・13が追加設定された。トレンチ10では北壁際が埋設物によって攪乱されており、南側は0.1mほどの表土層直下に焼土塊や炭化物などを含む黒褐色土層が確認された。土層はその２層であり、明確な遺構は確認されていないものの、トレンチ南側で褐色の粘土層や焼土、灰が比較的まとまって検出された。

トレンチ10の結果を受けてトレンチ12・13を調査したが、両トレンチの北側から褐色の粘土層が面的に検出された。粘土層は0.1m前後の厚さで敷設されており、締め固められていたことから、建物内の土間ではないかと考えられた。さらにトレンチ12南東側では粘土混じりの土で固められた石列が検出された。石列東側は落ち込んでおり、砂層が形成されるなど水が溜まっていたような痕跡が確認された。部分的な調査であるため詳細は不明であるが、惣堀との直接的な関係はなく、あくまで別の遺構ではないかと思われる。

トレンチ10を中心として縄文土器が多数出土しており、調査区全体の中でも最もまとまった数量が出土していることから、下層に縄文中期の遺構が存在すると考えられる。

トレンチ11（遺構：図27　遺物：図44）

惣堀北虎口南側の斜面を下った位置に惣堀の範囲確認と土塁の有無を確認するために設定したトレンチである。当初は２m幅で設定したものの、調査によって人為的に設置されたと思われる巨石や壁土の焼土塊などが検出されたことから範囲を拡張して調査を実施した。トレンチ内では主に南東側を中心に焼土塊となった壁土片が多数出土するとともに、それらを含む焼土面が確認されていることから、火災によって建物跡が焼失したと考えられる。

出土遺物では38～40が焼けた壁土であり、図化したものの他に小塊が多数出土した。

トレンチ14・15（遺構：図28　遺物：図44）

トレンチ14は大手石塁南側で関連する遺構と生活面を確認することを目的として東西方

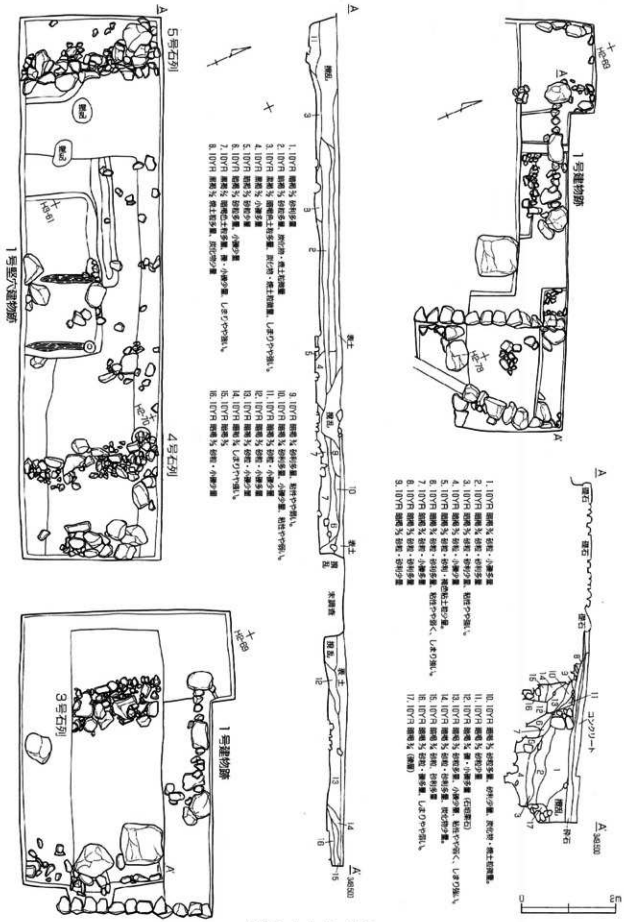
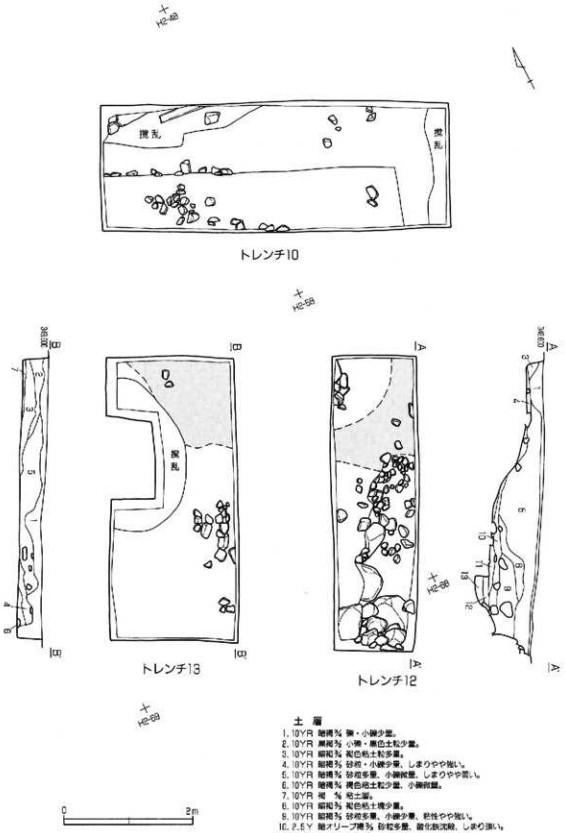

1号建物跡
1号竪穴建物跡
3号石列
4号石列
5号石列
コンクリート
表土
黒色
暗黒色
褐色
黒褐色
暗褐色
赤褐色
灰色
暗灰色
明黄色
暗黄色
明赤色
暗赤色
明青色
暗青色
明紫色
暗紫色
明緑色
暗緑色
明橙色
暗橙色
明桃色
暗桃色
明茶色
暗茶色
明灰色
暗灰色
明白色
暗白色
明黒色
暗黒色
明赤褐色
暗赤褐色
明黄褐色
暗黄褐色
明青褐色
暗青褐色
明紫褐色
暗紫褐色
明緑褐色
暗緑褐色
明橙褐色
暗橙褐色
明桃褐色
暗桃褐色
明茶褐色
暗茶褐色
明灰褐色
暗灰褐色
明白褐色
暗白褐色
明黒褐色
暗黒褐色
明赤黄色
暗赤黄色
明黄黄色
暗黄黄色
明青黄色
暗青黄色
明紫黄色
暗紫黄色
明緑黄色
暗緑黄色
明橙黄色
暗橙黄色
明桃黄色
暗桃黄色
明茶黄色
暗茶黄色
明灰黄色
暗灰黄色
明白黄色
暗白黄色
明黒黄色
暗黒黄色
明赤青色
暗赤青色
明黄青色
暗黄青色
明青青色
暗青青色
明紫青色
暗紫青色
明緑青色
暗緑青色
明橙青色
暗橙青色
明桃青色
暗桃青色
明茶青色
暗茶青色
明灰青色
暗灰青色
明白青色
暗白青色
明黒青色
暗黒青色
明赤紫色
暗赤紫色
明黄紫色
暗黄紫色
明青紫色
暗青紫色
明紫紫色
暗紫紫色
明緑紫色
暗緑紫色
明橙紫色
暗橙紫色
明桃紫色
暗桃紫色
明茶紫色
暗茶紫色
明灰紫色
暗灰紫色
明白紫色
暗白紫色
明黒紫色
暗黒紫色
明赤緑色
暗赤緑色
明黄緑色
暗黄緑色
明青緑色
暗青緑色
明紫緑色
暗紫緑色
明緑緑色
暗緑緑色
明橙緑色
暗橙緑色
明桃緑色
暗桃緑色
明茶緑色
暗茶緑色
明灰緑色
暗灰緑色
明白緑色
暗白緑色
明黒緑色
暗黒緑色
明赤橙色
暗赤橙色
明黄橙色
暗黄橙色
明青橙色
暗青橙色
明紫橙色
暗紫橙色
明緑橙色
暗緑橙色
明橙橙色
暗橙橙色
明桃橙色
暗桃橙色
明茶橙色
暗茶橙色
明灰橙色
暗灰橙色
明白橙色
暗白橙色
明黒橙色
暗黒橙色
明赤桃色
暗赤桃色
明黄桃色
暗黄桃色
明青桃色
暗青桃色
明紫桃色
暗紫桃色
明緑桃色
暗緑桃色
明橙桃色
暗橙桃色
明桃桃色
暗桃桃色
明茶桃色
暗茶桃色
明灰桃色
暗灰桃色
明白桃色
暗白桃色
明黒桃色
暗黒桃色
明赤茶色
暗赤茶色
明黄茶色
暗黄茶色
明青茶色
暗青茶色
明紫茶色
暗紫茶色
明緑茶色
暗緑茶色
明橙茶色
暗橙茶色
明桃茶色
暗桃茶色
明茶茶色
暗茶茶色
明灰茶色
暗灰茶色
明白茶色
暗白茶色
明黒茶色
暗黒茶色
明赤灰色
暗赤灰色
明黄灰色
暗黄灰色
明青灰色
暗青灰色
明紫灰色
暗紫灰色
明緑灰色
暗緑灰色
明橙灰色
暗橙灰色
明桃灰色
暗桃灰色
明茶灰色
暗茶灰色
明灰灰色
暗灰灰色
明白灰色
暗白灰色
明黒灰色
暗黒灰色
明赤白色
暗赤白色
明黄白色
暗黄白色
明青白色
暗青白色
明紫白色
暗紫白色
明緑白色
暗緑白色
明橙白色
暗橙白色
明桃白色
暗桃白色
明茶白色
暗茶白色
明灰白色
暗灰白色
明白白色
暗白白色
明黒白色
暗黒白色
明赤黒色
暗赤黒色
明黄黒色
暗黄黒色
明青黒色
暗青黒色
明紫黒色
暗紫黒色
明緑黒色
暗緑黒色
明橙黒色
暗橙黒色
明桃黒色
暗桃黒色
明茶黒色
暗茶黒色
明灰黒色
暗灰黒色
明白黒色
暗白黒色
明黒黒色
暗黒黒色

図25　トレンチ 9



土 層

1. 10YR 暗褐％ 強・小礫少量。
2. 10YR 黒褐％ 小礫・黒色土粒少量。
3. 10YR 暗褐％ 褐色粘土粒多量。
4. 10YR 暗褐％ 砂粒・小礫少量、しまりやや強い。
5. 10YR 暗褐％ 砂粒多量、小礫微量、しまりやや弱い。
6. 10YR 暗褐％ 褐色粘土粒少量、小礫微量。
7. 10YR 褐 ％ 粘土層。
8. 10YR 暗褐％ 褐色粘土塊少量。
9. 10YR 暗褐％ 砂粒多量、小礫少量、粘性やや強い。
10. 2.5Y 暗オリーブ褐％ 砂粒多量、暗化胡沈殻、しまり強い。
11. 2.5Y 暗オリーブ褐％ 砂粒多量、しまりやや強い。
12. 10YR にぶい黄褐％ 黄褐色土粒多量、粘性、しまり強い。
13. 10YR にぶい黄褐％ 12層に比べ砂粒を多く含む。

図26 トレンチ10・12・13

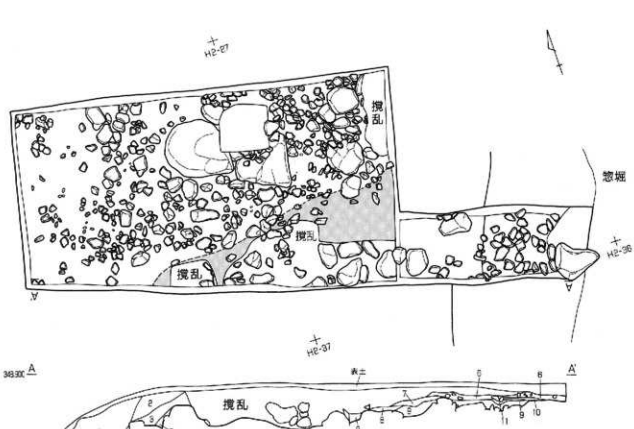


図27 トレンチ11

向に設定した。公有地化する以前に存在した建物群によって撹乱が著しく、すぐに地山が検出された。地山上での遺構確認でG３－86内で３号堀跡が検出され、その西側で炭化物の集中箇所が確認されている。炭化物は種子同定の結果、98～99％が米であり、残り数％が稗や大豆類であった。

調査区南側に設定したトレンチ15はトレンチ14と比較して撹乱が少なく、水田層直下で包含層などが確認された。トレンチ東側では土坑状の平面形を確認するとともに、H３－27内では掘削したサブトレンチ内底部において焼けた埋桶と思われる円形の炭化物を検出した。全体で地山は確認されなかったことから、トレンチ３で判明した調査成果同様、B区でも北側に位置するトレンチ14は大幅に削平を受け、反対にトレンチ15を設定した南側は元々の地形が北側に比べて低く、比較的良好な状態で検出されたと考えられる。

トレンチ17（遺構：全体図中）

惣堀北虎口と下段との接続に関わる遺構等の有無を確認するために設定したが、遺構や特別に土層等の変化もみられなかったことから、上面の精査のみで調査を終了した。

図28　トレンチ14・15

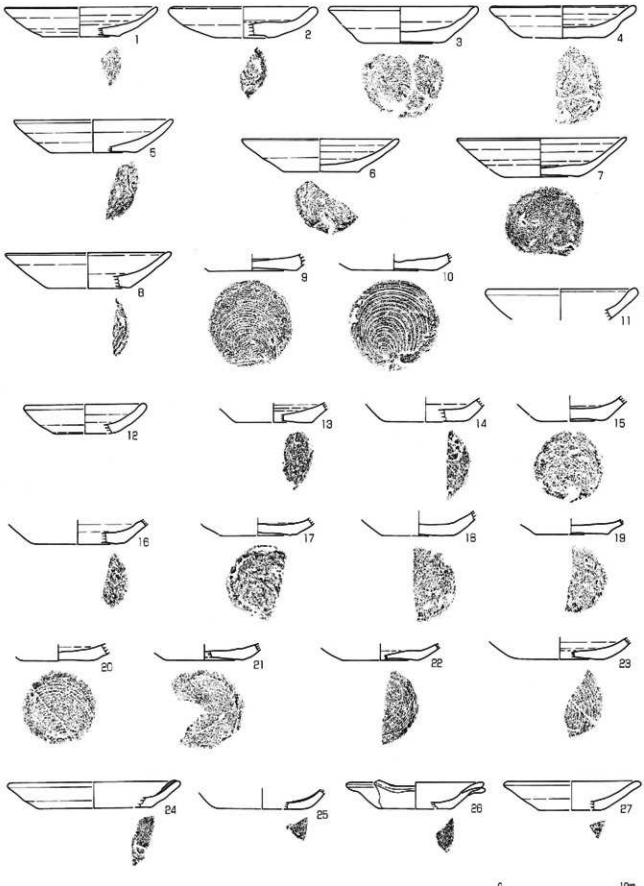


図29　大手石墓出土遺物（1）

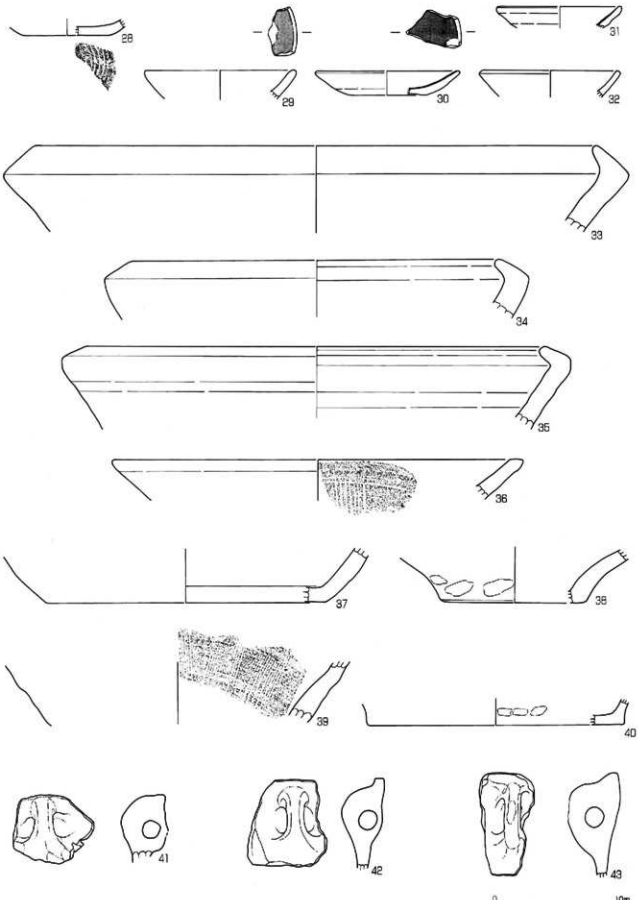


図30　大手石塁出土遺物（2）

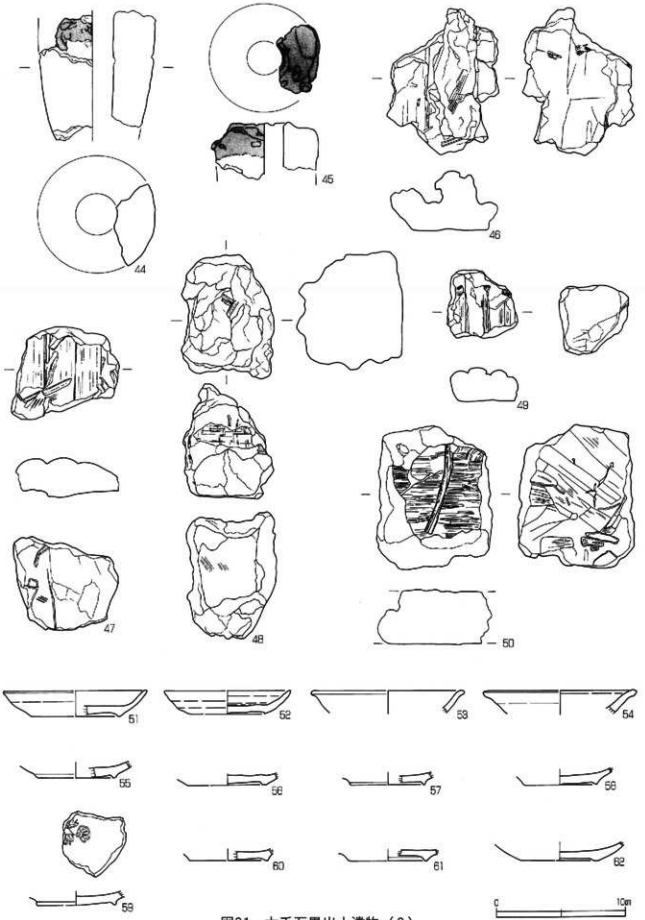


図31　大手石塁出土遺物（3）

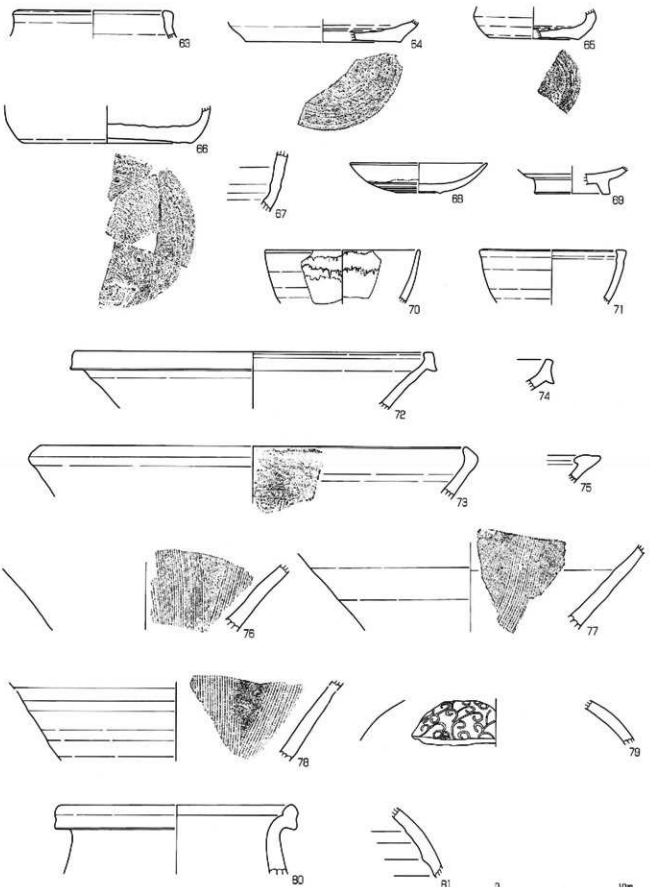


図32　大手石墓出土遺物（4）

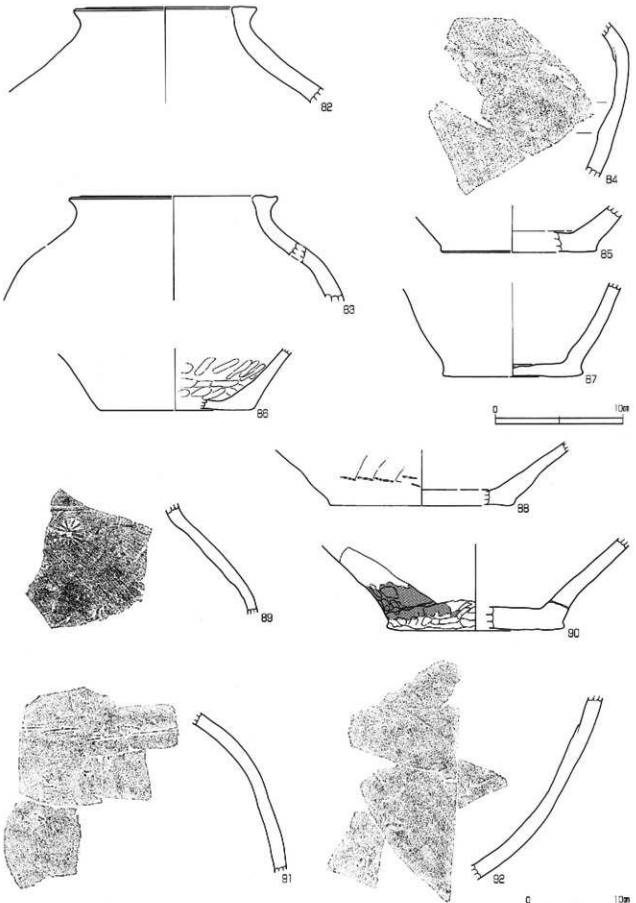


図33　大手石墓出土遺物（5）

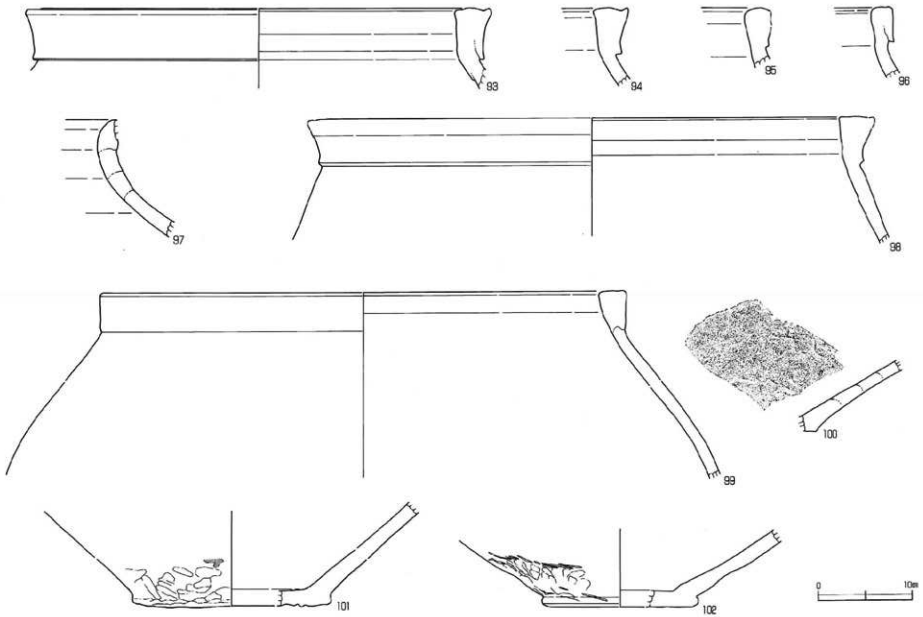


図34　大手石塁出土遺物（6）

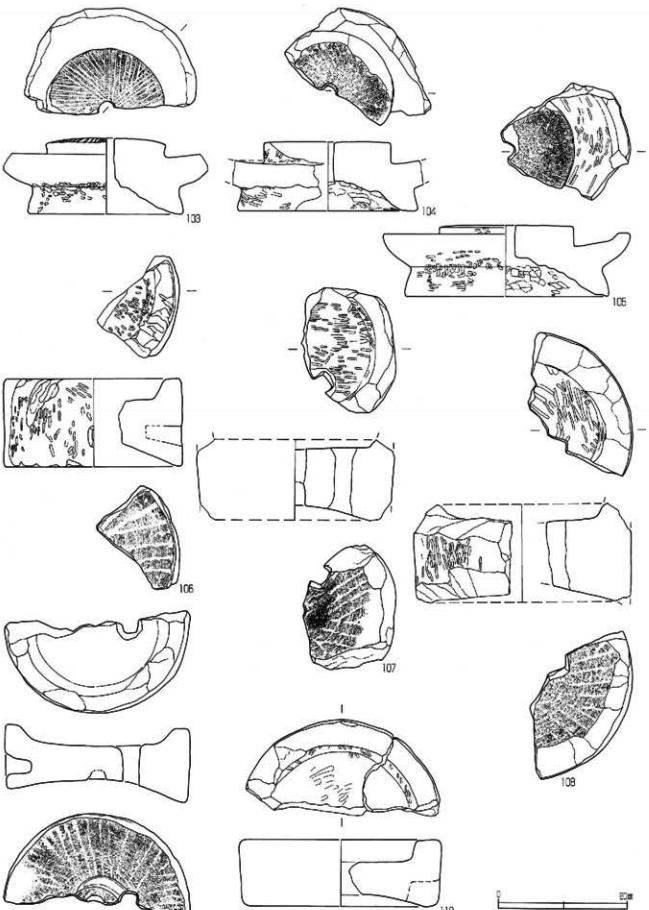


図35　大手石塁出土遺物（7）

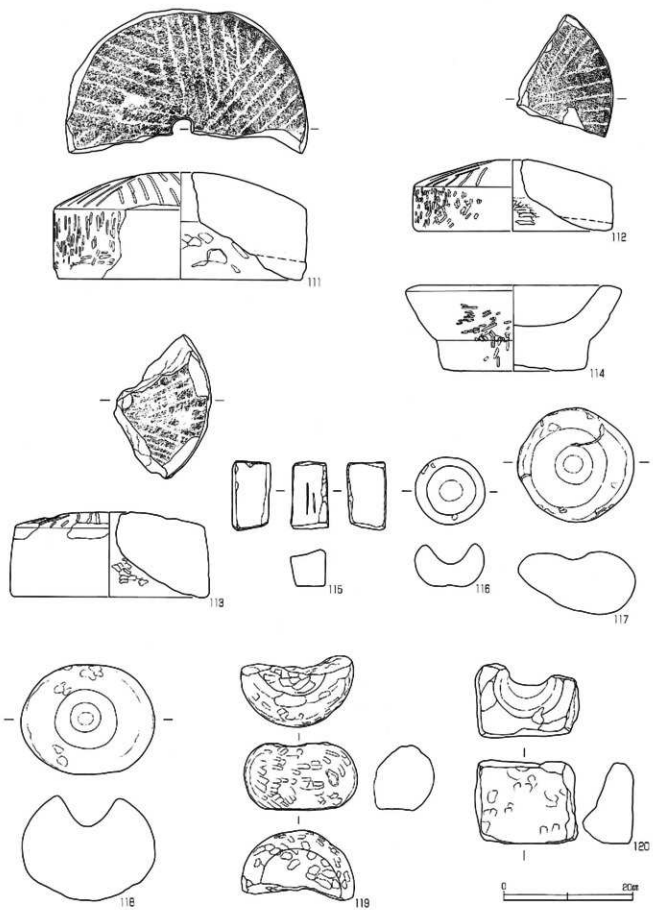


図36　大手石塁出土遺物（8）

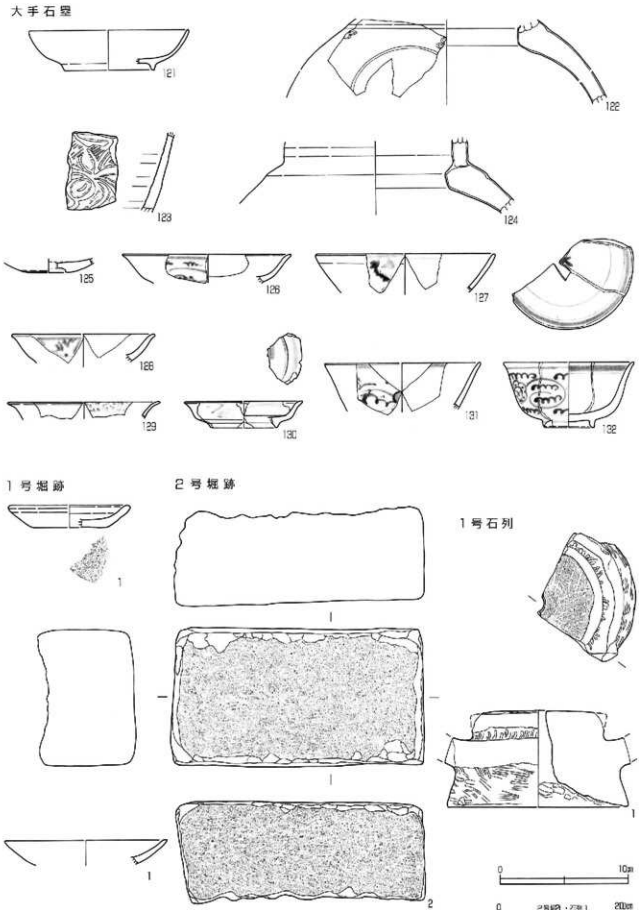


図37　大手石塁（9）、1号・2号堀跡、1号石列出土遺物

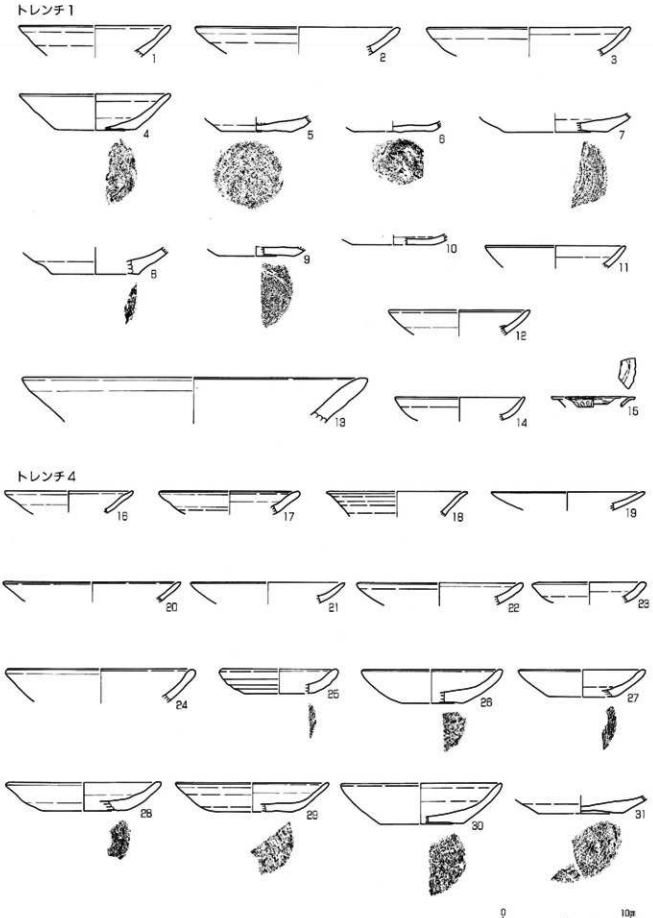


図38 物堀土塁出土遺物（1）

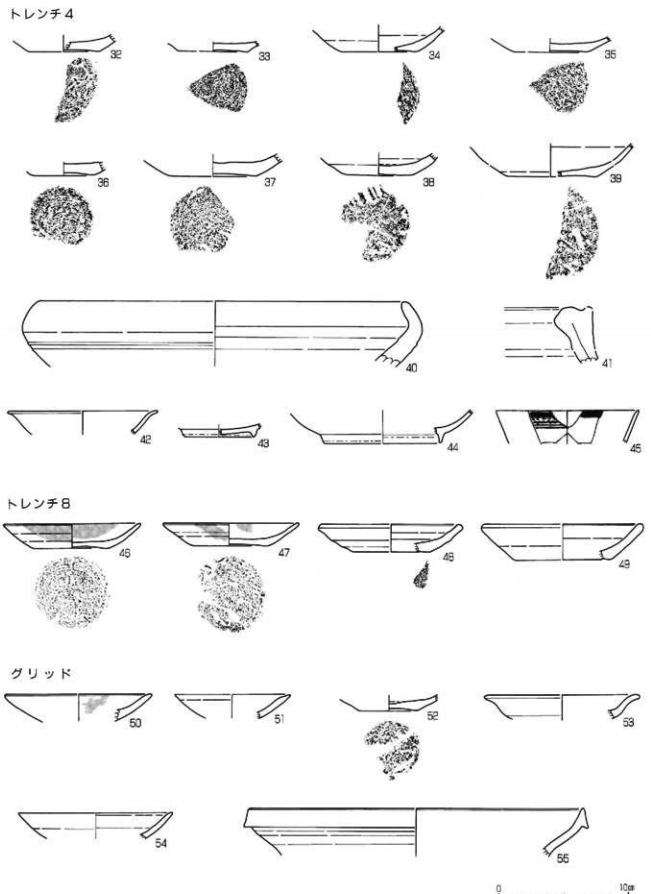


図39 惣堀土塁出土遺物（2）

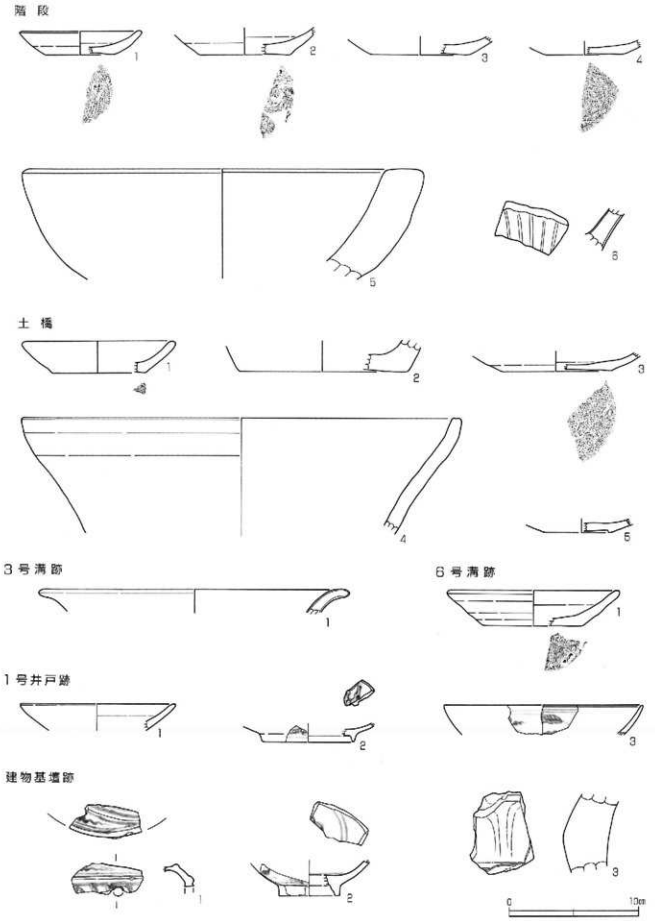


図40　階段、土橋、溝跡、井戸跡、建物基壇跡出土遺物

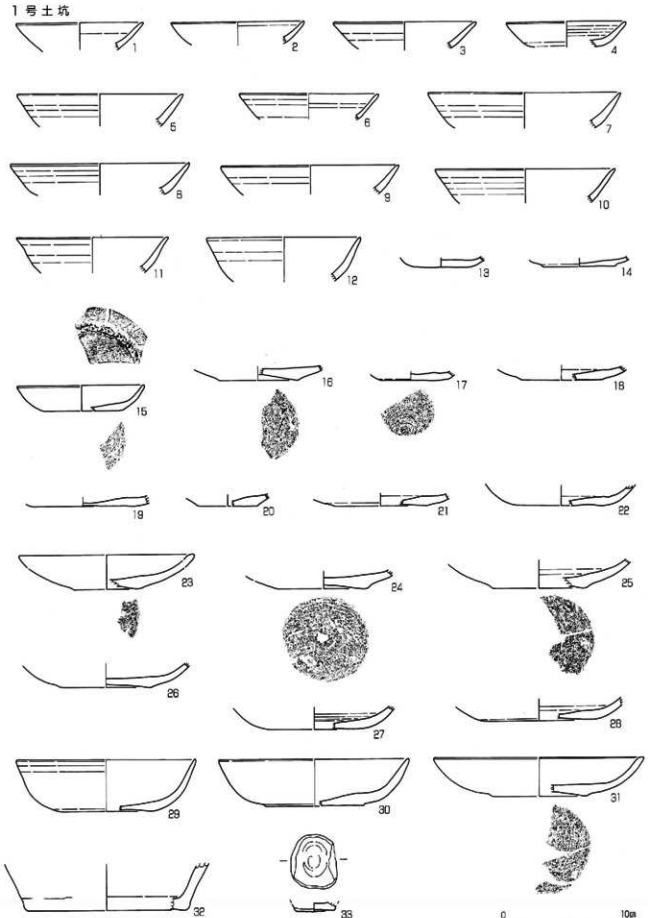


図41　1号土坑出土遺物

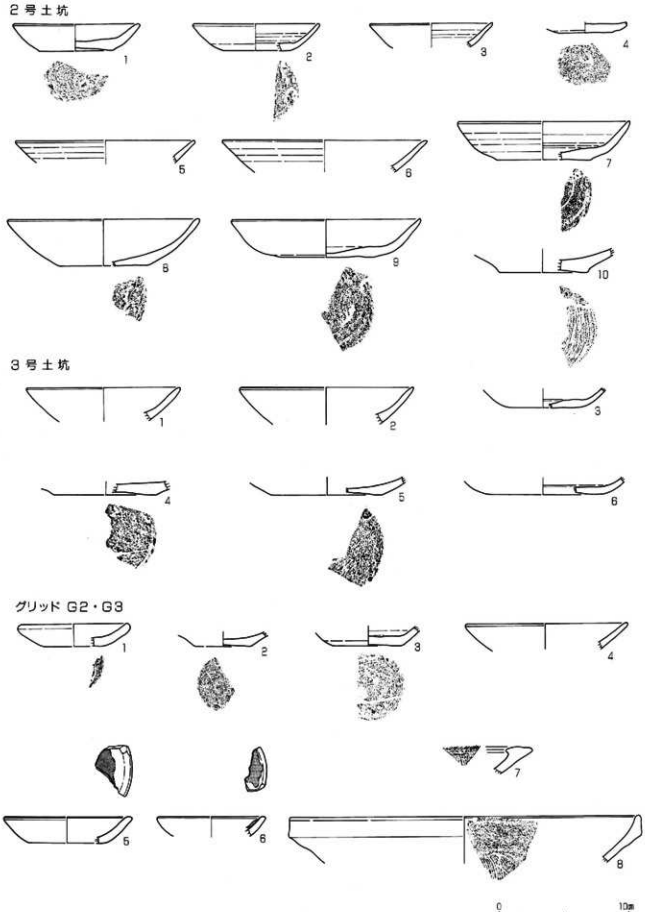


図42　2号・3号土坑、グリッド出土遺物（1）

グリッド H2・H3

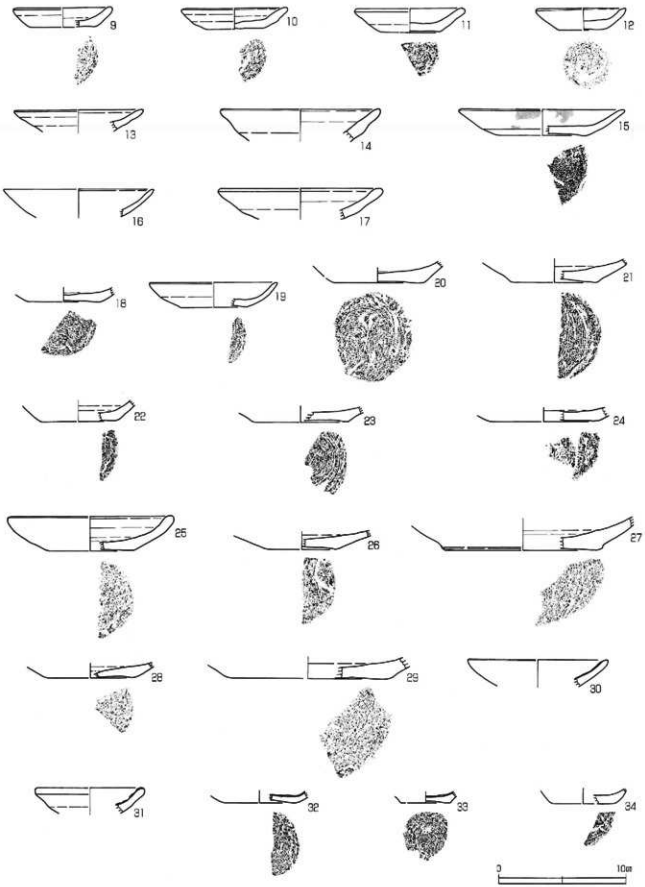


図43　グリッド出土遺物（2）

グリッド H2・H3

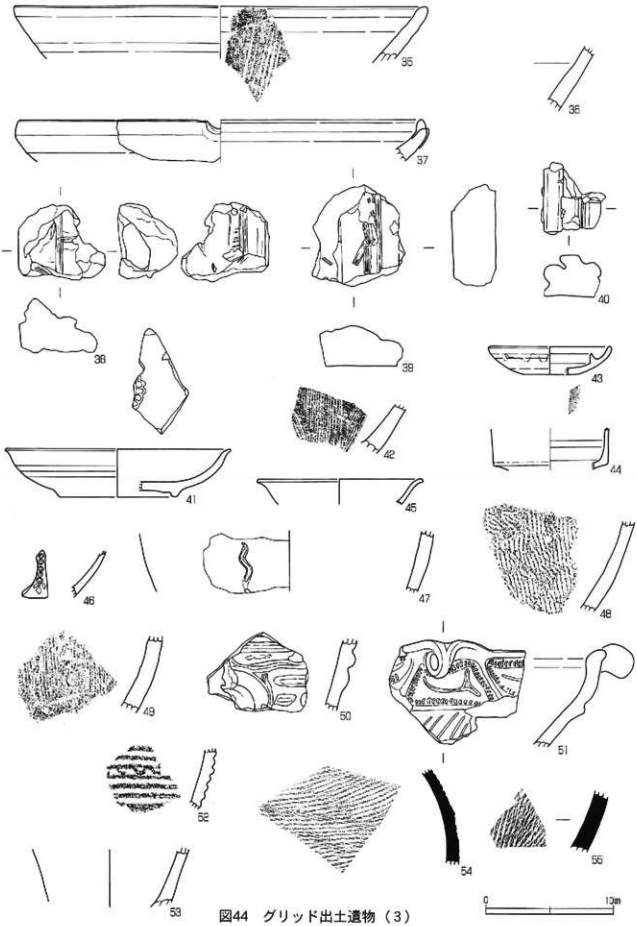


図44　グリッド出土遺物（3）

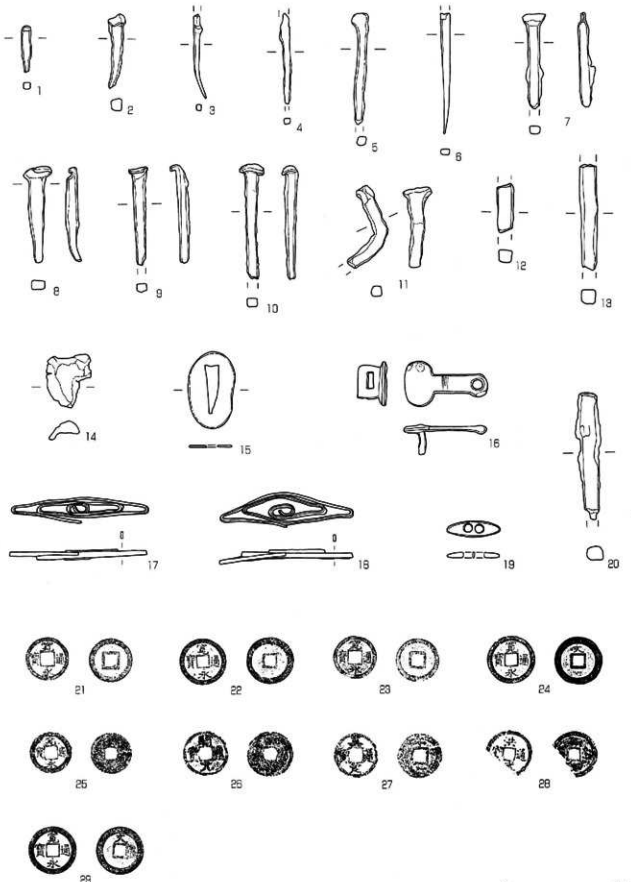

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
8cm

図45 金属製品

出土遺物観察表

単位：cm　（ ）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地等	器種等	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
29	1	G3-35 石塁	在地	かわらけ	(11.8)	2.3	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
29	2	G3-36 石塁	在地	かわらけ	11.0	2.4	4.4	7.5YR 橙 6/6	良	
29	3	G3-37 石塁	在地	かわらけ	(11.2)	2.9	(3.9)	10YR 鈍い黄橙 5/3	良	
29	4	G3 26 石塁	在地	かわらけ	(10.9)	2.6	(6.4)	5YR 橙 6/6	良	
29	5	G3-46 石塁	在地	かわらけ	(12.2)	2.6	(6.5)	7.5YR 橙 7/6	良	
29	6	G3-35 石塁	在地	かわらけ	(12.0)	2.6	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	内外黒変
29	7	G3 56 石塁	在地	かわらけ	(13.2)	3.0	6.0	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
29	8	G3-57 石塁	在地	かわらけ	(12.7)	2.8	(6.5)	7.5YR 橙 7/6	良	
29	9	G3 66 石塁	在地	かわらけ	-	-	6.9	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
29	10	G3-66 石塁	在地	かわらけ	-	-	6.4	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
29	11	石塁表土	在地	かわらけ	(11.4)	-	-	7.5YR 橙 7/6	良	
29	12	G3 56 石塁	在地	かわらけ	9.0	2.3	5.0	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
29	13	石塁表土	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	7.5YR 橙 7/6	良	
29	14	G3-57 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.1)	7.5YR 橙 6/6	良	
29	15	G3-24 石塁	在地	かわらけ	-	-	(5.3)	7.5YR 橙 7/6	良	
29	16	G3-57 石塁	在地	かわらけ	-	-	(7.2)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
29	17	G3 57 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	7.5YR 橙 6/6	良	煤付着
29	18	G3-76 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	7.5YR 橙 6/6	良	
29	19	G3-47 石塁	在地	かわらけ	-	-	(5.5)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
29	20	G3 57 石塁	在地	かわらけ	-	-	5.8	7.5YR 橙 7/6	良	
29	21	G3-36 石塁	在地	かわらけ	-	-	6.3	10YR 黒褐 3/1	良	
29	22	G3-35 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
29	23	G3 57 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	7.5YR 橙 7/6	良	
29	24	G3-56 石塁	在地	かわらけ	-	-		10YR 褐灰 6/1	良	焼酸物付着
29	25	G3-34 石塁	在地	かわらけ	-	-	(7.0)	10YR 灰白 7/1	良	焼酸物付着
29	26	G3 66 石塁	在地	かわらけ	(10.0)	2.1	(6.0)	5YR 褐灰 6/1	良	焼成物付着 口縁部片口
29	27	G3-56 石塁	在地	かわらけ	(10.0)	2.3	(5.0)	10YR 褐灰 5/1	良	焼酸物付着
30	28	G3-76 石塁	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	2.5Y 黄灰 5/1	良	焼酸物付着
30	29	石塁表土	在地	かわらけ	(11.4)	-	-	10YR 灰黄褐 5/2	良	焼酸物付着
30	30	石塁表土	在地	かわらけ	(11.0)	1.9	(3.8)	10YR 鈍い黄橙 6/3	良	焼酸物付着
30	31	石塁表土	在地	かわらけ	(9.3)	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/2	良	焼酸物付着
30	32	G3-46 石塁	在地	かわらけ	(11.0)	-	-	10YR 褐灰 6/1	良	焼酸物付着（金付）
30	33	G3-26 石塁	在地	火鉢	(44.0)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
30	34	石塁表七	在地	火鉢	(28.8)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
30	35	G3-45 石塁	在地	火鉢	(34.6)	-	-	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
30	36	G3-55 石塁	在地	擂鉢	(32.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良	櫛目7本
30	37	G3-66 石塁	在地	擂鉢	-	-	(22.0)	7.5YR 橙 6/6	良	
30	38	G3-57 石塁	在地	擂鉢	-	-	(11.0)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
30	39	G3-57 石塁	在地	擂鉢	-	-	-	5YR 橙 6/6	良	
30	40	G3-76 石塁	在地	内耳鍋	-	-	(20.0)	7.5YR 鈍い褐 5/4	良	
30	41	G3-26 石塁	在地	内耳鍋	-	-	-	5YR 橙 6/6	良	
30	42	G3-46 石塁	在地	内耳鍋	-	-	-	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
30	43	G3-66 石塁	在地	内耳鍋	-	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
31	44	G3 26・35 石塁	在地	鞴の羽口	内径(3.2)	外径(9.2)	-	2.5Y 橙 6/8	良	
31	45	G3-35・45 石塁	在地	鞴の羽口	内径(3.0)	外径(8.0)		2.5Y 橙 7/6	良	
31	46	G3-46 石塁	-	壁土	長さ 11.5	幅 8.3	厚さ 4.6	5YR 橙 6/6		
31	47	G3 56 石塁	-	壁土	長さ 6.8	幅 7.7	厚さ 3.0	5YR 橙 6/6		
31	48	G3-46 石塁	-	壁土	長さ 9.0	幅 6.8	厚さ 9.0	5YR 橙 6/6		
31	49	G3-56 石塁	-	壁土	長さ 5.2	幅 5.4	厚さ 2.6	7.5YR 橙 6/6		
31	50	G3 36 石塁	-	壁土	長さ 11.0	幅 8.8	厚さ 4.2	10YR 鈍い黄橙 5/3		
31	51	G3-56 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	(10.9)	2.0	(6.9)	10YR 灰白 8/2	良	底部トチン痕
31	52	G3-35・45・56 石塁	初山	軟釉皿	(9.8)	1.8	(6.0)	10YR 灰黄褐 5/2	良	
31	53	G3 35 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.7)	-	-	10YR 灰白 8/2	良	
31	54	G3-34 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.4)	-	-	2.5Y 灰白 8/2	良	二次被熱
31	55	G3-26 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.0)	2.5Y 鈍い黄 6/3	良	
31	56	G3 57 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.0)	10YR 灰黄褐 5/2	良	二次被熱 内禿
31	57	G3-37 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(5.8)	2.5Y 灰白 8/1	良	
31	58	G3-56 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	5.6	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	底部トチン痕
31	59	G3 35 石塁	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.2)	10YR 浅黄橙 8/3	良	
31	60	石塁表土	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.0)	5Y 灰白 8/1	良	底部トチン痕

出土遺物観察表

単位：cm　（　）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地等	器種等	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
31	61	G3 76 台墨	瀬戸美濃	鉄釉皿	‥	‥	(6.6)	10YR 灰白 8/1	良	底部トタン疹
31	62	G3-37 石皿	瀬戸美濃	灰釉皿	‥	‥	(6.0)	7.5YR 鈍い橙 7/3	良	
32	63	G3-23 石皿	瀬戸美濃	壺	(11.4)	‥	‥	2.5Y 灰黄 7/2	良	
32	64	G3-24 石皿	瀬戸美濃	悟利	‥		(12.0)	2.5Y 鈍い黄橙 6/3	良	
32	6b	G3-57 石皿	瀬戸美濃	壺	‥	‥	(7.0)	2.5Y 浅黄 7/3	良	
32	66	G3 36・65・66 113 27 石皿	瀬戸美濃	悟利		‥	(13.2)	2.5Y 浅黄 7/4	良	内外一部釉
32	67	G3 46 石皿	瀬戸美濃	壺			‥	10YR 灰白 7/1	良	
32	68	G3-67 石皿	信楽	灯明皿	(10.7)	2.3	(3.5)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
32	69	台墨表 H	美濃	尾呂茶碗	‥	‥	(5.8)	10YR 灰白 7/1	良	
32	70	G3-66 石皿	美濃	尾呂茶碗	(12.0)		‥	2.5Y 黄灰 7/2	良	
32	71	G3-37 石皿	瀬戸	片口鉢	(10.8)	‥	‥	10YR 浅黄橙 8/4	良	
32	72	G3 35 台墨	瀬戸美濃	播鉢	(28.0)	‥	‥	2.5YR 浅黄 8/4	良	
32	73	G3-46 石皿	瀬戸美濃	播鉢	(33.2)			10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
32	74	G3-57 石皿	瀬戸美濃	播鉢	‥	‥	‥	10YR 浅黄橙 8/3	良	
32	75	G3 45 石皿	瀬戸美濃	播鉢		‥	‥	10YR 浅黄橙 8/4	良	
32	76	G3-66 石皿	瀬戸美濃	播鉢	‥	‥	‥	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
32	77	G3-66 台墨	瀬戸美濃	播鉢	‥	‥	‥	10YR 灰白 8/2	良	
32	78	G3-57 石皿	瀬戸美濃	播鉢		‥	‥	10YR 鈍い黄橙	良	
32	79	G3-66 石皿	瀬戸美濃	瓶子	‥	‥	‥	2.5Y 浅黄 7/3	良	古瀬戸
32	80	G3 46 台墨	常滑	壺	(19.0)	‥	‥	2.5Y 黄灰 6/1	良	
32	81	G3-67 石皿	不明	壺	‥			5YR 灰褐 5/2	良	備前か
33	82	G3-24・25 石皿	常滑	壺	(14.0)	‥	‥	10YR 灰白 7/1	良	
33	83	G3 24・36 台墨	常滑	壺	(14.0)	‥	‥	2.5Y 黄灰 6/1	良	
33	84	G3-37・66 石皿	常滑	壺	‥	‥		2.5Y 黄灰 4/1	良	
33	85	G3-36 石皿	常滑	壺	‥	‥	(12.2)	2.5Y 灰黄 6/2	良	
33	86	G3 36 石皿	常滑	焼		‥	(16.0)	10YR 鈍い黄橙 6/3	良	
33	87	G3-36 石皿	常滑	壺	‥	‥	(11.0)	2.5Y 灰黄 6/2	良	
33	88	G3-24 台墨	常滑	甕	‥	‥	(19.0)	10YR 灰 5/1	良	
33	89	G3 56 石皿	常滑	焼		‥	‥	10YR 鈍い黄橙 5/3	良	鼠印有り
33	90	G3-57・67 石皿	常滑	壺	‥	‥	(18.5)	10YR 鈍い黄橙	良	漆継ぎ
33	91	G3-45・67 台墨	常滑	甕	‥	‥	‥	2.5YR 黄褐 5/3	良	
33	92	G3 45・55・57 石墨	常滑	焼			‥	7.5YR 鈍い橙 5/4	良	
34	93	G3-66 石皿	常滑	壺	(45.4)	‥	‥	10YR 灰黄褐 6/2	良	
34	94	G3-57 台墨	常滑	甕	‥	‥	‥	2.5YR 橙 6/6	良	
34	95	G3 46 石皿	常滑	焼			‥	7.5YR 橙 6/6	良	
34	96	G3-47 石皿	常滑	壺	‥	‥	‥	7.5YR 鈍い橙 5/3	良	
34	97	G3-47 台墨	常滑	甕	‥	‥	‥	2.5YR 灰黄 6/2	良	
34	98	G3 36 石皿	常滑	焼	(58.0)		‥	10YR 鈍い黄橙 5/4	良	
34	99	G3-24・26・46・47 石皿	常滑	壺	(55.0)	‥	‥	2.5Y 黄灰 6/1	良	
34	100	G3-35 台墨	常滑	甕		‥	‥	10YR 鈍い黄橙 6/3	良	
34	101	G3 35 石皿	常滑	焼			(21.0)	5YR 橙 6/6	良	漆継ぎ
34	102	G3-25・26・36 石皿	常滑	壺		‥	(16.5)	5YR 橙 6/6	良	
35	103	G3-57 台墨	在地	茶臼	推定 18.7	12.6	23.8	5YR 橙 6/6	良	
35	104	G3 57 石墨	在地	茶臼	推定(19.6)	10.9	‥			
35	105	G3 66 石墨	在地	茶臼	推定 29.5	11.3	31.6			底部(38.0)
35	106	G3-57 台墨	在地	石臼	直径(27.0)	14.0	‥			
35	107	G3 47 石墨	在地	石臼	直径(30.5)	‥	‥			
35	108	G3-35 石皿	在地	石臼	直径(34.0)	‥				
35	109	G3-57 台墨	在地	石臼	直径(28.5)	11.6				軸棒孔直径(2.5)
35	110	G3 36・51 石墨	在地	台臼	直径 31.8	10.5	‥			
36	111	G3-24 石皿	在地	石臼	直径(30.6)	16.9				
36	112	G3-26 台墨	在地	石臼	直径(31.0)	11.3	‥			
36	113	G3 57 石墨	在地	台臼	直径(29.7)	13.3	‥			
36	114	G3-66 石皿	在地	石鉢	(30.4)	13.5	(22.0)			
36	115	G3-46 台墨	在地	砥石	長さ 10.7	5.7	幅 5.5			
36	116	G3 35 石墨	在地	叩石	幅 10.8	6.8	‥			
36	117	G3-46 石皿	在地	凹石	長さ 18.0	10.0	幅 18.0			
36	118	G3-56 台墨	在地	凹石	長さ 21.0	17.4	幅 16.5			
36	119	G3 35 石墨	在地	九輪塔	幅 17.8	10.5	‥			
36	120	G3-47 石皿	在地	五輪塔	幅 16.0	12.7				

出土遺物観察表

単位：cm　（　）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地等	器種等	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
37	121	G3-47 石塁	中国青磁	皿	(12.3)	3.1	(7.0)	7.5Y 灰白 8/1	良	(武63次大手1トレ1号石塁(Ⅸ図23-7)同一)
37	122	G3-36・46石塁	中国青磁	碗	-	-	-	N 灰白 8/	良	
37	123	G3-47 石塁	中国青白磁	梅瓶	-	-	-	N 灰白 9/	良	
37	124	G3-46 石塁	中国青磁	花瓶	-	-	-	N 灰白 8/	良	
37	125	G3-26 石塁	中国青磁	碁笥底皿	(3.0)	-	-	2.5Y 灰黄 7/2	良	
37	126	G3-77 石塁	中国青花	皿	(13.0)	-	-		良	
37	127	G3-45 石塁	中国青花	碗	(13.8)	-	-	10Y 灰白 8/1	良	
37	128	G3-57 石塁	中国青花	皿	(10.9)	-	-	N 灰白 8/	良	
37	129	G3-35 石塁	中国青花	皿	(11.8)	-	-	5Y 灰白 8/1	良	
37	130	G3-35 石塁	肥前染付	碗	(9.0)	2.1	(5.2)	N 灰白 8/	良	
37	131	G3-66 石塁	瀬戸染付	碗	(12.0)	-	-		良	
37	132	G3-76 石塁	瀬戸染付	碗	(1.0)	(5.1)	(3.8)		良	
37	1	G3-54,55 1号堀跡	在地	かわらけ	(9.0)	1.7	(6.0)	5YR 明赤褐 5/6	良	
37	1	G3-35 2号堀跡	在地	かわらけ	(12.7)	-	-	7.5YR 6/4 鈍い橙	良	
37	2	G3-55 2号堀跡	在地	石製品	長さ 39.0	幅 21.3	高さ 16.0		良	
37	1	F3-93 1号石列	在地	茶臼	-	15.0	(27.7)			
38	1	Tr1 土塁	在地	かわらけ	(11.6)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
38	2	Tr1 土塁	在地	かわらけ	(15.6)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
38	3	Tr1 土塁	在地	かわらけ	(15.8)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
38	4	Tr1 土塁	在地	かわらけ	(11.8)	2.9	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
38	5	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	5.4	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
38	6	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
38	7	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	(7.9)	7.5YR 橙 7/6	良	
38	8	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	(7.0)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
38	9	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	10YR 浅黄橙 8/3	良	
38	10	Tr1 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.4)	10YR 灰白 8/2	良	
38	11	G2-49 Tr1 土塁	在地	かわらけ	(11.0)	-	-	10YR 褐灰 6/1	良	熔融物付着
38	12	G2-49 Tr1 土塁	在地	かわらけ	(11.0)	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着
38	13	Tr1 土塁	在地	擂鉢	(26.5)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
38	14	G2-49 Tr1 土塁	瀬戸美濃	灰釉皿	(9.9)	-	-	2.5Y 灰白 8/1	良	
38	15	G2-49 Tr1 土塁	中国	翡翠釉鉄花皿	(6.5)	-	-	N 灰白 8/	良	
38	16	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(9.8)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	手づくね
38	17	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(10.7)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
38	18	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(10.3)	-	-	10YR 灰白 8/2	良	
38	19	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(12.0)	-	-	7.5YR 橙 7/6	良	
38	20	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(13.9)	-	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
38	21	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(12.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
38	22	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(12.6)	-	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
38	23	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(8.4)	-	-	2.5Y 黄褐 5/3	良	
38	24	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(14.6)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
38	25	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(8.8)	1.9	(5.3)	7.5YR 橙 6/6	良	
38	26	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(10.6)	2.6	(5.0)	7.5YR 橙 6/6	良	
38	27	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(9.8)	2.1	(5.1)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
38	28	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(12.0)	2.2	(6.8)	5YR 橙 6/6	良	
38	29	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(11.6)	2.3	(6.0)	7.5YR 橙 6/6	良	
38	30	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	(12.2)	3.2	6.3	10YR 明黄褐 7/4	良	
38	31	G2-87・88・98 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.6)	10YR 黄橙 8/6	良	
39	32	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(5.5)	7.5YR 橙 7/6	良	
39	33	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(4.4)	5YR 橙 6/6	良	
39	34	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	7.5YR 橙 7/6	良	
39	35	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(5.6)	5YR 橙 6/6	良	
39	36	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	2.7	7.5YR 橙 7/6	良	
39	37	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	7.5YR 鈍い橙 6/4		
39	38	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	5.2	7.5YR 橙 6/6		
39	39	G2-87 Tr4 土塁	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	10YR 浅黄橙 8/3	良	
39	40	G2-87 Tr4 土塁	在地	火鉢	(28.6)	-	-	7.5YR 橙 7/6	良	
39	41	G2-87 Tr4 土塁	常滑	甕	-	-	-	10YR 灰黄褐 5/2	良	
39	42	G2-87 Tr4 土塁	中国白磁	端反皿	(11.4)	-	-	N 灰白 8/	良	
39	43	G2-87 Tr4 土塁	中国白磁	端反皿	-	-	(5.4)	2.5Y 灰白 8/1	良	
39	44	G2-87 Tr4 土塁	中国白磁	端反皿	-	-	(10.0)	N 灰白 8/	良	

出土遺物観察表

単位：cm　（　）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地等	器種等	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
39	45	G2-87 Tr4 土塁	中国青花	碗	(11.0)			N 灰白 8/	良	
39	46	G3-12 Tr8 土塁	在地	かわらけ	(10.5)	1.9	(6.9)	10YR 黒褐 3/1	良	内面黒変、煤付着
39	47	G3-12 Tr8 土塁	在地	かわらけ	(10.5)	1.8	(5.9)	7.5YR 橙 6/6	良	口縁部煤付着
39	48	Tr8 土塁	在地	かわらけ	(10.9)	2.2	(6.0)	2.5YR 橙 6/6	良	
39	49	Tr8 土塁	在地	かわらけ	(12.2)	2.8	(7.3)	5YR 橙 6/6	良	
39	50	G3-21 Tr8 土塁	在地	かわらけ	(11.2)	-		5YR 橙 6/6	良	内面煤付着
39	51	G3-12 Tr8 土塁	在地	かわらけ	(9.0)	-	-	10YR 浅黄橙 8/4	良	
39	52	G3-44 土塁	在地	かわらけ			4.5	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
39	53	G2-47 Tr16 土塁	古瀬戸	灰釉皿	(11.4)	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/2	良	
39	54	惣堀北土橋南	在地	かわらけ	(12.0)	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
39	55	G3-21 土塁	瀬戸美濃	擂鉢	(26.0)			5Y 灰白 8/1	良	
40	1	H2-6 No.2 階段	在地	かわらけ	(9.2)	1.8	(5.4)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
40	2	G2-97 階段	在地	かわらけ			(7.0)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
40	3	Tr5 階段	在地	かわらけ	-	-	(7.5)	5YR 橙 6/6	良	
40	4	G2-96 階段	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
40	5	G2-97 階段	在地	石鉢	(30.0)				良	
40	6	G2-97 階段	中国青磁	酒海壺	-	-	-	N 灰白 8/	良	
40	1	H2-67 土橋	在地	かわらけ	(11.4)	2.5	(7.2)	5YR 橙 6/6	良	
40	2	H2-67 土橋	在地	かわらけ	-	-	(12.9)	7.5YR 明褐 5/6	良	内面黒変
40	3	H2-76・77 土橋	在地	かわらけ	-	-	(8.4)	7.5YR 橙 7/6	良	
40	4	H2-67 土橋	在地	擂鉢	32.8		-	5YR 橙 6/6	良	
40	5	H2-67 土橋	瀬戸美濃	鉄釉皿	-	-	(5.1)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	漆継ぎ
40	1	G3-76 3号溝跡	中国青磁	大皿	(23.3)	-	-	N 灰白 8/	良	
40	1	H3-11 6号溝跡	在地	かわらけ	(13.0)	2.8	(7.6)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
40	1	G3-41 1号井戸跡	在地	かわらけ	(12.0)	-	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
40	2	G3-41 1号井戸跡	中国青花	皿	-	-	(7.0)	N 灰白 8/	良	
40	3	G3-41 1号井戸跡	中国青花	皿	(15.3)			N 灰白 8/	良	
40	1	G3-43 建物基壇跡	中国青花	水滴？	-	-	-	N 灰白 8/	良	孔径約0.7cm
40	2	G3-50 建物基壇跡	中国青花	碗	-	-	(4.8)	N 灰白 8/	良	
40	3	G3-41 建物基壇跡	中国青磁	花瓶				N 灰白 8/	良	
41	1	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(10.0)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	2	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(10.2)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	3	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(11.0)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	4	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(9.3)	-	(5.6)	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
41	5	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(13.0)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	6	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(10.8)	-		7.5YR 橙 7/6	良	
41	7	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(14.9)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
41	8	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(14.0)		-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	9	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(13.8)	-		7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	10	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(14.0)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
41	11	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(11.8)		-	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
41	12	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(12.0)		-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	13	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	4.5	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	14	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ			(5.6)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	15	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(9.8)	2.0	(6.0)	5YR 橙 7/6	良	内面に工具痕
41	16	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	17	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ			4.1	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	18	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(6.4)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	19	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	7.6	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	20	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ			(4.6)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	21	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ			(7.3)	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
41	22	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	23	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(13.4)	2.7	(5.0)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	24	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	7.1	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
41	25	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(7.3)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	26	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ			(7.0)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	27	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(6.6)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	28	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	(7.6)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	29	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(14.0)	4.0	(6.8)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
41	30	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(14.8)	3.7	(7.8)	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	

出土遺物観察表

単位：cm　（ ）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地	器種等	法量 口径	法量 器高	法量 底径	色調	焼成	備考
41	31	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	(16.0)	3.0	(7.3)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	32	G3-51 1号土坑	在地	火鉢	-	-	(12.50)	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
41	33	G3-51 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	3.0	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	耳皿
42	1	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(9.8)	2.1	(5.8)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	2	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(9.7)	2.1	(5.8)	7.5YR 橙 7/6	良	
42	3	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(9.5)	〃	-	10YR 浅黄橙 8/4	良	
42	4	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	-	〃	4.2	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
42	5	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(13.8)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
42	6	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(15.8)	-	-	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
42	7	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(13.2)	3.0	(7.2)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
42	8	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(14.8)	3.6	(7.0)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	9	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	(14.6)	3.0	(7.6)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
42	10	G3-74 2号土坑	在地	かわらけ	-	-	(6.8)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	1	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	(11.7)	-	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	2	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	(13.3)	-	-	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	3	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	-	-	(5.7)	7.5YR 浅黄橙 8/6	良	
42	4	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	-	-	(8.0)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	5	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	-	-	(8.6)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
42	6	G3-61 3号土坑	在地	かわらけ	-	-	(8.4)	7.5YR 浅黄橙 8/4	良	
42	1	G3-75	在地	かわらけ	(8.2)	1.8	(4.6)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
42	2	G3-36	在地	かわらけ	-	-	(2.4)	7.5YR 橙 6/6	良	
42	3	G3-83・92	在地	かわらけ	-	-	5.2	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
42	4	G3-15	在地	かわらけ	(12.5)	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/3	良	
42	5	CG-69 Tr2	在地	かわらけ	(9.4)	2.1	(6.4)	2.5Y 黄灰 6/1	良	内面煤酸物付着
42	6	G3-74 Tr6	在地	かわらけ	(8.6)	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良	内面煤酸物付着
42	7	G3-75 Tr6	瀬戸美濃	擂鉢	-	-	-	10YR 灰白 8/2	良	-
42	8	G3-74 Tr6	瀬戸美濃	擂鉢	(27.0)	-	-	10YR 灰白 N/1	良	
43	9	H2-47 Tr10	在地	かわらけ	(7.3)	1.6	(5.1)	10YR 灰黄褐 5/2		
43	10	Tr10	在地	かわらけ	(7.8)	1.6	(4.4)	5YR 橙 6/6	良	
43	11	H2-58 Tr13	在地	かわらけ	(8.0)	1.9	(4.6)	5YR 橙 6/6	良	
43	12	H2-58 Tr13	在地	かわらけ	6.9	1.9	3.7	5YR 橙 6/6	良	
43	13	H2-69 Tr9	在地	かわらけ	(10.0)	-	-	7.5YR 鈍い橙 6/3	良	
43	14	H2-70 Tr9	在地	かわらけ	(12.2)	-	-	5YR 明赤褐 5/6	良	
43	15	H2-78	在地	かわらけ	(12.6)	2.1	(7.0)	10YR 黒褐 3/1	良	黒変している
43	16	Tr9	在地	かわらけ	(11.7)	-	-	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
43	17	H2-69 Tr9	在地	かわらけ	(12.4)	-	-	7.5YR 橙 7/6	良	
43	18	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	(5.8)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
43	19	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	(9.8)	1.9	(5.2)	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
43	20	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	7.0	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
43	21	H2-49 上幡北	在地	かわらけ	-	-	(7.0)	7.5YR 橙 7/6	良	
43	22	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	(5.8)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
43	23	H2-78 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	(7.4)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
43	24	H3-27 Tr15	在地	かわらけ	-	-	(8.2)	7.5YR 橙 7/6	良	
43	25	H2-57 Tr12	在地	かわらけ	(12.2)	2.8	(6.8)	10YR 鈍い黄褐 5/3	良	
43	26	H3-43 Tr3	在地	かわらけ	-	-	(5.4)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
43	27	H2-58 Tr12	在地	かわらけ	-	-	(11.8)	5YR 橙 6/6	良	
43	28	H2-70	在地	かわらけ	-	-	(7.0)	5YR 橙 6/6	良	
43	29	H2-58 Tr13	在地	かわらけ	-	-	(12.4)	7.5YR 橙 7/6	良	
43	30	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	(0.6)	-	-	2.5Y 灰黄 6/1	良	煤酸物付着
43	31	H2-78 上幡西南	在地	かわらけ	(8.2)	2.0	-	5Y 灰 6/1	良	煤酸物付着
43	32	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	(5.70)	2.5Y 黄灰 6/1	良	煤酸物付着
43	33	H2-69 上幡西南	在地	かわらけ	-	-	(3.9)	2.5Y 黄灰 6/1	良	煤酸物付着 (金付)
43	34	Tr9西側一括	在地	かわらけ	-	-	(5.0)	10YR 灰白 7/1	良	
44	35	H3-43 Tr3	在地	擂鉢	(32.0)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
44	36	H3-26 Tr15	在地	擂鉢	-	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
44	37	H3-32 Tr3	在地	擂鉢	(31.4)	-	-	5YR 橙 6/6	良	
44	38	H2-27 Tr11	-	壁土	長さ 5.5	幅 6.3	厚さ 4.3	5YR 橙 6/6	良	
44	39	H2-27 Tr11	-	壁土	長さ 8.0	幅 6.5	厚さ 3.3	5YR 橙 6/6	良	
44	40	H2-27 Tr11	-	壁土	長さ 5.7	幅 4.5	厚さ 3.2	5YR 橙 6/6	良	
44	41	H3-27 Tr15	瀬戸美濃	灰釉皿	(17.4)	3.7	(9.2)	7.5Y 灰白 8/1	良	

出土遺物観察表

単位：cm　（ ）は反転実測による復元値

図版番号	番号	出土位置・遺構	生産地等	器種等	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
44	42	Tr10	瀬戸美濃	播鉢	-	-	-	5YR 橙 6/6	良	
44	43	H2-26 Tr11	瀬戸美濃	灯明受皿	(9.4)	2.2	(4.0)	10YR 鈍い橙 7/3	良	
44	44	H3-26 Tr15	瀬戸美濃	香炉	-	-	-	10YR 鈍い黄橙 7/2	良	
44	45	Tr10	中国白磁	端反皿	(12.8)	-	-	N 灰白 8/	良	
44	46	H2-69 Tr9	高麗青磁	碗	-	-	-	2.5Y 灰白 7/1	良	
44	47	H2-58 Tr12	縄文土器	深鉢	-	-	-	7.5YR 橙 6/6	良	
44	48	Tr10	縄文土器	深鉢	-	-	-	7.5YR 褐 4/6	良	
44	49	H2-47 Tr10	縄文中期	深鉢	-	-	-	10YR 鈍い黄褐 5/4	良	
44	50	H2-68・78 Tr9	縄文中期	深鉢	-	-	-	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
44	51	H2-79 Tr9	縄文中期	深鉢	-	-	-	7.5YR 明褐 5/6	良	
44	52	Tr10	縄文土器	深鉢	-	-	-	7.5YR 明褐 5/6	良	
44	53	H2-74	縄文土器	深鉢	-	-	-	5YR 明赤褐 5/6	良	
44	54	H3-26 Tr15 撹乱	須恵器	甕	-	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良	
44	55	H3-27 Tr15	須恵器	甕	-	-	-	10YR 灰白 7/1	良	

					法量 長さ	厚さ	重さ (g)			
45	1	G3-57 右畠		釘	2.44	0.55	1.0			
45	2	G3-36 右畠		釘	3.98	0.77	3.7			
45	3	G3-36 右畠		釘	4.43	0.47	1.1			
45	4	G3-26 右畠		釘	4.8	0.58	2.2			
45	5	G3-57 右畠		釘	5.92	0.85	3.0			
45	6	G3-57 右畠		釘	6.4	0.6	3.3			
45	7	G3-57 右畠		釘	5.06	1.17	6.4			
45	8	G3-57 右畠		釘	5.09	1.46	6.1			
45	9	G3-57 右畠		釘	5.25	0.96	2.6			
45	10	G3-36 右畠		釘	6.03	1.29	6.9			
45	11	G3-57 右畠		釘	4.22	1.45	4.6			
45	12	G3-36 右畠		釘	2.5	0.75	5.2			
45	13	G3-36 右畠		釘	5.62	0.77	7.6			
45	14	G3-36 右畠		不明	2.7	2.39	9.3			
45	15	G3-55 右畠		切羽	3.99	2.33	2.3			
45	16	G3-57 右畠		止金	4.38	0.4	8.1			
45	17	G3-36 右畠		不明	7.22	1.42	7.7			
45	18	G3-36 右畠		不明	6.95	1.82	7.2			
45	19	Tr8		こはぜ	2.24	0.85	2.1			
45	20	H2-68		釘	6.75	1.32	12.2			
45	21	G3-36		古銭	2.2	0.61	0.1			寛永通寶
45	22	G3-36		古銭	2.48	0.68	3.4			寛永通寶
45	23	G3-67 右畠		古銭	2.29	0.63	2.3			寛永通寶
45	24	G3-77 右畠		古銭	2.52	0.58	2.8			表・寛永通寶 裏・文
45	25	右畠一括		古銭	2.31	0.68	2.9			寛永通寶
45	26	H2-58		古銭	2.42	0.64	1.6			
45	27	G3-47 右畠		古銭	2.38	0.67	3.0			
45	28	H2-66 土橋北東		古銭	2.46	0.56	2.3			
45	29	G2-68		古銭	2.53	0.58	3.2			表・寛永通寶 裏・文

第４章　自然科学分析

第１節　武田氏館跡大手１号堀跡・２号堀跡（三日月堀）堆積物の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

武田氏館跡大手周辺の発掘調査で２条の堀跡が検出されている。堀は館正面を守る目的で造られたと考えられており、１号堀の埋積土は水成堆積をしていることが予想され、花粉化石が残されている可能性が推測された。また武田氏の築城技術の特徴と言われる２号堀（三日月堀）が武田氏館で初めて確認されており、この堀は武田氏が滅亡する1582年頃まで存在していたと考えられている。その後の整地によって埋められ、上部は破壊された可能性が考えられている。こうしたことからこの堀堆積物について花粉分析をすることにより武田氏が館を構えていた時期の周辺植生を検証できる可能性が推察された。以下にこの２号堀堆積物とその後に造られた１号堀の堆積物について行った花粉分析の結果を示し、武田期およびその後における植生変遷について検討を試みた。

なお同試料を用いてプラント・オパール分析も行われ、遺跡周辺のイネ科植生についての検討がなされている。

２．試料

花粉分析は１号堀北側断面とG３－55グリッドの２箇所で行っているが、そのうちG３－55グリッドでは二つの堀が重複していた。

１号堀北側断面からは８試料（試料番号１～８）が採取された（図１）。各試料について、試料１（６層）は黒褐色の砂質粘土で、レキが散在している。試料２（７層）も黒褐色砂質粘土で、炭片が認められ、小レキが散在している。その下位の８層や13層は砂レキで、その基質は黒褐色の砂質粘土である。また12層は黒褐色の砂質粘土で、小レキが多量に認められる。試料３（14層）も黒褐色の砂質粘土で、砂が多く認められる。試料４は黒褐色砂質粘土で、小レキが多く混入している。試料５（16層）は黒褐色砂質粘土で、砂が多く、中型のレキが点在している。試料６（17層）は黒褐色の砂質粘土で、中型のレキが点在～散在している。試料７，８（18層）も黒褐色の砂質粘土で、下部ほど砂が多くなり、レキが点在している。時期については、８，９層より上位が豊臣氏、あるいは徳川氏の時期の整地層と考えられている。

G３－55グリッドより採取した試料は、２号堀部の７試料（試料番号１～７）と１号堀部の４試料（８～11）および調査区南壁セクション最下層１試料（18）の計12試料である（図２）。各試料について、２号堀部試料１（４・５・７層）は黒褐色の砂質粘土で、レキ（70～80㎜）が点在しており、下部に炭片が多く認められる。試料２（６層）も黒褐色砂質粘土で、粘性が高く、20～30㎜のレキが点在している。試料３（８層）も黒褐色の砂質粘土で、巨レキ（200～300㎜が多く、最大径420㎜）が多く、炭片も認められる。試料４（13層）はやや灰色を帯びた黒褐色砂質粘土で、赤色酸化鉄の集積が小塊状に散在している。試料５（14層）は黒褐色砂質粘土で、本層全体に赤色酸化鉄が塊状に集積しており、レキ（60㎜）も認められる。試料６（16層）は黒褐色の砂質粘土、試料７（17層）は黒灰色の砂質粘土で、炭片が点在している。２号堀（試料１～４）の時期については、下限は館が築かれた1519年、上限は武田氏が滅亡した1582年と推測される。

１号堀部試料８（５層）は黒褐色の砂質粘土、試料９（５層）は黒褐色の粘土混じり砂レキで、径50㎜前後のレキが点在している。試料10（９層）も黒褐色の粘土混じり砂レキで、40～50㎜のレキも認められる。試料11（10層）は黒褐色の砂質粘土で、小レキが多く認められる。また調査区南壁

最下層の試料18（26層）は黒褐色の砂質粘土～粘土質砂である。時期としては武田氏滅亡後の16世紀末を中心とした時期と考えられている。

3．分析方法

上記した20試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～7g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

4．分析結果

（1）1号堀北側断面（図3：試料1～8）

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉21、草本花粉17、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計41である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、それらの分布を図3に示した。なお分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、ユキノシタ科近似種の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本を作製し、各々にPLC. SS番号を付して形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、全体に花粉の検出数が少なく、3層準（試料1，4，6）において分布図として示すことができなかった。また分布図として示した層準についても無理やり書いている部分（試料2，3，5）もあり、参考程度に見て頂きたい。そのなか、最下部試料で樹木花粉の占める割合が非常に高く、60%を越えているが、上部に向かい急激にその割合を下げている。この樹木花粉ではスギが最も多く、最下部試料8で出現率約30%を示すが、試料7では約5%と激減している。同じ針葉樹のイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）も試料8では約17%を示すが、試料7では3%に急減している。針葉樹では他にツガ属やマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）などが観察されているが、出現率が5%を越える分類群は無く、大きな変動は見られない。落葉広葉樹ではコナラ属コナラ亜属が最も多く、スギとは反対に試料7でやや出現率を上げている。またニレ属－ケヤキ属はヒノキ類と同様の産出傾向を示し、上位試料ではほとんど得られていない。クマシデ属－アサダ属はやっと1%を越えた程度であるが上位試料においても観察されている。その他ではヤナギ属、クルミ属、カエデ属が下部2試料のみより得られている。

草本類ではイネ科が最も多く、試料5でピークを作るように急増・漸減している。次いでタンポポ亜科が多く、出現率は10%前後を示し、試料2では20%弱とやや高い出現率を示している。カヤツリグサ科やアカザ科－ヒユ科も5～10%を示し、アカザ科－ヒユ科は試料3で40%を越えている。その他、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、他のキク亜科（ヨモギ属を除くキク亜科）が低率ではあるが多くの試料で観察されている。また、シダ植物では単条型がほぼ全試料で5%前後得られており、ゼンマイ科は中・下部試料で連続して検出されている。

（2）G3－55グリッド断面

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉27、草本花粉20、形態分類を含むシダ植物胞子5の総計52である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表2に、それらの分布を図4（2号堀）、図5（1号堀）に示した。なお分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一

拓して入れてある。

1）2号堀部（図4：試料1～7）

上位4層準（試料1～4）において花粉の検出数が少なく分布図として示すことができなかった。その分布図で示した下部3試料において樹木花粉の占める割合が上部に向かい高くなっており、試料5では約34%を示している。そのなかではニヨウマツ類とコナラ亜属が上部に向かい同じような割合で増加している。また試料5ではこれら2分類群に続きスギが5%強を示し、やや目立って検出されている。その他ではツガ属が全試料、クマシデ属－アサダ属は2試料で1%を越えている。草本類ではイネ科が最も多く、試料5では約34%を示している。アカザ科－ヒユ科は最下部試料7で約44%を示して最も多く得られているが、上部に向かい急激に出現率を下げている。その他ではタンポポ亜科が10%前後、カヤツリグサ科とヨモギ属が5～10%得られている。またソバ属が試料3と6で観察され、この試料3ではベニバナ属も得られている。シダ植物では単条型が最も多く、試料6では約13%を示している。

2）1号堀部（図5：試料8～11, 18）

検鏡の結果、樹木花粉ではスギが最も多く、最下部試料11を除き20%前後の出現率を示している。ニヨウマツ類が10%強を示して次いで多く、10%弱のコナラ亜属が続いている。その他ではニレ属－ケヤキ属が最下部を除き1%以上を示しており、ツガ属は低率ながら全試料で観察されている。また試料18ではニヨウマツ類が20%弱を示し最も多く、コナラ亜属とスギが10%前後得られている。草本類ではイネ科が最も多く、最下部試料を除き40～50%の出現率を示している。その最下部試料11においてアカザ科－ヒユ科が約74%と非常に高い出現率を示している。その他ではタンポポ亜科が多くの試料で1%以上を示しており、アブラナ科も低率ながら全試料で観察されている。

5．武田氏館跡周辺の古植生

（1）2号堀期（試料4～7）

16世紀中頃を中心とした時期と考えられ、下限は館が築かれた1519年、上限は武田氏が滅亡した1582年と推測される。この時期の樹木類について、樹木花粉の占める割合が上部に向かい増加していることから、館周辺では樹木類が増える傾向にあったと推測される。ここで館が構築される以前の植生について二本柳遺跡（旧中巨摩郡若草町）の花粉分析結果をみると、古墳時代から戦国時代にかけて大きな変化はみられず、モミ属・ツガ属・スギ属などの針葉樹や落葉広葉樹から構成される植生が成立していたことが推測されている（パリノサーヴェイ株式会社, 2000）。こうしたことから武田氏館跡周辺においても館が構築される以前は針葉樹や落葉広葉樹からなる植生が成立していたとみられるが、館構築にあたり少なくとも館周辺の樹木は切り払われ、樹木類の少ない植生になったことが推察される。そうした植生から館構築後は樹木花粉の占める割合が高くなっていることから、樹木類が増える傾向にあったことが推測される。その樹種としてはニヨウマツ類やスギ、コナラ亜属であることから、ニヨウマツ類（アカマツ？）の二次林の成立・拡大とともに、ツガ属やスギなどの針葉樹やコナラ亜属を主体にクマシデ属－アサダ属などを含む落葉広葉樹といった、館構築以前にみられた植生も回復傾向を示すようになったとみられる。

堀周辺についてみると最下部試料においてアカザ科－ヒユ科が多産しており、初期の時期アカザ科－ヒユ科が多く生育していたとみられる。このアカザ科－ヒユ科の他、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類が2号堀周辺に生育していたとみられる。また試料6よりソバ属が検出されており、プラント・オパール分析から推測される稲作とともに館周辺においてソバも栽培されていた可能性が推測される。

（2）1号堀期（試料8～11, 18）

時期については武田氏が滅んだ後の16世紀末を中心とした時期と考えられている。先にも記したがスギが多く検出されており、館周辺ではスギ林が成立し、分布域を広げたとみられる。またニヨウ

マツ類も多く、ニヨウマツ類（アカマツ？）の二次林も拡大したと推測される。さらにコナラ亜属を主体にニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、カエデ属などを交えた落葉広葉樹林も依然として一部に成立していたと推測される。その後急速にこの針葉樹林は縮小したとみられ、二次林を形成するコナラ亜属も一時増加する傾向が試料７でみられるものの上位試料ではふたたび出現率を下げており、これら館周辺の森林は貧弱なものとなったと推測される。

草本類についてみると、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類が生育していたとみられ、堀や土塁を中心に急速に生育地を拡大したものと推測される。その中で最も多く観察されているイネ科についてプラント・オパール分析結果をみると、ネザサ節型が最も多く、その他ヨシ属やシバ属、キビ族、ウシクサ族などが得られており、イネも多く観察されている。これらのうちネザサ節型のササ類（アズマネザサなど）やウシクサ族（ススキなど）は主に館周辺の生育が推測され、堀内についてはヨシ属（ヨシなど）が考えられ、その土手部や周辺土塁にシバ属（ノシバなど）やキビ族（エノコログサなど）が分布していたとみられる。その他この土手部や土塁にはカヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科をはじめとしてナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属他のキク亜科。シダ植物などの雑草類が生育していたと推測される。このように館跡では土手部を中心に草本雑草群落が広く形成されていたと思われる。

Ｇ３－55グリッド断面の最下部試料11においてアカザ科－ヒユ科が多産しており、樹木類も上位３試料とまったく異なった産出傾向を示している。この試料11ではプラント・オパール分析においてイネが多産している。このイネのプラント・オパールは葉の機動細胞に形成される珪酸体に由来するものであることから、稲藁といったものが堀内に廃棄された結果イネのプラント・オパールが多量に検出されたことが考えられている（プラント・オパールの節参照）。このように最下層は上位層とは異なった環境の下に堆積したことが考えられる。すなわち１号堀が造られる際に雑草として繁茂していたアカザ科－ヒユ科が刈り取られ、稲藁などとともに堀内に捨てられた可能性が推察され、それによってアカザ科－ヒユ科の化粉が大量に供給されたことが考えられよう。

またＧ３－55グリッド断面の試料３（１号堀）よりベニバナ属が検出されており、染料や薬として使われていた可能性が推察される。さらに１号堀北側断面の試料７より図表類にはのしていないが若干の寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵）が検出されており、この時期寄生虫に悩まされていたのではないかと思われる。

豊臣氏、あるいは徳川氏の時期の整地層と考えられている１号堀北側断面８層の上位試料２（７層）においても下位試料と大きな違いは認められない。またこれはプラント・オパール分析についても同様であることから、整地層前後における館周辺の植生に大きな変化は無かったと推測される。

引用文献

パリノサーヴェイ株式会社（2000）二本柳遺跡の古環境と木製品の樹種。
山梨県埋蔵文化財センター
調査報告書第183集　二本柳遺跡，234-256，山梨県教育委員会・建設省甲府工事事業所・日本道路公団東京建設局。

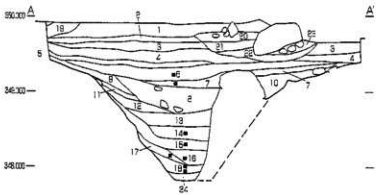


図1　1号堀北側土層断面と試料採取層準

図2　G3-55グリッド土層断面と試料採取層準

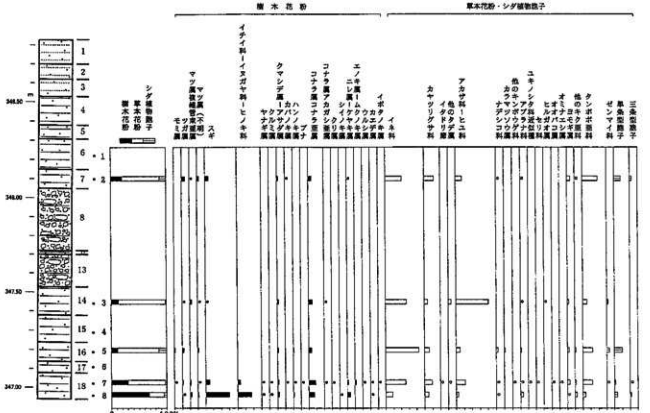


図3　1号堀北側堆積物の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

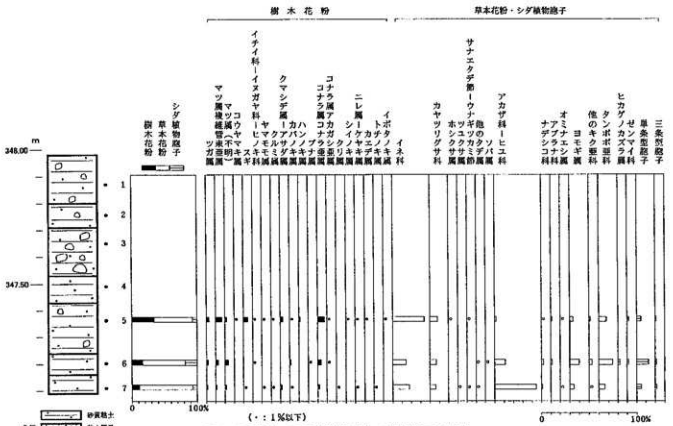


図4　2号堀(三日月堀)堆積物の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

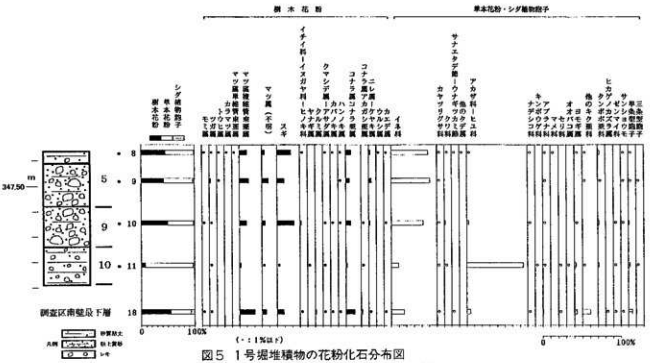


図5　1号堀堆積物の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

表1　産出花粉化石一覧表

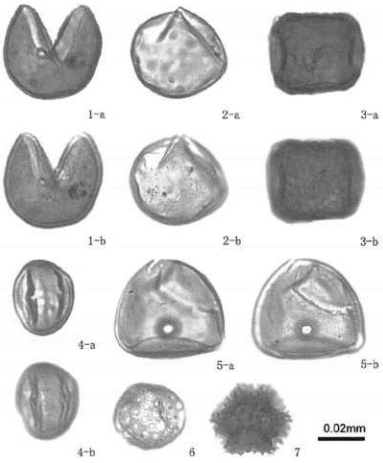
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
樹木									
モミ属	*Abies*	1	–	–	1	1	–	1	–
ツガ属	*Tsuga*	1	5	1	–	2	–	6	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	–	1	3	–	–	–	5	3
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	–	3	1	–	1	–	2	2
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	1	5	1	–	–	1	21	45
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	1	–	–	–	–	–	13	26
ヤナギ属	*Salix*	–	–	–	–	–	–	1	1
クルミ属	*Juglans*	–	–	–	–	–	–	2	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* – *Ostrya*	1	2	2	–	1	–	5	3
カバノキ属	*Betula*	–	1	–	–	–	–	2	–
ハンノキ属	*Alnus*	–	–	–	–	1	–	1	2
ブナ	*Fagus crenata* Blume	–	–	–	–	–	–	1	–
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	5	5	1	3	–	35	11
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	–	–	1	–	–	–	4	–
クリ属	*Castanea*	–	–	–	–	–	–	2	–
シイノキ属	*Castanopsis*	–	–	–	–	–	–	–	1
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* – *Zelkova*	–	1	–	4	–	–	6	6
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	–	–	–	–	–	–	7	–
ウルシ属	*Rhus*	–	–	–	–	–	–	2	–
カエデ属	*Acer*	–	–	–	–	–	–	3	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	–	–	–	–	–	–	1	–
草本									
イネ科	Gramineae	7	24	28	2	34	2	104	13
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	14	4	3	5	2	39	8
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	–	–	–	–	–	–	1	–
他のタデ属	other Polygonum	–	–	4	–	–	–	4	–
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae – Amaranthaceae	1	9	42	7	4	2	45	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	1	–	–	2	–	2	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	–	–	–	–	1	–	–	–
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	–	–	–	–	–	–	2	–
アブラナ科	Cruciferae	–	1	1	3	1	–	2	5
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	–	–	–	–	–	–	1	–
セリ科	Umbelliferae	–	–	–	–	–	–	1	–
ヒルガオ属	*Calystegia*	–	–	1	–	–	–	–	–
オオバコ属	*Plantago*	–	–	–	–	–	–	1	–
オミナエシ属	*Patrinia*	–	–	–	–	–	–	1	–
ヨモギ属	*Artemisia*	1	5	2	–	2	2	13	1
他のキク亜科	other Tubuliflorae	–	1	–	1	1	–	6	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	11	22	6	2	10	2	48	5
シダ植物									
ゼンマイ科	Osmundaceae	–	–	2	–	3	–	2	–
単条型胞子	Monolete spore	4	10	–	6	8	3	5	6
三条型胞子	Trilete spore	2	3	–	2	–	2	4	2
樹木花粉	Arboreal pollen	6	23	14	6	9	1	120	103
草本花粉	Nonarboreal pollen	23	77	88	18	60	10	270	41
シダ植物胞子	Spores	6	13	2	8	11	5	11	8
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	35	113	104	32	80	16	401	152
不明花粉	Unknown pollen	2	8	5	2	4	0	39	12

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表2　産出花粉化石一覧表

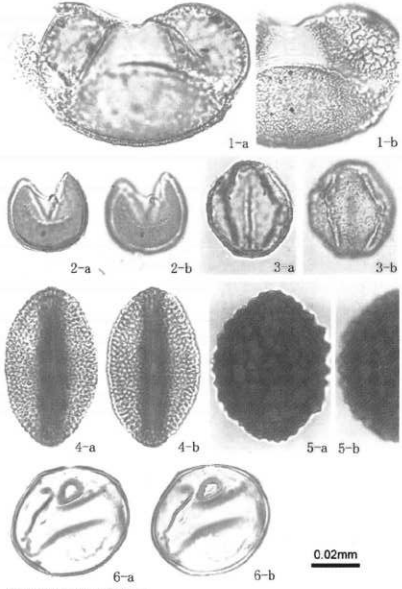
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	18
樹木													
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
モミ属	*Abies*	-	-	-	-	-	-	-	3	-	3	-	2
ツガ属	*Tsuga*	-	-	3	2	9	3	3	4	2	4	3	2
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
カラマツ属	*Larix*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	2	1	-	19	4	3	65	13	47	7	75
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	-	2	1	6	5	5	19	9	22	2	21
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	-	-	-	-	13	-	2	99	10	109	3	35
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.-C.	-	-	-	-	1	1	-	3	-	10	-	3
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	5
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	-	-	9	-	5	5	-	1	3	1
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	2	2	1	1	-	2	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	1	-	4	-	-	1	1	4	-	2
ブナ属	*Fagus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	-	-	-	21	5	6	37	5	32	5	43
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	3	8
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
シイノキ属	*Castanopsis*	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	-	-	-	2	-	2	12	4	7	-	3
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	2	-	-	3	-	1	-	1
トチノキ属	*Aesculus*	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクノキ属	*Ligustrum*	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
草本													
イネ科	Gramineae	1	5	8	8	96	19	49	262	54	202	34	62
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	2	-	23	9	17	3	1	3	2	1
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	5	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. *Persicaria-Echinocaulon*	-	1	-	-	1	-	1	2	-	-	-	1
他のタデ属	other Polygonum	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	6	19	4	1	4	15	122	3	-	11	264	18
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-	-	-	1	3	3	2	-	1	-	1
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
アブラナ科	Cruciferae	-	-	-	1	3	2	-	1	1	2	3	4
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オモナミ属	*Patrinia*	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
ベニバナ属	*Carthamus*	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	-	2	1	10	13	12	2	-	3	7	11
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	-	-	-	3	4	2	2	1	-	1	38
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	1	6	8	22	19	17	10	1	8	4	-
シダ植物													
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	2
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	1	1	1	4	2	-	-	-	1	1	1
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	1
単条型胞子	Monolete spore	1	1	7	2	13	17	14	3	1	5	7	19
三条型胞子	Trilete spore	-	-	1	-	3	2	5	-	1	-	2	4
樹木花粉	Arboreal pollen	2	3	8	3	96	22	31	246	45	243	27	204
草本花粉	Nonarboreal pollen	11	26	25	19	166	86	226	290	58	235	310	137
シダ植物胞子	Spores	1	2	9	3	20	24	19	4	3	7	10	27
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	14	31	42	25	282	132	276	540	106	485	356	368
不明花粉	Unknown pollen	1	1	3	1	31	7	5	6	5	7	5	9

T.－C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



1号堰北側の花粉化石

1：スギ　PLC SS 4060　試料8
2：イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科　PLC SS 4059　試料8
3：ニレ属―ケヤキ属　PLC SS 4061　試料8
4：コナラ属アカガシ亜属　PLC SS 4064　試料7
5：イネ科　PLC SS 4063　試料7
6：アカザ科　PLC SS 4065　試料7
7：タンポポ亜科　PLC SS 4062　試料7



G3-55グリッドの花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PLC SS 4277　試料18
2：スギ　PLC SS 4274　試料8
3：コナラ属コナラ亜属　PLC SS 4278　試料18
4：ソバ属　PLC SS 4273　試料6
5：ベニバナ属　PLC SS 4272　試料3
6：イネ科　PLC SS 4276　試料8

第２節　武田氏館跡大手１号堀跡・２号堀跡(三日月堀)堆積物のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

プラント・オパールとは、根より吸収されたこの珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。

武田氏館跡において行われた発掘調査で堀跡が検出され、土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、館および堀周辺のイネ科植物について検討した。

２．試料と分析方法

１号堀北側断面の分析試料は堀の断面より採取された８試料であるが、その断面図および試料採取層準については花粉分析の節の図１を参照して頂きたい。また各試料の土相についても遺構や花粉分析の節を見て頂きたいが、おおむねレキ混じりの黒褐色砂質粘土である。時期について、土層中央部の８層，13層の砂レキが武田氏滅亡後の豊臣氏、あるいは徳川氏による整地層と考えられている。

２号堀の分析試料はＧ３－55グリッドより採取された11試料（試料番号１～11）であるが、これら11試料の採取層準についても花粉分析の節の図１を参照して頂きたい。また各試料の土相についても花粉分析の節をみて頂きたいが、おおむね黒褐色の砂質粘土で、多くの土層にレキが混入している。時期については土層の堆積様相から、試料４～８が２号堀堆積物、すなわち館が築かれた1519年から武田氏が滅亡する1582年の期間と考えられている。その他の試料１～３および８～11は武田氏滅亡後に構築された１号堀堆積物と考えられており、16世紀末を中心とした時期と推測されている。

プラント・オパール分析は上記した１号堀北側断面の８試料とＧ３－55グリッド（１号堀、２号堀）の11試料の総計19試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め、表１（１号堀北側断面）、表２（Ｇ３－55グリッド：１，２号堀）に示した。また、それらの分布を図１（１号堀北側断面）、図２（Ｇ３－55グリッド：２号堀）、図３（Ｇ３－55グリッド：１号堀）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

（１）１号堀北側断面（図１）

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、中央部試料３～５において20,000個前後を示すなど最下部試料８を除き5,000以上と多く検出されている。また、イネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の一部破片も中・下部試料で観察されている。

イネ以外ではネザサ節型が最も多く、上部に向かい減少・増加を繰り返している。次いでヨシ属が多く、中・上部試料１～４では10,000個前後と、プラント・オパールの生産量が小さいヨシ属とし

ては高い数値を示している。シバ属やキビ族もヨシ属と同様の産出傾向を示しており、中・上部試料では5,000個前後を示しているが、最上部ではやや個数を下げている。その他クマザサ属型が3,000個前後得られている。

（2）G3－55グリッド（1号堀（試料1～3，8～11）・2号堀（試料4～8）：図2、図3）

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、多くの試料が10,000個前後を示しており、試料11では約70,000と非常に多く検出されている。またイネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の一部破片も若干観察されている。

イネ以外ではネザサ節型が最も多く、1・2号堀両堆積物において上部に向かい増加する傾向を示している。次いでウシクサ族が多く、2号堀では全試料10,000個以上を示すが、1号堀ではやや少なく半数以上の試料が6,000個前後を示している。ヨシ属にも同様の傾向が認められ、2号堀では7,000個前後、1号堀で3,000個前後を示している。キビ族は試料11で約17,000個と多く検出されている他は4,000個～11,000個の間を増減しており、イネとほぼ似た産出傾向を示している。その他シバ属は約1,000個～約7,000個を示しており、クマザサ属型がおおむね3,000個前後を示している。

4．館跡および堀周辺のイネ科植物について

ネザサ節型が最も多く検出されており、堀や館周辺にアズマネザサと推測されるネザサ節型のササ類が多く生育していたとみられる。このネザサ節型のササ類は主に日のあたる開けた所での生育が考えられ、館が築かれる以前は空き地や花粉分析で存在が推測されている針葉樹林や落葉広葉樹林の林縁部などにウシクサ族（ススキ、チガヤなど）とともに多く生育していたとみられる。しかしながら館や堀が構築される際に減少したことが推察され、その後回復傾向を示すが、滅亡後の整備等で再び減少し、その後再び分布を次第に拡大していったとみられる。

堀についてみると、ヨシ属が多く検出されており、堀内や土手下部の地下水位の高いところにヨシやツルヨシといったヨシ属が生育していたと推測される。またこの土手の中・上部や堀に伴う土塁には上記ネザサ節型のササ類の他、シバ属（ノシバなど）やキビ族（エノコログサ属など）が成育するようになり分布域を拡大したと推測される。

イネが全試料から検出されており、検出個数も多くが10,000個前後と比較的高い数値を示し、館周辺の水田域よりもたらされていることが考えられる。しかしながら1号堀の試料11ではイネが非常に多く検出されているものの、花粉分析結果をみるとイネ科花粉は上位試料に比べかなり少なくなっている。こうしたことからイネのプラント・オパールの多産は館周辺における稲作とは関係が無いように思われ、稲藁が堀内に捨てられるといったことで大量に供給されたことが考えられる。また、所々炭片が認められることから稲藁が焼かれ、その灰が堀内に混入することによってイネのプラント・オパールがもたらされたことも考えられる。このように試料11におけるイネのプラント・オパールの多産は稲藁やその灰の混入が主要因ではないかと思われるが、他の試料においては稲作を含め色々な要因のもと、イネのプラント・オパールが堀内に供給されていることが推測される。

なお、キビ族についてはその形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか，エノコログサ，スズメノヒエ，タイヌビエなどの雑草類によるものか現時点では分類できず不明であるが、イネと同様の産出傾向を示していることから、タイヌビエといったような稲作に伴う雑草のキビ族と推測される。また土手などにもエノコログサなどの雑草類に由来するキビ族が生育していたとみられる。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－．考古学と自然科学，11，p.9-20.

表1　試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	17,200	0	19,400	3,200	1,100	12,900	5,400	4,300	4,300	16,100
2	9,400	0	15,700	1,000	0	9,400	7,300	9,400	3,100	8,300
3	20,600	1,200	23,100	4,900	2,400	9,700	6,100	4,900	6,100	15,800
4	20,800	0	31,100	1,200	0	10,400	4,600	6,900	2,300	9,200
5	19,100	1,100	20,200	2,200	1,100	6,700	4,500	5,600	1,100	9,000
6	6,000	0	19,100	2,400	1,200	3,600	1,200	4,800	10,700	10,700
7	5,600	1,100	21,400	2,300	0	4,500	2,300	1,100	1,100	9,000
8	2,300	1,200	26,800	3,500	1,200	4,700	2,300	2,300	4,700	8,200

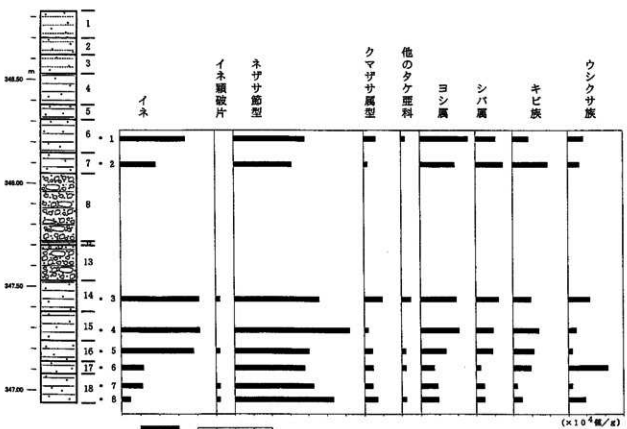


図1　武田氏館跡1号堀北側断面堆積物のプラント・オパール分布図

表2　試料1ｇ当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ頴破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	8,900	1,100	21,200	2,200	2,200	1,100	5,600	4,500	6,700	11,200
2	14,400	0	17,700	3,300	1,100	3,300	4,400	4,400	11,100	13,300
3	5,600	1,100	14,600	1,100	2,200	3,400	5,600	9,000	10,100	6,700
4	12,800	0	9,300	3,500	0	7,000	3,500	11,700	17,500	5,800
5	8,100	0	36,900	3,500	0	6,900	6,900	4,600	13,800	19,600
6	18,200	0	27,300	2,300	0	8,000	1,100	8,000	19,300	12,500
7	17,600	0	20,100	5,000	1,300	16,300	2,500	11,300	12,600	11,300
8	3,500	0	11,700	0	1,200	2,300	1,200	3,500	5,800	8,200
9	13,700	1,200	10,000	1,200	0	7,500	2,500	10,000	6,200	7,500
10	8,700	0	5,000	2,500	0	2,500	2,500	3,700	2,500	1,200
11	70,300	0	16,900	3,900	0	3,900	2,600	16,900	6,500	6,500

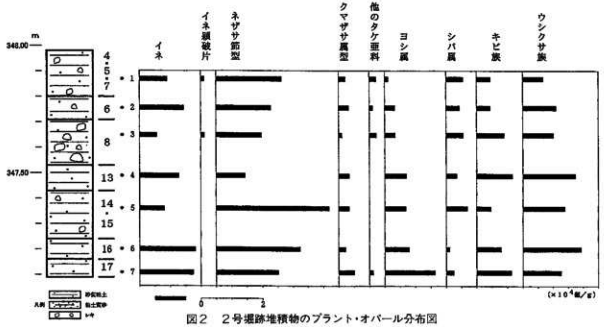


図2　2号堰跡堆積物のプラント・オパール分布図

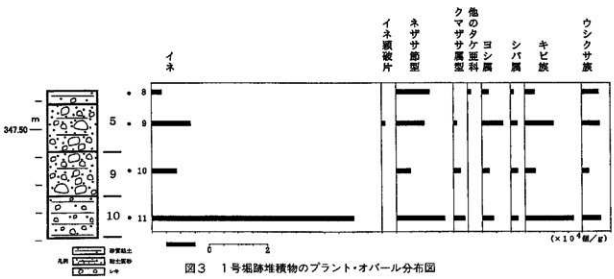
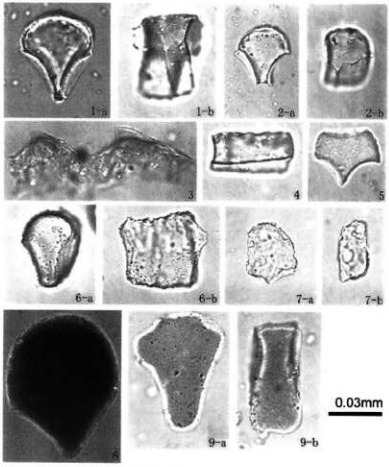
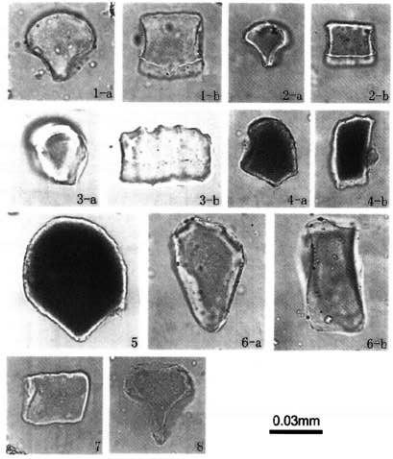


図3　1号堰跡堆積物のプラント・オパール分布図



1号堀北側断面プラント・オパール

1、2：イネ（a：断面、b：側面）1：試料5、2：試料8
3：イネ頴部破片 試料7
4：キビ族（側面）試料3
5：シバ属（断面）試料8
6：ネザサ節型（a：断面、b：側面） 試料3
7：クマザサ属型（a：断面、b：側面） 試料1
8：ヨシ属（断面）試料1
9：ウシクサ族（a：断面、b：側面） 試料2



G3-55グリッド断面プラント・オパール

1、2：イネ（a：断面、b：側面）1：試料6、2：試料9
3：ネザサ節型（a：断面、b：側面） 試料5
4：クマザサ属型（a：断面、b：側面） 試料5
5：ヨシ属（断面）試料5
6：ウシクサ族（a：断面、b：側面） 試料5
7：キビ族（側面） 試料7
8：シバ属（断面）試料6

第5章　考　察

第1節　史跡武田氏館跡大手の構造と変遷

武田氏館跡大手の構造は、平成12年度の試掘調査以前には棒状の馬出土塁のみが防御施設として築かれていたと考えられてきた。しかし、調査によって馬出土塁の実態が自然石野面積みの石塁であることが明らかとなり、年代的にも武田期以降の構造物であることが指摘された。同時に石塁東側において1号堀跡が検出されていた（註1）が、今回の面的な発掘調査によって主郭大手に構築された防御施設全体の範囲や構造がより明確となった。よって、武田氏館跡大手の構造について変遷過程を確認しつつ、各時期の様相を整理する。

（1）大手第1期

確認されている中では最下層に位置付けられる遺構面で、地山層上に構築されている。平成12年度試掘調査では、地山面まで掘り下げた確認が行われており、掘立柱建物跡や石組水路などが確認されている。試掘調査成果を合わせても極めて断片的な確認であるため、それ以上詳細な遺構の展開状況は不明であるが、トレンチ1からトレンチ3までの南北方向に設定した調査区の断面観察によると、扇状地の傾斜を段切りによって造成した屋敷地の存在が認められた。東西方向の奥行きは定かではないが、一帯に長方形の地割が展開していたと考えられる。

屋敷地の居住者像は不明であるものの、建物基壇跡周辺で出土した中国陶磁器やトレンチ9から出土した高麗青磁碗などから武士階級の可能性もあるが、付近から熔融した金属が付着した土器も多数出土していることから、鍛冶職人が居住していた可能性もある。したがって、第1期段階では館に近接して城下町が展開していたと考えられる。

（2）大手第2期（図1）

主郭大手土橋を囲い込むように湾曲した半月形の2号堀跡が展開する。いわゆる三日月堀である。堀跡の規模は北側の調査で確認された範囲で堀幅約4m、深さ約2.5mで、南側は大手石塁との重複により不明確であるものの、全長は中央南側の湾曲の方向から考えると、概ね全長約30m前後の規模と推定される。2号堀跡は北端部が調査区内で検出されていることから、北側は大手土橋前を南北に縦断する現市道と重複する位置に虎口が開かれていたことは確実である。

2号堀跡は丸馬出の一部と考えられるが、内側では土塁の痕跡を確認することができず、丸馬出全体の構造を把握するまでには至らなかった。特に堀内からは主郭側から投げ込まれたと考えられる多数の礫群が検出されており、人為的に埋め戻されたことは明白である。このことは重複する位置に1号堀跡及び大手石塁などが構築され、虎口形態が大きく変更されたことによって破却されたとみられる。遺構の重複関係からみて、大手虎口を防御する馬出構造としては初現であり、防御施設としては最も古く位置付けられる。

（3）大手第3期（図1）

1号堀跡は大手石塁の外側を大きく取り囲むように展開している。中央から北側にかけての範囲は確認されており、平成12年度調査区内で途切れることが明らかである。またトレンチ14内では1号堀跡と対になる可能性がある3号堀跡を検出している。二つの堀跡を結ぶ形状は「コ」の字形の角馬出のような形態となり、その全長は約50mに及ぶ。堀が途切れる中央及び南北両端の3箇所に虎口が開いていたと想定され、形態的には主郭北虎口の馬出構造と酷似する。

1号堀跡は、2号堀跡である三日月堀を掘削しつつ展開していることから2号堀跡よりは新しい。大手石塁本体との直接的な重複関係はないものの、関連する惣堀土塁隅に設けられた1号石組や惣堀土塁と重複することから、大手石塁とは新旧関係があるものと考えている。

（4）大手第4期（図1）

野面積みによる大手石塁が構築された時期である。発掘調査で検出された大手石塁の形状は「L」字形であったが、広島市立図書館浅野文庫蔵「諸国古城之図」を始めとする武田氏館跡を描いた古絵図の多くは「コ」の字形に描いている。発掘調査によって東面末端部の根石が既存の北面の石垣より外に飛び出していたことから判断すると、大手石塁が古絵図のとおり北側にも張出しを有していた可能性は高い。

大手石塁には中央と南側の内側2箇所に石階段が設けられており、上部に昇降できるような構造であった。中央階段部には土間敷きの踊り場が設けられていたことから、土間を覆うように大手石塁上に建造物が存在したか、あるいは計画されていた可能性が高いと考えられる。そして、惣堀土塁隅に設けられた石積みの痕跡と考えられる1号石組と大手石塁の間が虎口として機能したと考えられ、構造的には大手石塁北側の空間は、織豊期の枡形虎口の形態が採用されている。

大手の外郭線を構成する惣堀・土塁については、惣堀に架かる北十橋西側で階段が発見され、最下段の遺構面と大手石塁付近の遺構面の高さが近似することが判明した。同時にトレンチ2・6では平場の造成が行われたことが確認されており、惣堀・土塁に囲まれた大手東側一帯の造成と大手石塁一帯の造成が一体的に行われた可能性が高く、大手第4期では惣堀・土塁によって区画された一つの付属曲輪と位置付けられる。

第2節　2号堀跡（大手三日月堀）の評価と年代

大手石塁直下で確認された2号堀跡は、大手虎口を半月形に囲い込むように配置されたいわゆる三日月堀であり、武田氏館跡では初めて確認されたものである（以下、「大手三日月堀」）。大手石塁と重複しており、部分的な調査ではあるものの、堀の北側と南北の湾曲部を検出したことから、全体の姿は概ね図2のようになると想定される。三日月堀は、その内側に土塁を伴い、丸馬出を形成していたと考えられるが、大手の調査ではその痕跡は確認されていない。

丸馬出の研究には多くの蓄積があり、敢えてこの場で詳細に検討することはできないが、『甲陽軍鑑』では武田氏が用いた築城術の一つとして描写されている。実際に武田領国内の戦国期城郭の虎口に数多く存在し、その特徴ある形態から武田氏独自の馬出形態として多くの城郭研究者が関心をよせてきた。丸馬出の分布図が圧倒的に甲斐国外に存在し、甲斐国内の事例が新府城跡の大手といわれる南門のみであったことから、武田氏が丸馬出を採用した契機については、最初に領国化した信濃の城郭から取得し、侵攻先で発達させたと評価されてきた。つまり、武田氏が独自に考案したものではなく、信濃に存在した築城技法を武田氏が攻略の過程で習得し、侵攻先で多様化させたと考えられてきたのである。

しかし、今回の発掘調査で確認された大手三日月堀は、後続する1号堀跡や大手石塁の構築によって破却されており、これまで存在自体知られていなかった。武田氏本拠の大手で発見されたこともあり、武田氏によって築かれたものと考えたいが、近年の丸馬出研究によって武田領国以外にも丸馬出が存在することや、近世段階に築かれた遺構が存在することも明らかにされており、慎重に検討しなければならない。大手三日月堀の構築年代については、年代決定の決め手となる出土遺物も少なく、限られた資料だけでは武田氏滅亡前後の短い時間幅を細分化することは現時点で不可能に近い。したがって、大手三日月堀の年代については、大手全体の構造の変化と合わせて、館跡全体の構造の変化をみていく必要がある。

まず、大手土橋から大手三日月堀の規模と位置を確認すると、既存の大手土橋よりやや北側に位置していることがわかる。大手虎口では土橋石垣の積み方が南北で異なり、二段積みとなっている北側が古いとみられている。大手門脇の石積みの構造からみても土橋から直線的に入る北側に比べ、南側は不自然な折れが入ることから、南側が拡張されていると考えられる。大手三日月堀が北寄りに位置

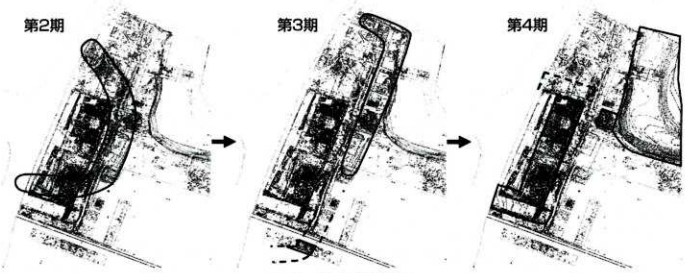


図1　大手変遷図

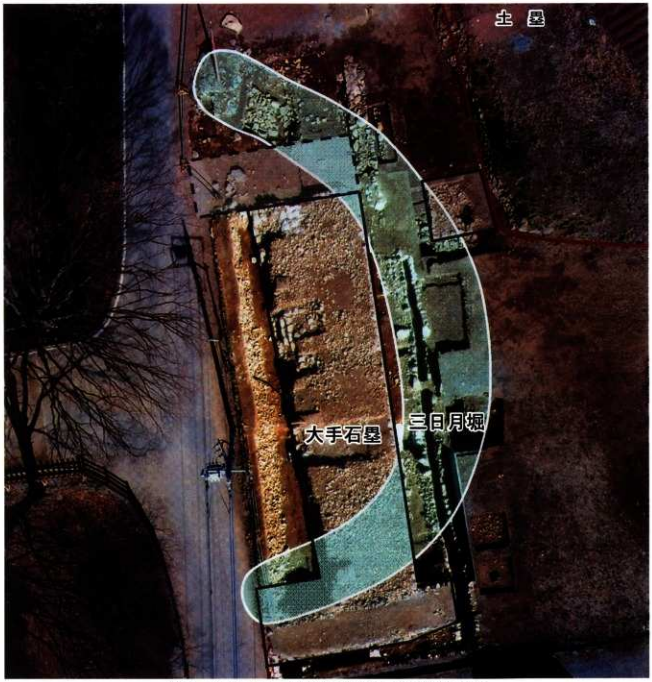


図2　大手石塁・2号堀跡（三日月堀）重複図

することは、造り替えのない古期の虎口面を基準にしていると想定される。さらに大手三日月堀と大手土橋との位置関係から既存の堀と土塁規模の主郭に合わせた造りとなっており、年代を考える上で重要な手掛かりとなる。

主郭の変遷は、大手虎口及び南・西土塁の調査によって、既存の土塁内部から16世紀中葉のある時点まで機能していた一回り小さな堀と土塁が発見されている。その後小規模な堀と土塁を埋め立ててほぼ倍となる現状の規模に拡大させたことが判明している（註２）。よって、既存規模に合わせて構築されていた大手三日月堀は、少なくとも小規模な主郭であった時点では存在しなかったということになる。では、主郭の拡張時期はいつ頃であろうか。

その答えを探る上で重要となるのは、西曲輪とその北に位置する味噌曲輪の存在である。西曲輪は、『高白斎記』によると、天文20年（1551）に武田義信のために新造された曲輪であり、味噌曲輪はその後に増築された曲輪である。西曲輪北側枡形虎口は、武田期には形成されていたことが確認されており、味噌曲輪についても東西土塁の調査によって武田期に造成されたことが確認されている。よって、西曲輪・味噌曲輪は主郭に規制されて造営された曲輪であり、特に西曲輪造営は一つの転機と位置付けられる。よって、武田氏館跡主郭が既存規模となったのは、少なくとも西曲輪造営以後まで遡る可能性が高く、その視点でみると、大手三日月堀の開削時期は、天文20年以降であると考えられる。

もう一つ三日月堀の年代を考える上で近年興味深い事例が報告されている。平成18年度に沼津市所在の興国寺城跡において二の丸の発掘調査が実施され、東西37.8m、最大幅4.3m、深さ3.8mと類似した規模の三日月堀が検出されている。武田氏が入った元亀２年（1571）以降に築かれたと考えられており、武田氏滅亡後の勢力によって破却されたと考察されている。興国寺城跡の事例は、武田氏から徳川氏、豊臣系大名が城主となっている点で同じ歴史背景を辿っており、検出状況も類似することから年代を考える上でも大変興味深い。このような他事例を参考にするとともに、丸馬出を館に導入しなければならなかった歴史背景などを考慮すると、現時点では大手三日月堀の造営年代を信玄末期から勝頼期と位置付けたい。

廃絶時期については、堀内に礫が投げ込まれていたことから、人為的に破却されていたことが明らかにされている。その後、大手三日月堀に代わる新たな虎口構造として、大手第３期の角馬出状の１号堀跡が形成される。角馬出状の虎口構造がどの時点で採用されたものか定かではないが、大手三日月堀を破却し、大手の虎口構造を大きく変更しなければならない政治的・軍事的な意図があったことは間違いない。武田氏が角馬出を用いた事例は見当たらず、第４期の大手石塁が豊臣期と考えられることから、大手第３期の角馬出をその前の徳川期か、あるいは豊臣期でも羽柴秀勝の可能性もあるが、関東移封以前の徳川氏による虎口形態などが不明瞭であるため、あくまで推測の域に止め、今後の課題としたい。

第３節　大手石塁の評価と年代

大手第４期に位置付けられる大手石塁が築かれたのは、第１節で明らかにしたとおり、甲斐の領主交替が相次ぎ武田氏館跡大手全体の構造が大きく変化した時期である。形態的な特徴についてはすでに述べたが、大手石塁の石積みの特徴は、小規模な石材や詰め石にハツリの痕跡はみられるものの、基本的に築石の多くは自然石を無加工で野面積みしていることである。使用されている石材は、川原石ではなく、館跡周辺の山塊から産出する石材を用いていると考えられ、北部の要害山周辺から南部の愛宕山周辺にかけての東側の山筋で産出する安山岩を主体として、御岳昇仙峡方面の岩脈から入り込んだ西側の山筋にみられる花崗岩なども使用している。よって、使用石材は近隣の石材としながらも、単一の石材ではなく、多様な石材を用いていることも特徴である。

構造的には平成12年度の試掘調査による断ち割りによって、石塁内部はほぼ栗石層で覆われてい

ることが確認されている。さらに本来は根石と考えられる築石の下にひと回り小さな石材を並べて土台としている。地覆石のような石列は根石の地固めに使用したと思われ、東面と西面のみに使用されていることから、南北方向の傾斜地での安定を目的に用いられたと考えたい。このような根石下の石列の使用例は管見の範囲では類例がなく、年代的な差異によるものであるのか、技術者の差異によるものであるかは東国における石積みの技術や在来の技術の存在も含めて今後事例研究が必要である。

大手石塁の年代については、石積みの技術や虎口構造から織豊期の遺構であることは疑いない。天正14年（1586）に徳川家康は豊臣秀吉の臣下となっているため石積みの技術者を動員できた可能性はあるものの、虎口構造全体からみても、年代的には豊臣家臣団のいずれかの段階で築かれた可能性が高い。徳川家康が関東に移封された後は、天正18年（1590）に羽柴秀勝、天正18年～文禄２年（1593）に加藤光泰、文禄２年～慶長５年（1600）に浅野長政・幸長が甲斐を領有している。羽柴秀勝の甲斐支配は短期間であったこともあり、実質的には加藤氏・浅野氏の関与が想定されるが、明確な記録は残されていない。

大手石塁の構築年代を考える上で忘れてはならないのは、武田氏館跡に代わる新たな甲斐の統治拠点として築城された甲府城との関係である。甲府城築城をめぐっては、現時点では徳川氏段階、あるいは加藤氏段階など諸説あるが、築城に係る文書は文禄・慶長年間に散見され、寺社の移転も同時期の記録が残ることからも、現時点では加藤氏か浅野氏段階で築城に着手した可能性が高い。甲府城跡は、史跡公園整備に伴い石垣の解体修理を含む城内の発掘調査を山梨県教育委員会が実施しており、浅野家の家紋瓦が多数出土していることからも、浅野氏が甲府城築城に関与したことはほぼ確実である。甲府城を築城する一方で浅野氏が武田氏館跡を同時期に改修する必要性もなく、かつ人員を投入することも困難と考えられる。

加藤氏については、これまでの発掘調査の中で甲府城築城に関与したことを示す物的な証拠は皆無と言える。関与を裏付ける有力な史料として加藤光泰が朝鮮半島出兵中に甲斐へ送った文書（註３）が知られているが、武田氏館跡における発掘調査成果も踏まえた上で築城場所については疑問視する見解も出されている（数野2002ａ）。

甲府城跡と同様に武田氏館跡でも家紋瓦など加藤氏の直接的な関与を示す出土遺物は得られてはいないが、甲府城跡の石垣との規模や構造、技術差などを相対的に比較すると、天守台を含む武田氏館跡に残された石垣は、より古い要素を備えていると考えられる。合わせて、大手石塁から惣堀北虎口までは同時期の造成層や構造物が確認できるものの、それ以外の区域では表層直下で武田氏段階の城下町の痕跡が発見される場合が多く、惣堀内側の多くは半造作のような状況であったことが想像される。このことは、加藤光泰が文禄２年段階で進めていたとされる「東の丸」造営の進捗状況と合致する可能性があり、「東の丸」は甲府城稲荷曲輪ではなく本調査地点か、あるいは主郭内の東曲輪を指すのではなかろうか。よって、大手石塁の構築年代を加藤光泰が領有した天正18年（1590）から文禄２年（1593）年の間と位置づけ、武田氏館跡大手第４期をその年代に想定したい。

註

1　平成12年段階では調査面積の制限等から本報告の１号堀跡・２号堀跡がともに１号堀跡として扱われているが、当初より三日月堀となる可能性も含めた想定が提示されていた。詳細は甲府市教育委員会『史跡武田氏館跡Ⅸ』2002参照。

2　未報告であるが、大手虎口の現状変更による発掘調査によって、幅７ｍ前後の小規模な堀跡と石積みの土橋を大手土橋内側の通路部で検出している。南土塁の調査成果については、甲府市教育委員会　2000『史跡武田氏館跡Ⅵ』参照。

3　山梨県　1998『山梨県史資料編８近世１』所収第157号文書

参考文献

池田　誠　1996「徳川家康築城技巧の一考察」『中世城郭研究』第10号中世城郭研究会
石川浩治　2001「武田氏築城技術の波及」
『山梨県考古学協会2001年度研究集会武田系城郭の最前線』山梨県考古学協会
河西克造　2001「長野県内の武田系城郭調査」
『山梨県考古学協会2001年度研究集会武田系城郭の最前線』山梨県考古学協会
数野雅彦　2001「武田氏館跡の発掘調査成果」『新府城と武田勝頼』新人物往来社
数野雅彦　2002ａ「武田系城郭の枡形虎口について」『織豊城郭』第９号織豊城郭研究会
数野雅彦　2002ｂ「甲府城築城関係史料の再検討」『甲斐の美術・建造物・城郭』岩田書院
甲府市教育委員会　1999『史跡武田氏館跡Ⅳ』
甲府市教育委員会　2000『史跡武田氏館跡Ⅵ』
甲府市教育委員会　2002『史跡武田氏館跡Ⅸ』
甲府市教育委員会　2003『史跡武田氏館跡Ⅹ』
佐々木満　2007「史跡武田氏館跡の虎口構造－大手三日月堀をめぐって－」『中世城郭研究』
第22号中世城郭研究会
高田　徹　2002「丸馬出に関する一考察 - 縄張り研究の立場から - 」『中世城郭研究』
第16号中世城郭研究会
萩原三雄　1984「丸馬出の研究」『甲府盆地 - その歴史と地域性 - 』雄山閣
八巻孝夫　2001「武田系城郭の構造的特質」
『山梨県考古学協会2001年度研究集会武田系城郭の最前線』山梨県考古学協会
山下孝司　2001「新府城と武田氏の築城技術」『新府城と武田勝頼』新人物往来社
山本恵一　2007「史跡興国寺城跡の発掘調査概要」『よみがえる戦国の村－阿野庄と七栗田』
静岡古城研究会

第6章　結　語

平成16年度に策定した『史跡武田氏館跡整備基本構想・整備基本計画』に基づき、第1期整備事業に位置付けられた武田氏館跡東側の大手門周辺ゾーンの発掘調査を実施した。本調査の目的は、土地利用状況や構造を把握し、武田氏館跡大手門周辺の様相を明らかにすることであり、その成果を史跡整備に反映させ、保存、活用することであった。保存を前提とした調査であるため、必要最低限度の掘削に止めていることから下層の遺構ほど部分的な確認となっており、全容解明には程遠い調査内容であったことは否めないものの、その前提の下に武田氏館跡大手の様相について第5章において考察を試みた。

発掘調査地点は、遺構・遺物から判断する限りにおいては、扇状地の傾斜地を段上に造成した長方形の屋敷地が連続していたと推定される。よって、武田氏館大手の初期の様相は、館に近接した城下町が形成されており、その後大手虎口を防御するために築かれた馬出の出現によって一変したことが明らかとなった。

大手虎口を半月形に囲い込むように掘削されていた2号堀跡は、武田領国に展開している城郭に数多く見受けられる三日月堀であることが判明し、武田氏本拠の大手から発見されたこともあり、その規模や年代について注目が集まった。規模としては他事例と比べても小規模であるため、実戦用というよりは、むしろ館の正門である大手に存在したことの意味を考える必要があるだろう。

2号堀跡の年代については、少量の出土遺物から16世紀後半の短い時間幅の中で断定することは不可能であり、大手ばかりではなく、館跡全体の変遷過程も含めて評価する必要があった。特に主郭がどの時点で現状規模に造成されたのかということが2号堀跡の年代を決める上で重要な鍵を握ると考え、過去の調査成果を踏まえて天文20年（1551）の西曲輪造営が一つの定点となることを明らかにし、少なくともそれ以後に開削されたものと位置付けた。

後続する1号堀跡については、L字状に開削されており、位置的には3号堀跡と合わせて角馬出を形成する可能性があると考えられた。しかしながら、3号堀跡の規模や性格が不確定であることから、現時点では推定の域を出るものではなく、あくまで可能性を指摘したが、形態的には主郭北虎口にみられる虎口構造と規模の点でも酷似するため、今後の発掘調査等によりその様相について見極めていく必要がある。

その後、武田氏館跡最終段階には大手門を守備するために大手石塁が築かれた。大手石塁は、自然石野面積みの総石垣の構造物で、西側中央と南側に階段が取り付けられていることから、上部には何らかの施設が存在した可能性が高い。残念ながら、上面を後世の開墾等によって失っているため、礎石など建築物の痕跡を示すものは確認されていないが、中央階段に設けられた土間の存在は、建造物に覆われることを示していると考えられる。大手石塁の石垣高からもそのままでは防御機能を果たすことは困難とみられ、虎口に付随した長屋門や多聞櫓のような建物が建設されたか、あるいは計画されていたのではないだろうか。

虎口構造の変遷や大手石塁とその周辺遺構の関係からも、織豊期には館跡東側一帯が惣堀・土塁で区画された付属曲輪として整備されつつあったと考えられる。ところが、その造成は大手門正面周辺に止まり、館跡の機能停止とともに惣堀北虎口に設けられた階段も意図的に封じられ、曲輪全体は未完のまま廃絶したと推定される。

以上、調査成果を踏まえた武田氏館跡大手門周辺の様相は、戦国大名武田氏三代の時代ではなく、その後の勢力によって新たに造成された姿であることが明らかとなった。したがって、整備対象とする年代設定は、あくまで最終段階である織豊期の姿とせざるを得ない。この点については、『史跡武田氏館跡整備基本構想・整備基本計画』では、基本的には武田氏の時代で整備するが、武田氏以後の遺構についても整備対象とするとされている。よって、本調査地点一帯の整備時期は織豊期を基本として調査成果を基礎資料とした検討の下に整備を進めることとし、本書を結ぶこととする。

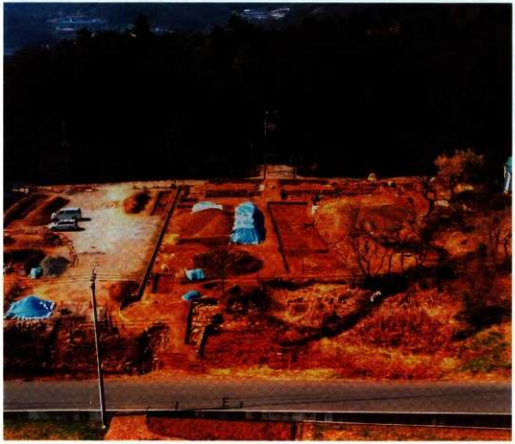
武田氏館跡遠景（南～）

武田氏館跡遠景（北～）

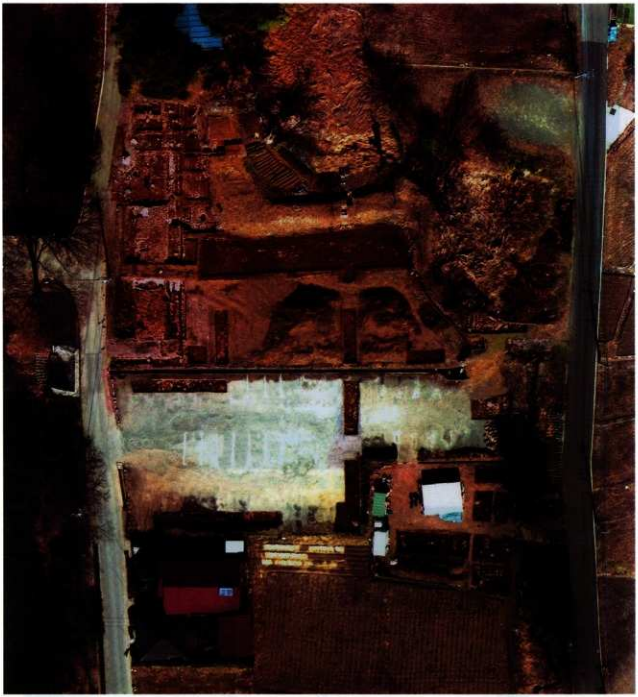
武田氏館跡全景（平成２年）

武田氏館跡全景（平成16年）

調 査 区 周 辺

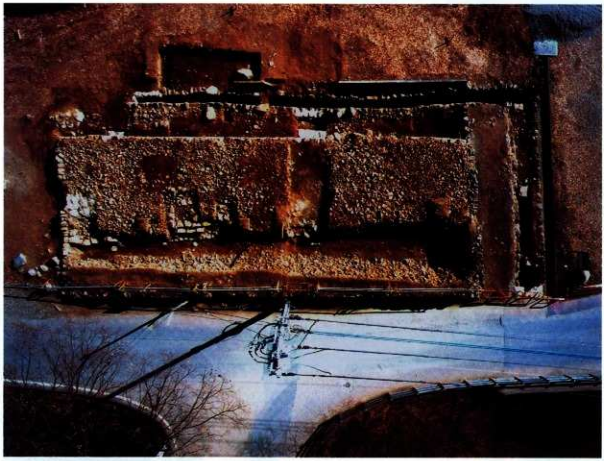


調 査 区 近 景



大手調査区全景

調査着手時



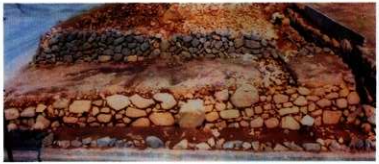
大手石塁全景（直上）

大手石塁全景（東～）

大手石塁東面

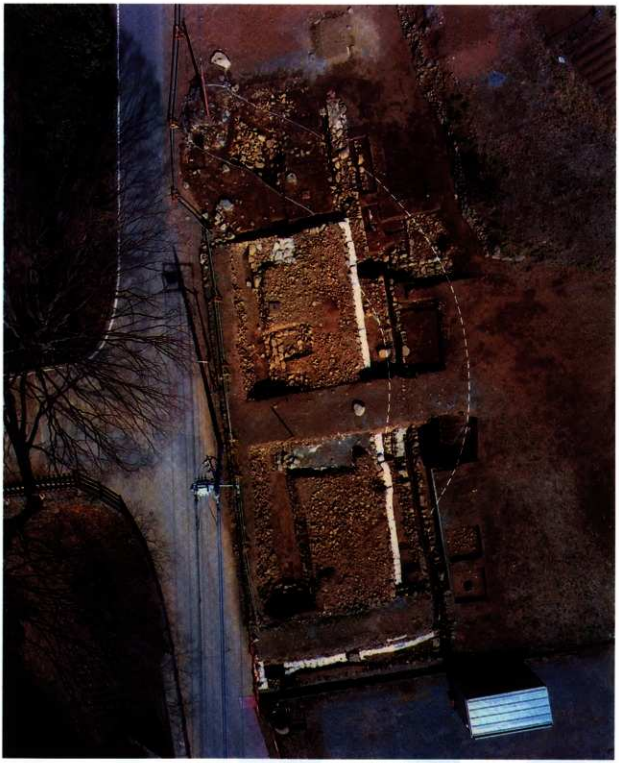
大手石塁西面

大手石塁南面



大手石塁南面

大手石塁全景（南～）



上：２号堀跡
（三日月堀）全景
（直上）

右：２号堀跡
（三日月堀）全景
（東～）

大手石塁調査当初

大手石塁東面南側確認状況

大手石塁及び3号溝跡埋土堆積状況

大手石塁中央階段付近断面

大手石塁東側板列検出状況

大手石塁全体調査状況

大手石塁及び1号石組検出状況

大手石塁全景

大手石塁東面検出状況

大手石塁東面検出状況

大手石塁西面検出状況

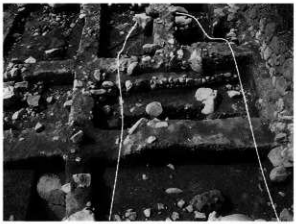
大手石塁南階段検出状況

大手石塁中央階段検出状況

大手石塁中央階段付近銭出土状況

大手石塁南面調査前

大手石塁南面検出状況



1 号 堀 跡 北 側

1 号 堀 跡 北 側

1 号 堀 跡 A 断 面

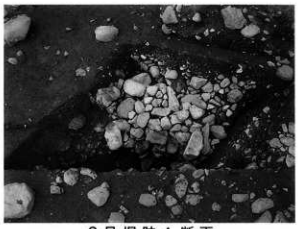
1 号 堀 跡 B 断 面

2 号 堀 跡 北 側

2 号 堀 跡 北 側

1・2号堀跡重複箇所(G3 55)北断面

2号堀跡(G3-55)南断面



2号堀跡A断面

2号堀跡B断面南面

2号堀跡B断面北面

3号堀跡

3号堀跡断面

惣堀北虎口脇検出状況

惣堀土塁北側護岸検出状況

惣堀内木柱出土状況

惣堀北虎口調査着手状況

惣堀北虎口階段部掘削状況

惣堀北土橋基部断面

惣堀北虎口階段部断面

惣堀北虎口全景

惣堀北虎口階段全景

惣堀北土橋石積み

惣堀南土橋石積み

惣堀土塁(トレンチ８)検出状況

惣堀土塁(トレンチ８)土器出土状況

惣堀土塁(トレンチ８)断面

惣堀土塁(トレンチ8)内1号堀跡検出状況

惣堀土塁(トレンチ１)断面

惣堀土塁(トレンチ１)南面

惣堀土塁粘土層帯検出状況

惣堀土塁(トレンチ４)端部検出状況

惣堀南土橋検出状況

惣堀南土橋基部断面

惣堀南虎口調査状況

惣堀南虎口1号建物跡

6号溝跡

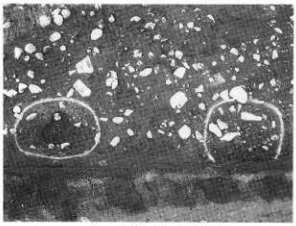
建物基壇跡

1号井戸跡断面

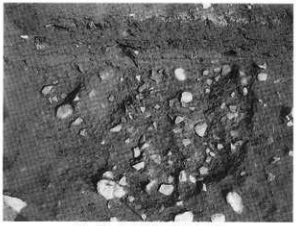
1 号 土 坑 確 認 時

1 号 土 坑 掘 削 中 間

1 号 土 坑 断 面



1 ・ 3 号 土 坑



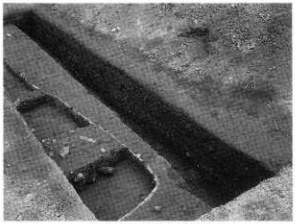
2 号 土 坑 掘 削 中 間

2 号 土 坑

3 ・ 4 号 石 列

5 号 石 列

トレンチ１・２北側

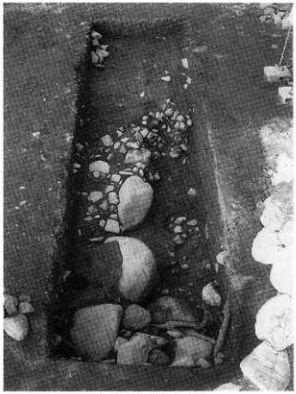


トレンチ２断面

トレンチ３

トレンチ３北側

トレンチ９



トレンチ１２

トレンチ１５

トレンチ１１

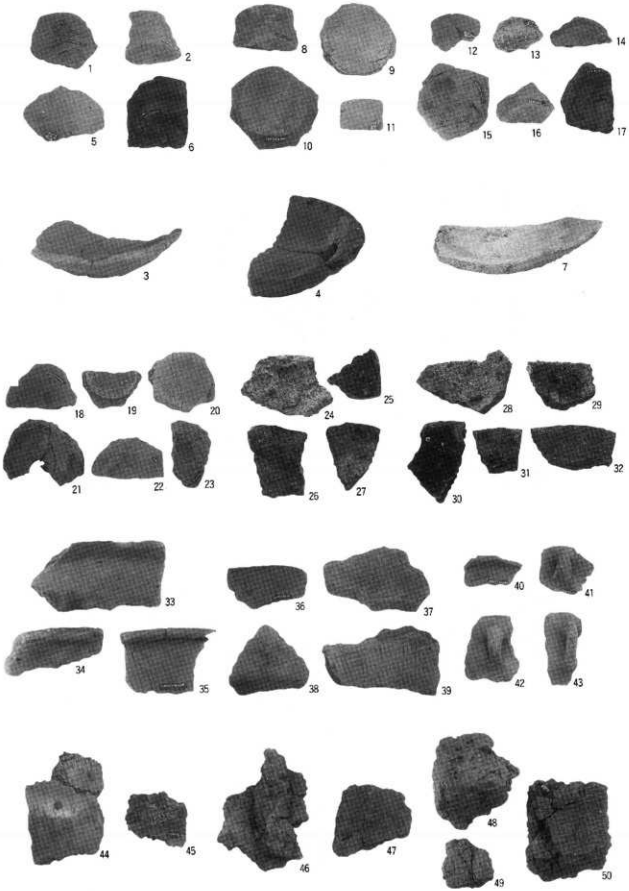
トレンチ１１物堀側

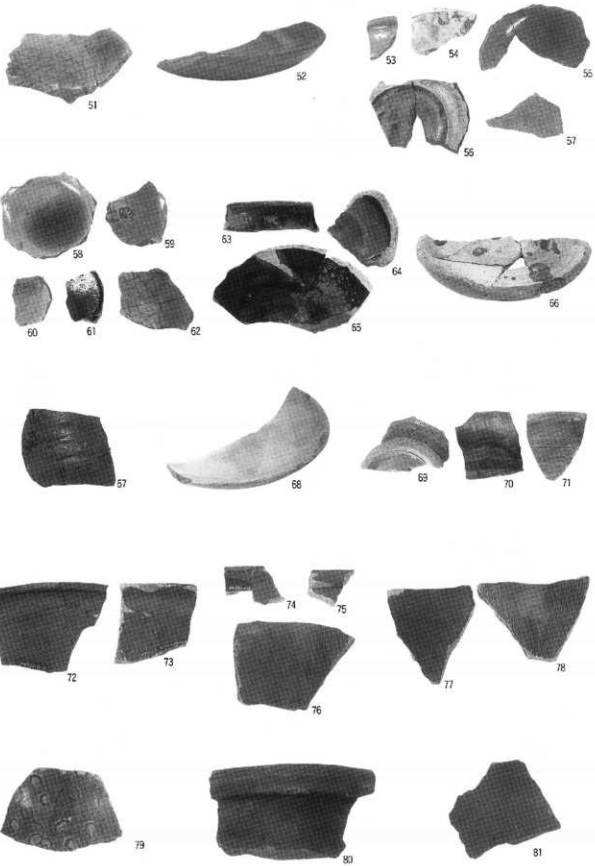
調　査　状　況

調　査　状　況

現地見学会

大手石塁




51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

82

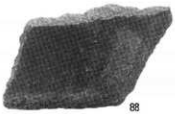
83

84

85

86

87


88

89

90

91

92

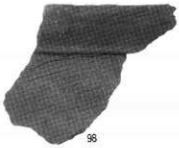
93

94

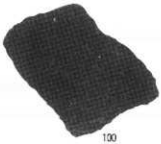
95

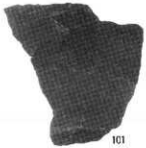
96

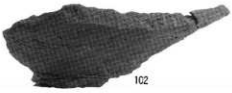
97


98

99


100


101

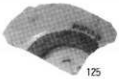

102

121

122

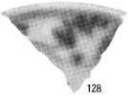
123

124

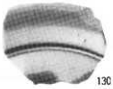

125

126

127

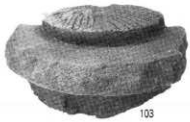

128

129

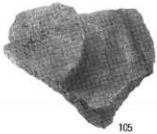

130

131

132

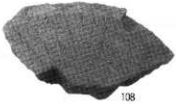

103

104


105

106

107


108

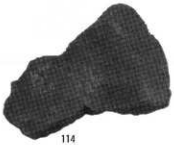
109

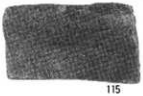
110

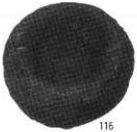
111

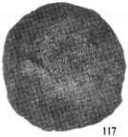
112

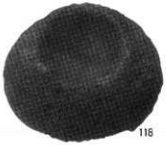
113


114


115


116


117


118

119

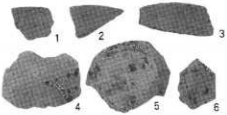
120

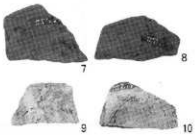
1号堀跡

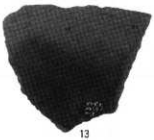
2号堀跡

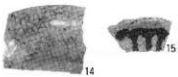
1号石列

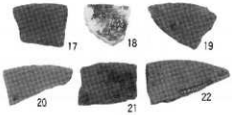
惣堀土塁

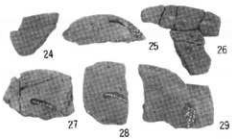


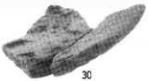


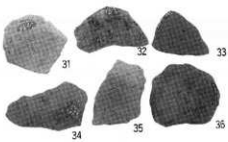


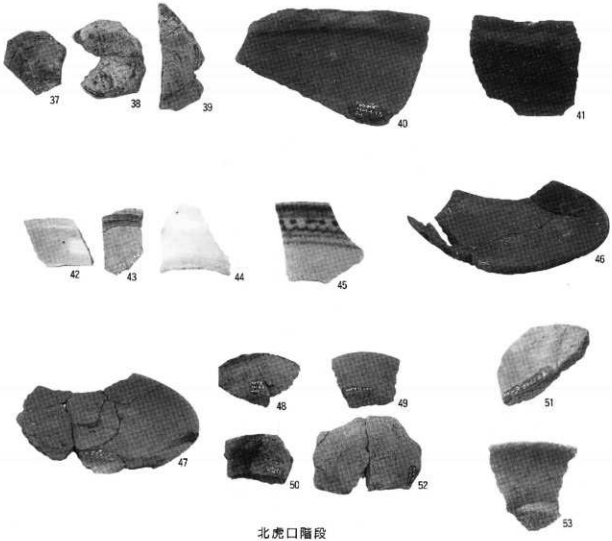




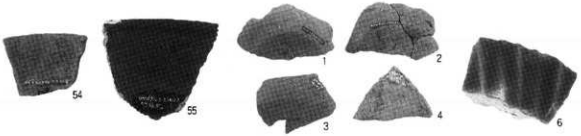




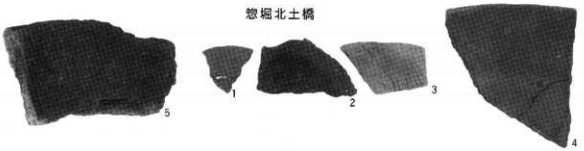




北虎口階段



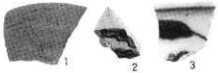
惣堀北土橋



3号溝跡

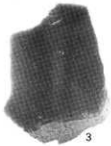
6号溝跡

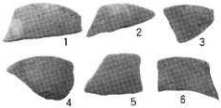
1号井戸跡

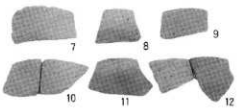


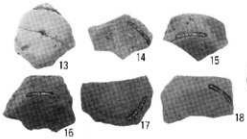
建物基壇跡

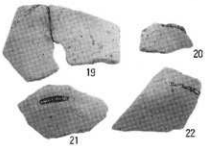
1号土坑

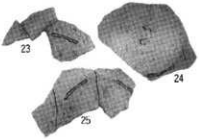


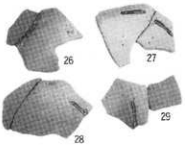


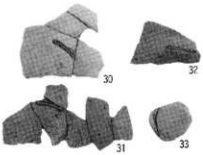




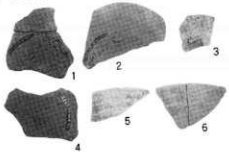


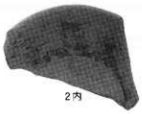


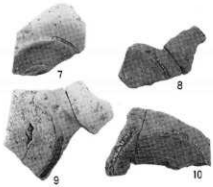




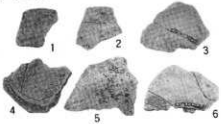
2号土坑



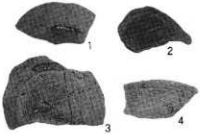


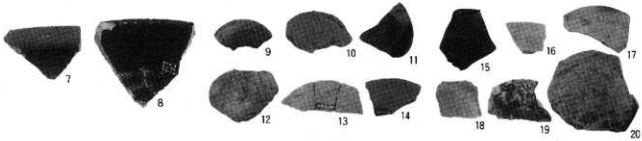


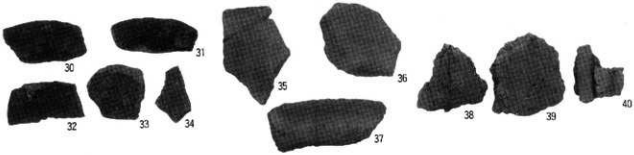
3号土坑



グリッド







41
42
43
44
45
47
48
49
50
51
52
53
46
54
55
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡XIV
副書名	史跡武田氏館跡第1期整備事業（大手門周辺ゾーン）に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書
シリーズ番号	42
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585　山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号　電話055（223）7324
発行年月日	平成21年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査原因
武田氏館跡（たけだしやかたあと）	山梨県甲府市（やまなしけんこうふし） 古府中町（こふちゅうちょう）・昼形（やかた） 三丁目（さんちょうめ）・大手（おおて） 三丁目（さんちょうめ）	19201	57	35° 40′ 14″	138° 33′ 20″	20060205 ～ 20090331	史跡環境整備に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田氏館跡	城館	中世	土塁・石塁・堀跡・溝跡・建物跡・井戸跡・土坑・柱穴	かわらけ・擂鉢・内耳鍋・火鉢・陶磁器・古銭・釘・石臼・五輪塔	

甲府市文化財調査報告 42

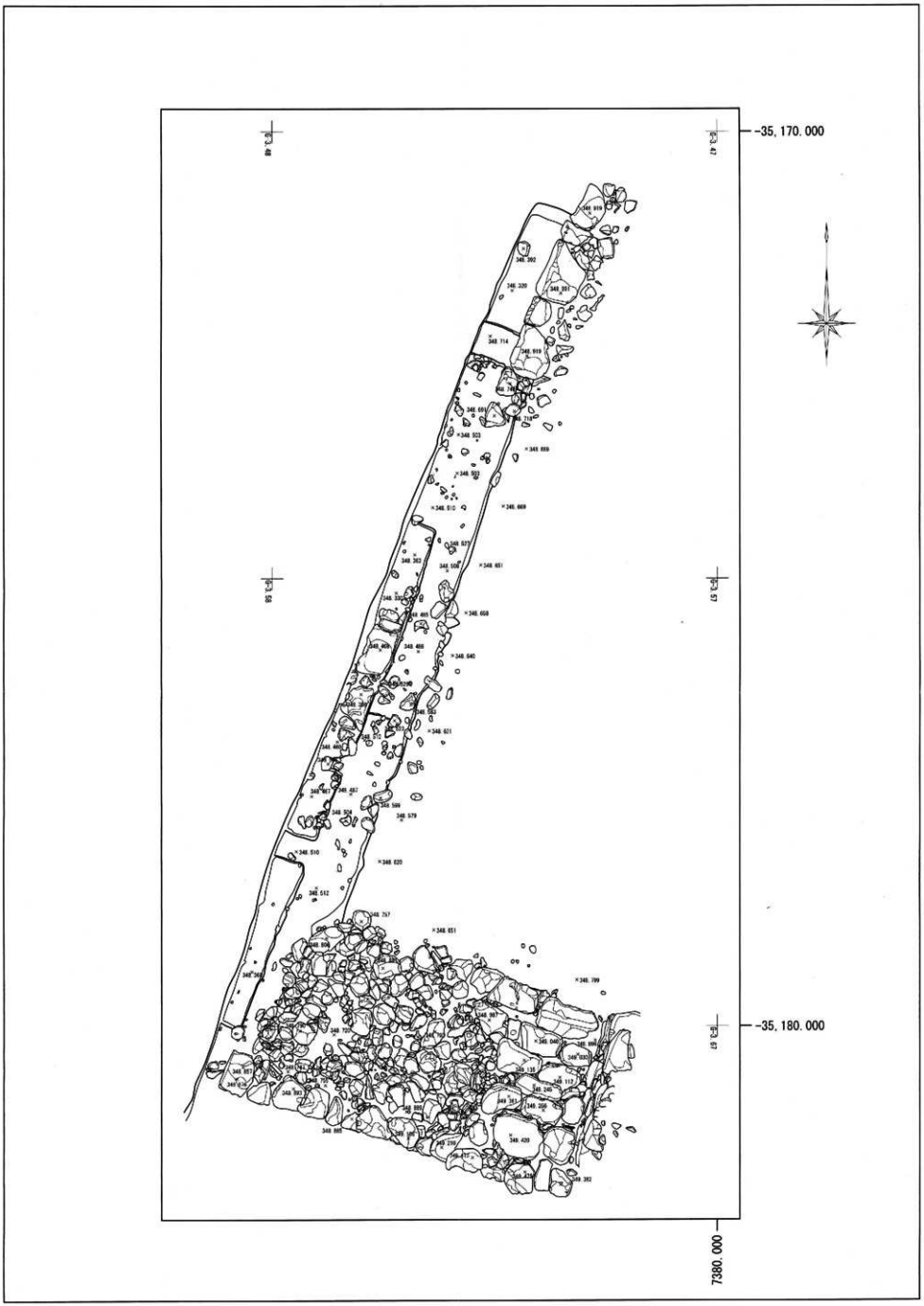
武 田 氏 館 跡 XIV

－ 史跡武田氏館跡第1期整備事業(大手門周辺ゾーン)に伴う発掘調査報告書 －

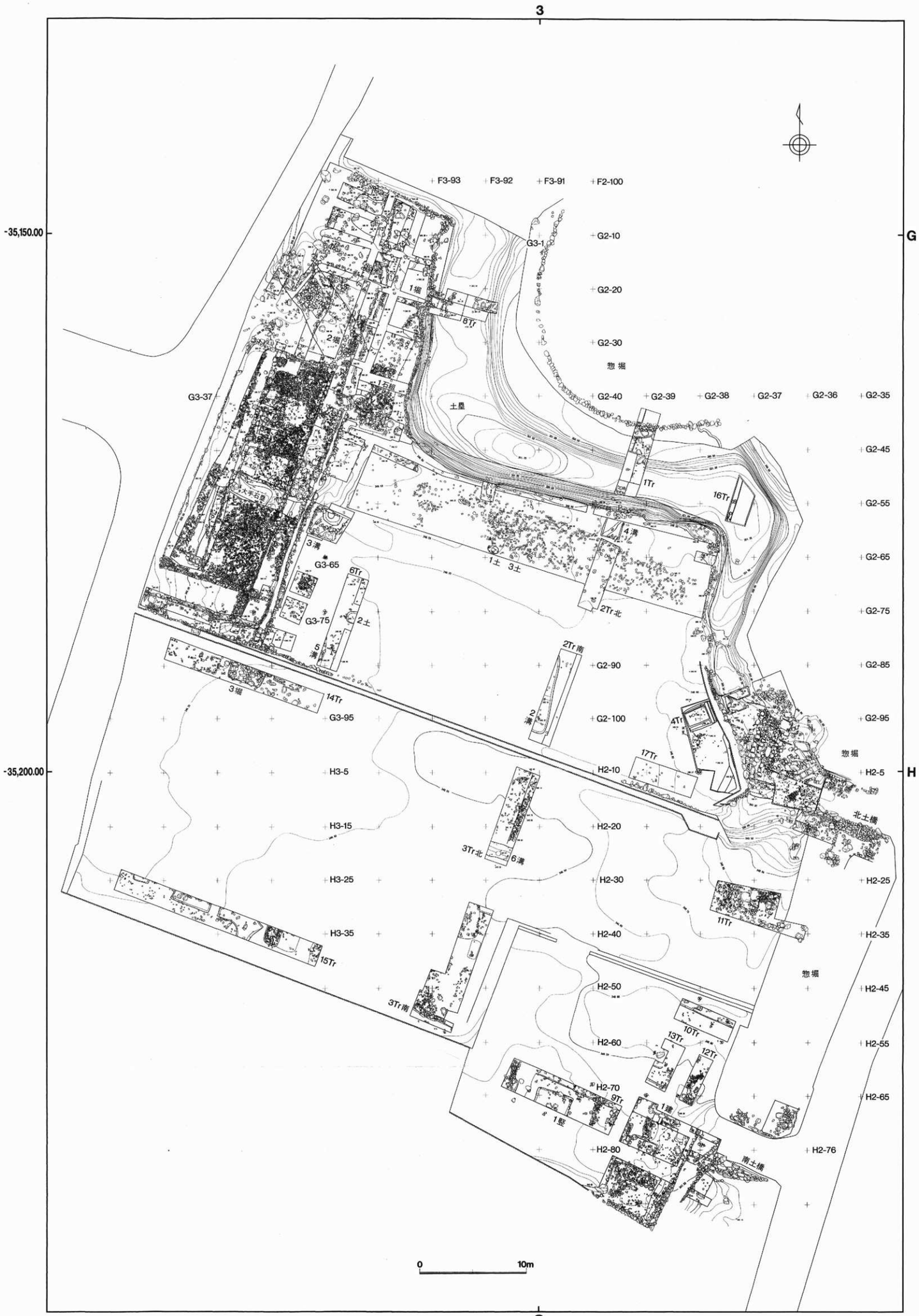
平成21年3月27日

発 行　甲府市教育委員会
〒400-8585　山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL　055（223）7324
FAX　055（226）4889

印 刷　㈱内田印刷所
〒400-0032　山梨県甲府市中央二丁目10－18



大手石塁南階段平面図



武田氏館跡大手調査区全体図